平成 26 年度　ESD ユネスコ世界会議関連フォーラム

運営等業務

報告書

平成 27 年 1 月

特定非営利活動法人　ボランタリーネイバーズ

１．業務目的

2014 年 11 月に、ESD に関するユネスコ世界会議が、愛知県及び岡山県にて開催された。ESD に関しては、環境省においても様々な業務においてその普及啓発に努め、ESD に関するフォーラム等を開催し、ESD 関係者の交流を図り、その推進を図っている。

そこで、世界会議が開催される直前にさらなる盛り上げを図るため、特に今まで十分な啓発を行えていなかった企業における ESD 活動についての情報交換等の場を設ける機会と学校教育における ESD の実践事例についての情報交換等の場等を以下の通り設けた。

（1）企業における ESD 活動についての情報交換等の場を設ける機会

名　称：ESD フォーラム 2014~企業の環境教育から ESD へ~
日　時：2014 年 10 月 30 日（金）14:00～17:00
場　所：名古屋商工会議所 ABC ホール
主　催：名古屋商工会議所、環境省中部環境パートナーシップオフィス、環境省中部地方環境事務所
連携協力：ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会
※　第 2 部 ESD 円卓会議「企業の環境教育から ESD へ」を本業務として実施した。

（2）学校教育における ESD の実践事例についての情報交換等の場

名　称：ESD ユネスコ世界会議　併催イベント
　　ESD 交流セミナー　みんなの ESD 会議～この 10 年の活かしかた～
日　時：2014 年 11 月 12 日(水) 11:30～13:00
場　所：名古屋国際会議場　レセプション B

２．業務内容

（1）企業における ESD 活動についての情報交換等の場を設ける機会

①目的

2005 年にスタートした国連「持続可能な開発のための教育の 10 年」が今年度で終了する。この 10 年間で企業が「ESD」をどのように捉え、実践してきたか、また今後どのように実践しようとしているかを企業の実施する環境教育から明らかにする。

②概要

タイトル：ESD フォーラム 2014~企業の環境教育から ESD へ~
日　時：2014 年 10 月 30 日（金）14:00～17:00
場　所：名古屋商工会議所 ABC ホール
参加者：105 名
プログラム：第 2 部 ESD 円卓会議「企業の環境教育から ESD へ」
　　2005 年にスタートした国連「持続可能な開発のための教育の 10 年」が今年度で終了する。

企業が「ESD」をどのように捉え、どう実践してきたか、また今後どのように実践しようとしているのか等、持続可能な経済、社会を担うべき企業との対話を行った。

連携協力：ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会

※第 1 部（14:00～15:10）は、名古屋商工会議所主催によるフォーラムを実施。「ESD ユネスコ世界会議・関連イベント」についての説明、企業の環境教育取組事例の紹介をした。第 2 部 ESD 円卓会議「企業の環境教育から ESD へ」を本業務とした実施した。

③スケジュール

・全体

時 間	内 容
12:00～12:45 (45)	第 2 部コーディネーターと打合せ
12:45～13:30 （45）	第 2 部出演者打合せ　会場確認等
13:30～14:00 （30）	開場、受付開始
14:00～14:05 （5）	主催者代表挨拶　名古屋商工会議所　環境教育委員長　佐々木孝治氏 司会：鈴木Ｇ長（名古屋商工会議所）
14:05～14:20 （15）	プロローグ　ESD ユネスコ国際会議・関連イベントについて 橋本　博巳氏（ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会事務局次長）
14:20～14:30 （10）	第 1 部　企業の環境教育事例集「企業が取り組む環境教育～ESD の普及に向けて～」の紹介 小川　光成氏　（名古屋商工会議所主任調査役）
14:30～15:10 （40）	企業の環境教育事例発表（４社） ●㈱加藤建設「エコミーティングという取り組み」（10） ●㈱ナゴヤキャッスル「ECO ソムリエ活動で環境人材を育てる」（10） ●㈱エステム「排水処理技術・法規制の教育でビジネスを広げる」（10） ●東邦ガス㈱「自治体とのオリジナル環境コラボ企画を展開」（10）
15:10～15:20 （10）	【休憩】
15:20～16:35 （75）	**第 2 部　ESD 円卓会議「企業の環境教育から ESD へ」** **趣旨説明（5）　進行：中部環境パートナーシップオフィス** **１．全国の企業の ESD 取組と名古屋商工会議所の取組について（10）** **川嶋　直氏（(公社)日本環境教育フォーラム理事長）** **２．ゲストからの話題提供**

	●笹谷秀光氏（株式会社伊藤園常務執行役員 CSR 推進部長）(15) **●百瀬則子氏** **（ユニーグループ・ホールディングス株式会社執行役員 グループ環境社会貢献部長）** **●鳥原久資氏（株式会社マルワ代表取締役）** **●山田厚志氏（株式会社山田組代表取締役）** **【論点】 パワーポイント各 2 枚程度にまとめていただく。** **①なぜ ESD に取り組んだのか（15）** **②ESD 取組の特徴は（15）** **③取り組んだことにおける変化とは（社内・社員・地域他）（15）** **コーディネーター 川嶋 直氏（(公社)日本環境教育フォーラム理事長）**
16:35～16:55（20）	**まとめ 川嶋 直氏×中部環境パートナーシップオフィス** **フロアとの意見交換・質疑応答**
16:55～17:00（5）	**閉会のあいさつ 環境省中部地方環境事務所 所長 池田善一**

・第 2 部詳細

時 間	内 容	備 考
15:20～15:25（5）	［主旨説明］ 中部環境パートナーシップオフィス	※資料確認 ※ゲスト紹介
15:25～15:35（10）	［第 1 部についてのコメント］ 名古屋商工会議所の取組と全国の企業の ESD 取組 川嶋 直氏 （(公社)日本環境教育フォーラム理事長）	※第 1 部で報告のあった、4 社の取組へのコメント、メッセージ、全国で ESD に取り組む企業や、持続可能な生産・流通を担当されていて、今後の企業に期待することなど、自己紹介を兼ねて話す。
15:35～15:50（15）	［話題提供］ 伊藤園の ESD の取組 ●笹谷秀光氏 （㈱伊藤園 常務執行役員 CSR 推進部長）	※伊藤園様の ESD 取組についてのご紹介。
15:50～16:05（15）	［話題提供］ ■なぜ ESD に取り組んだのか ●百瀬則子氏 （ユニーグループ・ホールディングス㈱執行役員） ●鳥原久資氏 （株式会社マルワ代表取締役） ●山田厚志氏 （株式会社山田組代表取締役）	※各企業（伊藤園様も含めて）が ESD に取り組んだきっかけ、理由について述べていただき、「企業が ESD に取り組む理由、きっかけ」をまとめる。
16:05～16:20	■ESD 取組の特徴は	※各企業（伊藤園様も含めて）の

（15）	●百瀬則子氏 （ユニーグループ・ホールディングス㈱執行役員） ●鳥原久資氏 （株式会社マルワ代表取締役） ●山田厚志氏 （株式会社山田組代表取締役）	ESD 取組の特徴についてお話しいただき、多様であるが、大切にしている点を整理してまとめる。今後企業が ESD に取り組む上で、「大事な視点や対象、手法等」についてまとめる。
16:20～16:35 （15）	■取り組んだことにおける変化とは （社内・社員・地域他） ●百瀬則子氏 （ユニーグループ・ホールディングス㈱執行役員） ●鳥原久資氏 （株式会社マルワ代表取締役） ●山田厚志氏 （株式会社山田組代表取締役）	※各企業（伊藤園様も含めて）の ESD 取組をしたことによる変化についてお話しいただき、「ESD に取り組む価値」についてまとめる。
16:35～16:55 （20）	［まとめ］ ●川嶋　直氏×中部環境パートナーシップオフィス ［フロアとの意見交換・質疑応答］	
16:55～17:00 （5）	［閉会のあいさつ］ ●環境省中部地方環境事務所 所長 池田善一	

④第 2 部ご出演者

●笹谷　秀光氏（株式会社伊藤園 常務執行役員 CSR 推進部長）

東京大学法学部卒業。1977 年農林省（現農林水産省）入省。人事院研修で 1981-1983 年フランス留学、外務省出向（1987-1990 年在米国日本大使館一等書記官）農林水産省にて、中山間地域活性化対策、食品流通対策、国際経済交渉等を担当。2005 年環境省大臣官房審議官、2006 年農林水産省大臣官房審議官、2007 年関東森林管理局長を経て、2008 年退官。同年伊藤園入社、知的財産部長、経営企画部長等を経て 2010 年より取締役。2014 年 7 月より現職。CSR・環境を担当。

著書：「CSR 新時代の競争戦略-ISO26000 活用術」（2013 年日本評論社）

●鳥原　久資氏（株式会社マルワ 代表取締役）

1958 年愛知県名古屋市生まれ。愛知教育大学を卒業後、小学校中学校の教師を 8 年務め、1989 年株式会社丸和印刷（現株式会社マルワ）に入社。1995 年に代表取締役社長に就任、現在に至る。2003 年に ISO14001 を取得後、環境活動に力を入れている。社員を巻き込んだ CSR 活動には多くの方から評価をいただき、多数の見学者が会社を訪問、また講演依頼も多い。

●百瀬　則子氏（ユニーグループ・ホールディングス株式会社 執行役員 グループ環境社会貢献部長）

1980 年北海道酪農学園大学卒業後、ユニー株式会社入社。学生時代から社会人になってからも、8 年間カブスカウトのリーダーとして奉仕活動を実践。その経験から、環境部に配属後「子ども環境学習」

「自然探検」「モンキーサマースクール」とユニーの ESD 活動として、未来を担う子ども達に、体験型学習を実施してきた。今後は、さらに「環境にやさしいお買い物」をとおして、消費者や高齢者に対してもESDを実施し、「誰もが幸せに生きる未来」を目指す。

●山田 厚志氏（株式会社山田組/株式会社ナックプランニング 代表取締役）

1954 年愛知県名古屋市生まれ・名古屋育ち。愛知教育大学大学院芸術教育学専修。デザインや美術教育を学んだキャリアとは一見無縁の土木業界に飛び込み、両者の違いではなく「問題を乗り越えて創り出す」という共通する営みに着目して企業経営に取り組んでいる。業界の慣習を破って社会に向かって積極的に発信する活動に取り組み、特に地域の防災大会や、なごや環境大学教育講座をそれぞれ 10 年連続で開催中。企業が担う ESD の取り組みは、なによりその企業の持続可能性を確かなものにする活動でなければならないというのが持論。

[コーディネーター]

川嶋 直氏（公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長）

1953 年東京都調布市生まれ。1980 年山梨県清里のキープ協会に就職。1984 年から環境教育事業を担当。インタープリターとして、自然の中での参加体験型の環境教育プログラムの開発・人材育成を行ってきた。2010 年にキープ協会役員を退任後は、KP 法(紙芝居プレゼンテーション法）を駆使した研修ファシリテーター、企業・行政・NPOの環境教育アドバイザー。公益財団法人キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー。自然体験活動推進協議会理事。日本環境教育学会理事。

著書：「就職先は森の中～インタープリターという仕事」（1998 年小学館）

「KP 法～シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション」（2013 年みくに出版）

[進行] 新海洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィス）

⑤第 2 部　議事録

趣旨説明　新海洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィス）

この円卓会議では、11 月に開催される ESD ユネスコ世界会議を前に、企業が「ESD」をどのように捉え、どう実践してきたか、また今後の展開等について、持続可能な経済、社会を担うべき企業との対話を行います。東京から株式会社伊藤園の笹谷さん。地元で建設業を営んでいらっしゃる株式会社山田組の山田さん。地元の印刷業、株式会社マルワの鳥原さん。そしてユニーグループ・ホールディングス株式会社の百瀬さんをお招きし、

①なぜ ESD に取り組んだか

②どんな ESD に取り組んでいるのか。

③ESD に取り組むとこんな良い事、こんな面白い事、こんな変化があった

という 3 つのポイントでお話しいただきます。

そして最後に、本日のコーディネーターには、公益社団法人日本環境教育フォーラムの川嶋さんをお迎えし、ここからは川嶋さんのコーディネートで進めていただきます。

川嶋　直氏　（(公社)日本環境教育フォーラム理事長）

日本環境教育フォーラムの理事長をこの 6 月から務めています。山梨県清里の KEEP 協会というところで 30 年間ほど環境教育を実施しています。

最初に、ESD について、僕なりに整理をしたのでそれをお話します。

ESD は、SD、Sustainable Development と、E の Education を分けて、「持続可能な社会の実現の為の教育の働き」と考えると良いと思っています。「全ての教育は持続可能な社会のためにある」、また、全ての E に SD をという考え方もあると思います。ESD の「S」というのは、まさに「持続可能な」という考え方ですが、よく経済・社会・環境の 3 つのボトムと言われていますが、横に並んでいるのではなくて、社会の安定があるから経済が安定し、環境の安定があるから社会は成立する。まさに生態系、物質循環と生物多様性の安定があって、社会も経済も安定する、持続するという「S」の考え方も一つあります。

それから「D」、開発を表す Development。開発と聞くと、大きな建設会社をデベロッパーと言われることが起因しているのか、ブルドーザーで山を掘るといったイメージもあると思いますが、封筒は英語で Envelope、「封をする」という意味ですね。Develop は封をしたものを開くことを意味しています。つまり、僕たちの可能性を開いていくのが Develop です。決して何かを破壊するという意味ではないことを、強く申し上げます。

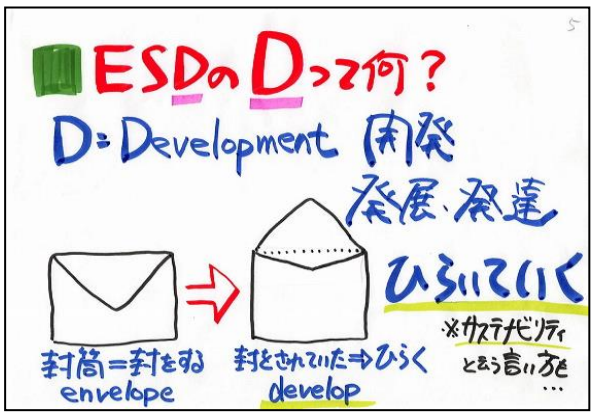
次に、ESD の「E」、Education、教育についてお話します。”CEPA”「セパ」と読む、これは数年前の名古屋で開催された生物多様性条約の会議の中でも大事な言葉として条約に入っています。CEPA とは、Communication、Education、Public、Awareness。つまり、何かを進めて行くには条例等のいろいろな決まり事だけでなく、みんなに良く理解してもらうことが大事ということです。ESD の「E」も、教育という意味だけにしてしまうと少し幅が狭く、CEPA それぞれの頭文字を、Capacity building（みんなの能力を開発する）、

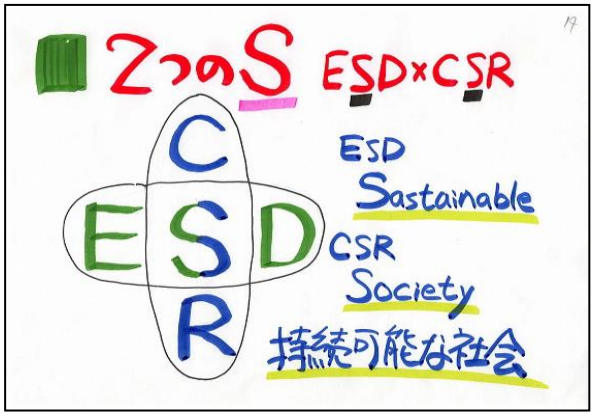
Empowerment（力を付ける）や、Participation（参加する）、Action や Awareness（行動や気づき）といったことも含めた、これが「E」の意味ではないかと思います。

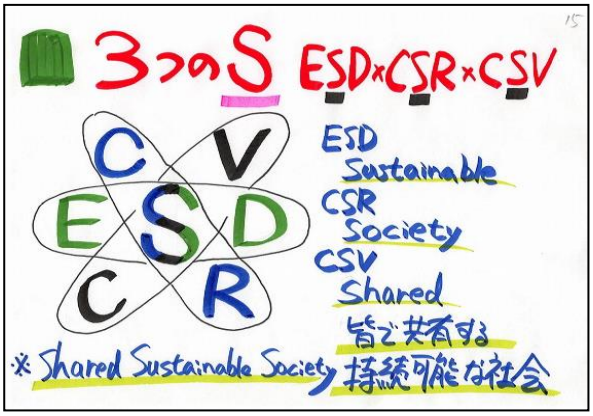
2003 年に ESD の民間組織、認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J）という組織が発足しましたが、その時にみんなで作った図を紹介します。開発教育、ジェンダー、平和、人権、環境、多文化共生、福祉という、様々な教育、ばらばらにあった個別の課題教育が、持続可能な未来のためには全て必要な教育であり、その全体を ESD と呼んでいこうという動きがあった。更に今は、こういうばらばらの考え方ではなく、全てに全てが関係している、いわゆる「個別の課題教育」から「社会的な課題を解決するための教育」へと変わっていくのが ESD です。

次に僕が考えたこの図を紹介します。CSR（Corporate Social Responsibility）の Society、社会を意味する「S」と ESD の Sustainable の「S」をくっつけました。この 2 つをくっつけると、まさに「持続可能な社会に向けたCSR」、「持続可能な社会に向けたESD」ということです。CSRを進めていくためにも社員も皆さんのESD、あるいは地域の方に向けた ESD が大事であると 5、6 年前に考えました。

最近はもっと複雑になり、「CSV(Creating Shared Value)」という言葉が出てきました。「CSV」はマイケル・ポーターが「もっと本業に入っていった企業がつくる価値を、商品を買って下さる皆さんと価値を共有していきましょう」と提唱しました。この「CSV」の「S」は Share、つまり共有するという意味です。ESD の「S」は Sustainable、CSR の「S」は Society、CSV の「S」は Share、つまり「みんなで共有する持続可能な社会」、そのために ESD があり、CSR があり、CSV があると考えます。僕はこのような整理の仕方、形を提案します。







話題提供

株式会社伊藤園の ESD の取り組み

笹谷　秀光氏（株式会社伊藤園　常務執行役員 CSR 推進部長）

伊藤園は創業 50 周年を迎え、売上高 4,377 億円、全国営業網が 201 ヵ所、小選挙区よりも広いところには必ず 1 ヵ所拠点があり、地域密着の活動をしています。そして主力のお茶では原料茶葉は日本の約 1/4 取り扱っています。

今回は「みんなで考える」ことがテーマなので、まず「世界一田めになる学校 in 東京大学」をご紹介します。これは、田んぼのためになる学校と言う、田んぼをテーマにした、生物多様性の権威、東京大学の鷲谷いずみ先生が校長先生を務めている、小学生の実践学習の企画です。実際に田んぼの様子を見に行ったり、専門の先生から勉強したりする実践的プログラムです。宮城県大崎市、新潟県佐渡市、兵庫県豊岡市、栃木県小山市の 4 市が協同で主催し、伊藤園はパートナー企業として参加しています。自治体連携、大学、JA、NPO、企業と多様な関係者が集まっている点が素晴らしいところです。7 月には私は、東京大学弥生講堂で実施された、「世界一田めになる学校 in 東京大学」で社会科の講師として登壇しました。伊藤園の取組を例に、「みんなで明日について考える、世界が共感する日本の良いものを広げる」などについてお話ししました。

今日は企業の ESD を考える円卓会議です。テーマは「企業は今何をすべきか」です。ここでポイントになるのは、社会・環境課題が複雑化し、難しくなった今、「みんなで学んでみんなで協力しなければいけない」ということです。企業に求められることは 3 つです。まず一つ目に、社会対応力、つまり社会との接点、社会とどう対応するか、自社が社会とどのように関係するかです。二つ目に、ウィン・ウィン関係構築力、あなたにも良い、世の中にも良いけど、企業としても良いウィン・ウィン関係を築くことです。そして三つ目に、これらを理解する社員を育てる、グローバル時代の人材育成力です。この 3 つを合わせれば新たな経営戦略になるだろうと言うのが私の考え方です。

私は ESD をシンプルに「ともに知る」「学ぶ」「つながる」を原点に据えて考え、それによって人づくり、組織づくり、地域づくりにつなげていくことだと考えています。そのためにはワークショップのような形で「ワイワイガヤガヤ」、双方向で意見を交換することが大事です。そして、今日は「何か気づいたなあ」と、参加された方に「気づき」を持って帰ってもらうためのプレゼン力とコミュニケーション力が問われていると考えています。また、そういう力を養う手法も ESD なので、企業の人

のみならず、みんなに必要です。

まず、社会対応力については、日本には、古くは近江商人が言った「売り手よし、買い手よし、世間よし」という、「三方よし」の考え方があります。今は、この「三方よし」に「明日のために、子孫のために、環境のために」といった意味が含まれる持続可能性を入れ込んで、「三方よし」構造を作っていくことが大切だと考えます。そして、この構造をいかに作るかが大切ですが、黙っていても出来るものではありません。自社の原点、例えば伊藤園であれば、社是の「お客様を第一とし 誠実を売り 努力を怠らず 信頼を得るを旨とする」の中の「（社会の）信頼を得るを旨とする」という点が、社会的信頼の確保という原点です。これが伊藤園の CSR の DNA と言えます。これに似たことは皆さんの企業にもあると思います。現に身近にある社是のような点からスタートするのが、ESD 的な発想です。

次に、この「売り手よし、買い手よし」の売り手・買い手のそれぞれが学ぶ必要がある。まず売り手である企業は社員育成で学ぶ、買い手もパートナーとして一緒に学び、かつ地域づくりに繋がる学びにしていく。こういう構造にするためには、「三方よし」に加えて心得とされている「陰徳善事」に注意が必要です。「良いことは黙ってやる」「わかる人にはわかる」という意味です。これは美徳ですが、グローバル時代にこれでは相手に伝わらないのでこれを修正して、的確に発信していくことが大切です。今は「発信型三方よし」を目指していくべきです。

さらに、社会で求められる活動としては、「社会的責任の手引」ISO26000 が示した世界合意の課題設定を見ると参考になります。「組織」、「人権」、「労働慣行」、「環境」、「公正な事業慣行」、「消費者課題」、「コミュニティへの参画及び発展」の 7 つをバランスよく取り組むことがポイントです。その際に大事なことは、全体的なアプローチと相互依存性であり、これに本業を使って取り組むと得意分野なので効果が高くなります。

先ほどの「世界一田めになる学校 in 東京大学」に当てはめてみましょう。「労働慣行」では伊藤園としての参加により社員教育になります。「環境」は生物多様性、そして農業は生態系サービスとしても捉えるべきです。それから「公正な事業慣行」は JA、企業が参加するという参加の仕方、「消費者課題」としては「コウノトリ米」などの付加価値商品の提供です。そして最後の「コミュニティへの参画及び発展」がすごく大事で、現場での実践教育ができますし、コミュニティの理解や世界遺産・ラムサール条約などの学習にもつながります。これだけ総合的で、全体的なアプローチで出来上がっているのが、この事例の特色です。

もう一つの気づきは、生徒父兄、4 市、NPO、東京大学、JA、伊藤園、多様な関係者が集まり、みんなで協働して取り組んでいることです。ますます複雑化する社会課題の解決のためには、あらゆる組織がみな社会の一員として責任があり、相互補完しながら社会的対応を行っていくことが大切です。このプロジェクトはこのような素晴らしさがあると思い、伊藤園はこのプロジェクトに参加しています。

「ESD の 10 年・世界の祭典」フォーラム（阿部治代表）が、日本の ESD の代表的取組を「ESD ジャパンモデル」としてまとめました。その中に企業の ESD ジャパンモデルとして伊藤園の ESD をご紹介いただきました。そこで、これを世界会議に向けて発信していきたいと思っています。

ESD「伊藤園モデル」の主要ポイントを「おもてなし」「もったいない」「里山」の 3 つをテーマから、今回はエッセンスだけですが紹介します。まずは「里山」です。「地域とともに里山・世界遺産を守る」。伊藤園は「自然が好きです」というのがキャッチフレーズで、かけがえのない自然と世界遺産を後世に引き継ぐ里山イニシアチブにも参加しています。明日、石川県で里山イニシアチブの会合があり、そこで伊藤園の活動についてのプレゼンをします。当社は全国でお世話になっているので、「お茶で日本を美しく。」キャンペーンも行っています。そして里山に関連の深い農業事業として、茶産地育成事業を展開しています。日本農業の耕作放棄地や有害鳥獣の問題解消に貢献して、機械化農業を展開しています。地域では雇用が生まれ、みなさんに笑顔と元気が生まれ、素晴らしいパートナーが育っています。建設業から

転職した女性社長「伊藤園の農業技術部が 1 か月に一回来るので安心です」と農業指導について述べています。また、今は若者が農業に新規に就業するのは非常に難しい。工藤さんは、「伊藤園が全量買い上げ契約をしてくれるので経営が安定します」といいます。経営安定するなら、お父さんも一緒にやろうと親子で参加しています。このように本業を通じて、パートナーが生まれ、人づくり、地域づくりに貢献しているのが伊藤園のスキームの特色です。

「もったいない」については、「茶畑から茶殻まで」という価値連鎖の流れの中で「茶殻リサイクルシステム」を構築しています。茶殻はたくさん出ますが、ほとんどが農業の堆肥と肥料になります。その一部を異業種企業と共に、リサイクルの輪を広げて紙製品・ボードなどの付加価値製品づくりに取り組んでいます。例えば、折りながら香る「茶殻の折り紙」で、協力企業と連携して折り紙教室を行っています。その他、茶殻リサイクル製品は出荷用の段ボール箱などの本業系のものから本業系以外のものまで多様にあります。リサイクルの輪が次々に広がっているのが特色です。

「おもてなし」は、メーカーにも、サービス業にも必要なことです。お茶のメーカーとして、当社では、おいしいお茶の入れ方教室で、日本のお茶文化と伝統を伝えることが出来ます。若者に手もみ茶を教える社員や食育について和食に関連付けて教える社員もいます。この活動のベースとなるのは、社内資格のティーテイスター（茶資格）制度です。上級者が下級者を教えるという点も特色です。5,300 名の社員の内約 1,600 名がティーテイスターの資格を保有し、お茶の専門家として様々な場所でお茶の入れ方セミナー等を展開しています。

以上の活動にあたって、伊藤園は、ESD を「ともに学ぶ、つながる、明日の未来。」と捉えています。2014CSR 報告書の 29-30 ページにあるように、ジグソーパズルのように社員みんながつながり、パートナーの皆さんとも一緒につながっていくというイメージです。このジグソーパズルに出ている写真は 201 ヵ所の支店長や営業の課長級の全員を取り上げて作成しました。これが伊藤園の ESD です。

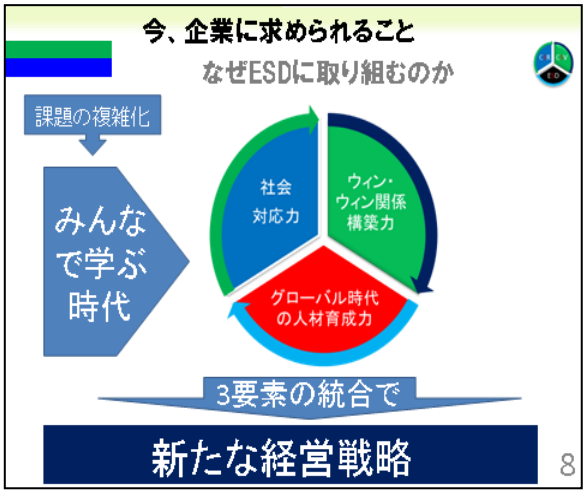
ESD 伊藤園モデルの特色は、①本業を活用した教育 CSR/ESD で、②ESD/CSR/CSV を統合して、③バリューチェーン全体での持続可能な生産を担い、④消費者の参加と情報提供による持続可能な消費への貢献、⑤パートナーとの協働・連携を重視した活動の 5 点です。この関連で、環境省が ESD ユネスコ世界会議に向けて、「ESD とは何か」を、「未来への五七五調メッセージ」の自由俳句の形で表現する募集を行いました。環境大臣賞には「できること　関心持つこと　動くこと」という、素晴らしい俳句が選ばれました。環境省からのこの自由俳句を通じて幅広く ESD の周知を図りたいとの要請に応じて、「お～いお茶」製品の一部のパッケージに掲載する形で当社として協力することになりました。

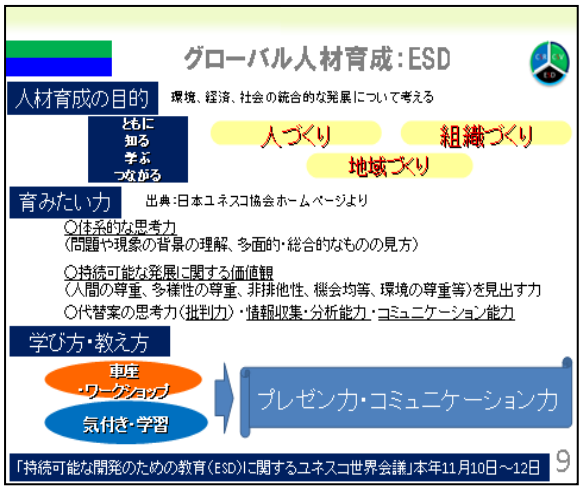
私は ESD の基本は「人と人とのつながり」であると考え、「学び」で 3 つの広がりを目指していくべきだと考えております。①良いことは地理的に広げる。名古屋での発信は日本に、世界に広げる。②良いことは時間的にも広げる、良いことはまたやろう。③情報的に広げる。情報を広げることが一番難しいのですが、今回のフォーラム・円卓会議といった場の設定には敬意を表し感謝申し上げます。このような場は重要で、ここから「人づくり、組織作り、地域づくり」の ESD の輪が生まれてくるということを確信しています。

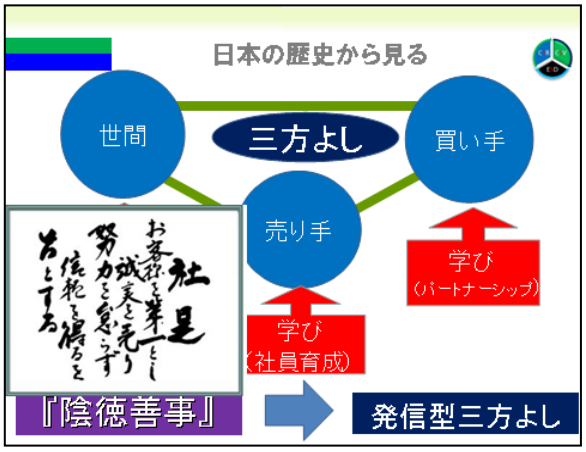
2013～2014 年は富士山、和食、富岡製糸工場、和紙など次々に世界遺産に登録されました。日本の素晴らしいものが世界に認められ、2020 年には東京五輪が開催されます。それらをきっかけに良いものをつくり、その後によき遺産として後世に残していこうというのが現在の課題です。みなさんも本日の円卓会議で聞いたことから刺激を受けて、自分は 2020 年までに何をしているかと問題意識を持ちながらこの会議に参加していただき、世界が共感する日本の良き伝統を発信してください。私が若い頃は外に出て発信していこうというアウトバウンドの流れでしたが、今はむしろ世界をお迎えしておもてなしをする、というインバウンドでの発信も重要な時代です。そういう流れの中で「おもてなし」「もったいない」「里山」といった日本の素晴らしい概念をみんなで学び、世界に発信していきましょう。これが、私が本日伝え

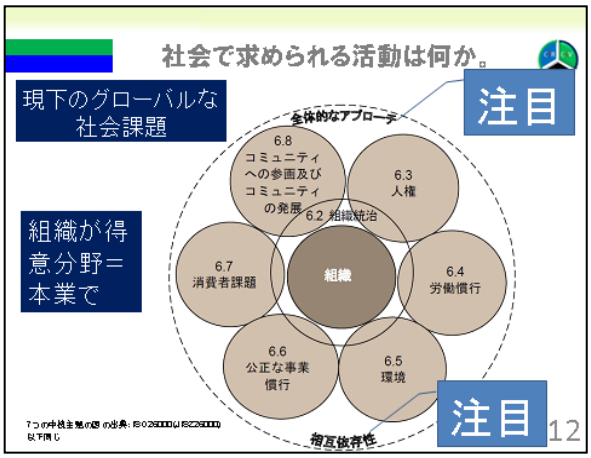
たいメッセージです。

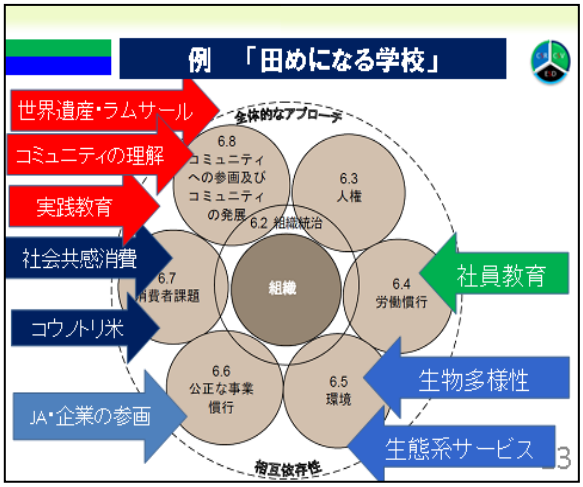
では、伊藤園は ESD により、何を目指すか。それは Communi”tea”の形成です。

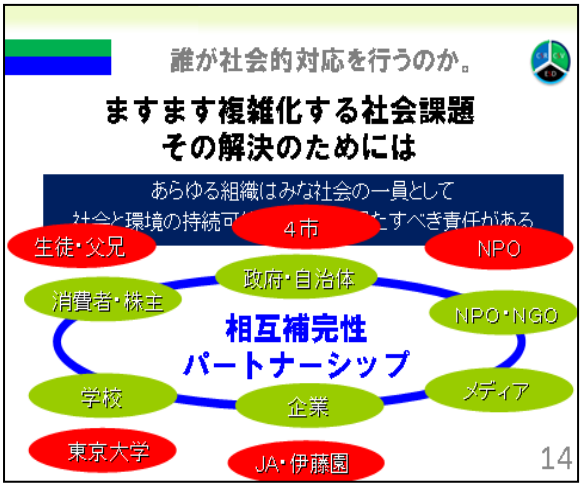


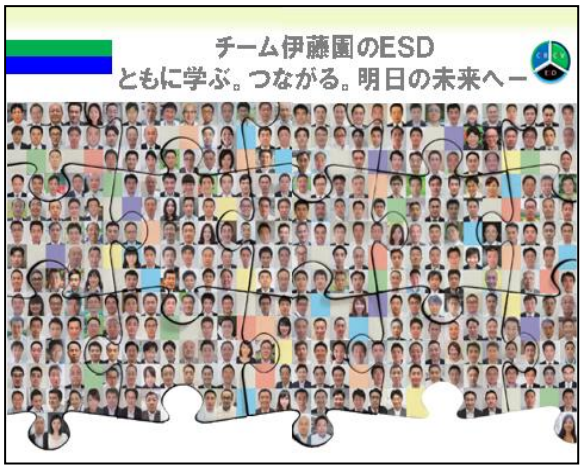




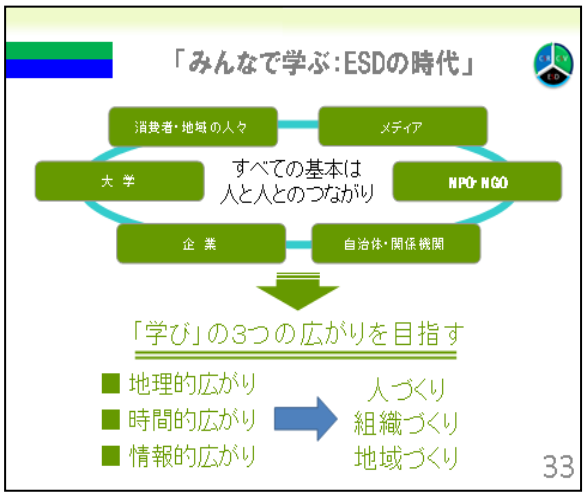


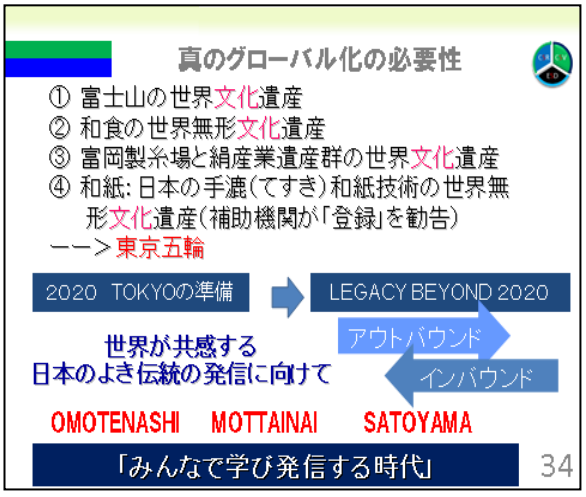

例　「田めになる学校」
世界遺産・ラムサール
コミュニティの理解
実践教育
社会共感消費
コウノトリ米
JA・企業の参画
社員教育
生物多様性
生態系サービス
全体的なアプローチ
6.8 コミュニティへの参画及びコミュニティの発展
6.3 人権
6.2 組織統治
6.7 消費者課題
組織
6.4 労働慣行
6.6 公正な事業慣行
6.5 環境
相互依存性
3


誰が社会的対応を行うのか。
ますます複雑化する社会課題
その解決のためには
あらゆる組織はみな社会の一員として
4市
生徒・父兄
NPO
政府・自治体
消費者・株主
NPO・NGO
相互補完性
パートナーシップ
学校
企業
メディア
東京大学
JA・伊藤園
14


チーム伊藤園のESD
ともに学ぶ。つながる。明日の未来へ－

伊藤園ESDグローバル・アクション・プログラム
ESD　伊藤園モデル
伊藤園のESD取り組みの特徴
1. 本業活用の教育CSR/ESD
2. CSR/CSV/ESDの統合
3. バリューチェーン全体での持続可能な生産
4. 消費者の参加と情報提供による持続可能な消費への貢献
5. パートナーとの協働重視
世界のティーカンパニーへ
29


「みんなで学ぶ：ESDの時代」
消費者・地域の人々
メディア
大　学
すべての基本は
人と人とのつながり
NPO・NGO
企　業
自治体・関係機関
「学び」の3つの広がりを目指す
地理的広がり
時間的広がり
情報的広がり
人づくり
組織づくり
地域づくり
33


真のグローバル化の必要性
① 富士山の世界文化遺産
② 和食の世界無形文化遺産
③ 富岡製糸場と絹産業遺産群の世界文化遺産
④ 和紙：日本の手漉（てすき）和紙技術の世界無形文化遺産（補助機関が「登録」を勧告）
－－＞東京五輪
2020　TOKYOの準備
LEGACY BEYOND 2020
アウトバウンド
インバウンド
世界が共感する
日本のよき伝統の発信に向けて
OMOTENASHI　MOTTAINAI　SATOYAMA
「みんなで学び発信する時代」
34

話題提供　テーマ①　「なぜ御社が ESD に取り組んだのか」

百瀬　則子氏（ユニーグループ・ホールディングス株式会社　執行役員　グループ環境社会貢献部長）

スーパーマーケットのユニーです。ユニーの ESD のテーマは「未来に地球をまるごととっておく」です。

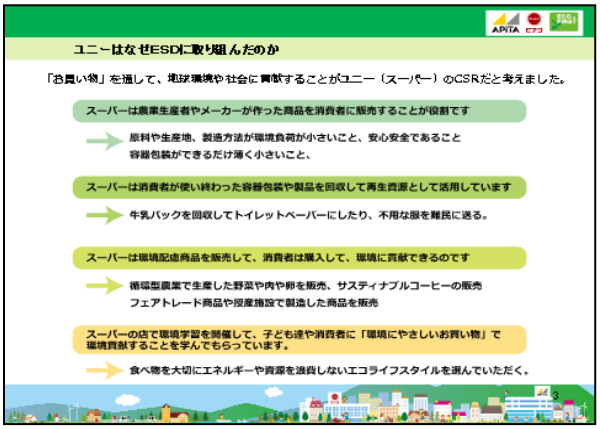
私たちは自然に恵まれて、便利で快適な生活を送っています。しかし、地球温暖化や自然破壊によって、生物の絶滅、食料やエネルギーが足りない人たちが地球上にはたくさんいます。世界中の人々が日本人と同じ生活をしたら、地球が 2.3 個必要だと言われています。ESD は「今生きている私たちも、そしてこれから生まれてくる子どもたちも、みんながずっと一緒に、幸せに、暮らしていくにはどうしたら良いのかを考えて、行動するための教育」だと思い、ユニーは ESD に基づいた環境や社会貢献活動を行っています。

スーパーマーケットの ESD とは、お買い物を通して、地球環境や社会に貢献することだと考えています。お客様がお店に来たら ESD、お買い物をしたら ESD と考えています。私達スーパーマーケットは農業生産者やメーカーが作った商品を消費者に販売することが役割です。

では、このキュウリはどうやって、どんな水で、どんな堆肥でつくられたのだろうか。このお茶はどこで作られたのだろう。例えば、紅茶を作った国の人は幸せに暮らしているのだろうか。商品の物語や背景をお客様に伝えるができます。また、商品は容器包装に入って販売しています。飲み終わったペットボトル、アルミ缶、トレイをどうするのかを考え、出来るだけ小さくしたり、石油ではなく植物で作られたプラスチックを使ったり、使い終わったモノを集めてリサイクルするといったことをスーパーマーケットがやることで、お客様と生産者がつながって、そしてリサイクルともつながる。それがスーパーマーケットの担うべき役割ではないかと考えています。

また、スーパーマーケットが安全安心な商品を売ることで環境や社会貢献、ESD の活動に取り組み、お客様はその商品を買うことで ESD 活動をする、そんなスーパーマーケットにしたいと考えています。

ユニーでは、全店で環境学習を行っています。これは店長がリーダーになって、地域の子ども達を対象に実施するもので、バックヤードツアーや店内で活動するので、居合わせたお客様や、従業員やテナントなどにも関心を持ってもらう機会になっています。また、お店で環境イベントを行うことで、たまたま買い物に来たお客様が知らないうちにリサイクルの仕組みや、環境配慮商品などの展示を目にしたり、情報を耳にしたりすることで関心を持って、何か活動しようかなと思ってもらえることがお店で実施する ESD だと考えています。買い物を通してお客様が食べ物を大切にする、エネルギーや資源を浪費しないエコライフスタイルを始めようかしらと思っていただきたいと考え、ユニーは取り組んでいます。



鳥原　久資氏（株式会社マルワ 代表取締役）

弊社の ESD の取組みの特徴について、本日の配布資料 3 点を説明します。マルワの CSR レポートは社員と共に 1 年間かけて歩んできた成果です。それから年 4 回発行しているニュースペーパー「ぷりんトーク」で、この 1 年間はマルワの ESD の取組みをシリーズで掲載しました。最後にニュースペーパー「shin CSR マガジン」は全日本印刷工業組合連合会が CSR を推進するための冊子をこの 8 月から発行し、第 1 号では当社を取り上げていただきました。

さて、「なぜ ESD なのか」という質問についてお話します。当社は印刷会社が母体です。印刷会社の規模は実は、90%が 20 人以下の会社です。当社は 30 人弱で、中堅会社になります。それくらい印刷会社は小さい規模で構成され、発信することがあまり上手くない業界です。当社は 11 年前、2003 年に ISO14001（環境マネジメントシステム）を取得しました。この環境の ISO の前年に品質マネジメントシステム、そして 2005 年に情報マネジメントシステムと 3 つの ISO を取得したことがきっかけでした。これを社員の力で運営するためには、係をつくるのではなく全員で取り組むことが必要と考え、その一環として、その活動を委員会として構成してつくっています。委員会組織で全社員が、コミュニティをとりながら運営していることが、経営の力になっています。元々CSR レポートは環境報告書としてつくっていましたが、5 年前からCSR 報告書になりました。「ぷりんトーク」は年 4 回の発行を 17 年間続け、今は 67 号です。ESD ユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会より認定を受けたパートナーシップ事業の一つとしてお客様に発信しています。そして、メッセナゴヤにも、5 年間出ています。昨年もパートナーシップ事業の認定を受け、メッセナゴヤでも ESD を盛り立てています。

ESD という言葉を知った 1 年半ほど前に、私たちがやっているのは ESD だと知りました。そうであれば、小さな会社がこれだけのことをやっている努力、社員の成果を発信しようと思い、取り組んでいます。

もう一つ力を入れているものは、メディア・ユニバーサルデザインです。色弱者、高齢者、外国人に分かり易い取組をするためにこのようなメディア・ユニバーサルデザインを紹介する冊子を作っています。いわゆる商品開発ではなく、メディア・ユニバーサルデザインを発信するカレンダー、ツールを中京大学の学生さんとコラボレーションし作りました。こういった細かな活動を行うことで、持続的な社会を作り上げる担い手を中小企業の目線でやっていきたいと、ずっとこだわってやっています。

「なぜ ESD か」という私の答えは「私どもの大切な商品は社員だからです。」社員が一生懸命やっている活動を全面に出したい。そんな想いでこういった活動を続けています。是非後で冊子を見ていただき、社員の活動、笑顔を、このレポートから読み取っていただけるとありがたいです。

山田　厚志氏（株式会社山田組/株式会社ナックプランニング代表取締役）

日本の全企業の 99.3%が中小企業、そして全労働者の 7 割が中小企業ということで、中小企業のある意味では代表として、緊張してこの場に出て来ました。中小企業でどのような取り組みができるのかを少しでも伝えたいと思っています。この 20 年近く、CSR 活動という言葉もない状態からなんとかこの世の中で建設業・土建屋さんのイメージを変えたいという思いを持って、取り組んできました。27 歳の時に大学教員の立場から、土建屋になり、その中での自分の「居場所」を探すことから始めました。入ってみると、職場の社員が自分の仕事に誇りを抱いていないことに気がつきました。せめて自分は土建屋として働く事を社会から認めてもらいたいと思い、特別なことをしようと様々実施したが、どうやらそうではなくて、「既に大変素晴らしい取組みをしている社員の行いをそのままきちんと発信すれば良い」と気づきました。私たち建設業者は、自社のサイト内で自社の計画に沿ってモノを作っているのではなく、たとえば下水道が普及していない等の地域の課題に対して、様々な悪条件を克服し、安いコストで、納期までにモノを納めるといった作業をしています。私はそれを有償の公益活動と呼んでいます。それをきちんと伝えていけば、社員の利他的な精神、自分を少し押さえてでも地域の為に頑張る、そういう建設人の DNA を伝える事さえできれば、世の中の私たちに対する評価は変わるだろうと思ってやってきました。そのうちに環境貢献といったことが、世の中で非常に注目をされるようになり、それに合わせてやってきましたが、どうもその環境貢献という服が小さくなってきた。活動が様々に広がっていって、環境貢献という服では収まりきらなくなりました。そんな時に ESD に出会い、ワンサイズ大きな服を着ることができて、さらに自社の活動をレビューできたことが

「ESD の効用」だと率直に思っています。当社の取り組みの一つに、本業の防災活動があります。つまり災害に強いまちづくりや、あるいは事が起きてから行って解決する前に、いわゆる防災、減災という予防の段階で貢献することも含め、自社の本業のアピールが、ESD というくくり・視点から発揮できる、ということに気がつきました。併せて ESD で大事な持続可能性が、我々中小企業のような明日をも知れない仕事をやっていますと、本当に大事な概念だと気づきました。持続可能でなければ意味がない。持続可能でなければ、貢献活動も一過性のものに過ぎない。貢献活動を持続可能なものにするためにも、本業を持続可能にしたい。そこをきちんとリンクさせることが、ESD の活動であればできるのではないかと思いましたし、企業はそういったところを得意として、知恵が発揮できることではないか考え、取り組みを始めています。

なぜESDに取り組んだか①

従来のCSR活動のレビュー

① ESD視点から意義確認

「環境貢献」より広い概念が好都合

自社活動を「ESD」的意義で再認識

なぜESDに取り組んだか②

② 防災・まちづくり貢献

当社本業の社会的役割アピールに

③ 持続可能な貢献活動

ビジネスを補強するCSR活動実践

話題提供　テーマ②「御社の ESD の取組みの特徴」

百瀬　則子氏（ユニーグループ・ホールディングス株式会社　執行役員　グループ環境社会貢献部長）

ユニーの元々の環境社会貢献のテーマは「未来の子どもたちに美しい自然を残したい」でした。お店の中で環境学習を始めたのは 2001 年です。そして、「低炭素社会をつくる」、「循環型社会をつくる」、「自然共生型社会をつくる」ことにより、「持続可能な社会」にしようというのが会社の方針です。これを誰がやるか、私たちでできるのかではなく、生産者や運ぶ人がいて、ユニーが販売して、お客様が買って下さって、使い終わったモノは循環資源として再生されてお店に行くというバリューチェーンを目指しています。お客様にユニーがどんな商品を販売して、どう使ってもらえるのかを提案することが大事です。

例えば、この商品はパッケージやゴミがとても少ないですよ。この商品はあなたが飲み終わって持ってきてくださった牛乳パックをトイレットペーパーで、木材資源を使わなくても出来ますよ。そういった提案をすることでお客様にこのトイレットペーパーを買いたいと思ってもらい、そうして循環の環がちゃんと回ることを知ってもらいたい。

誰に知ってもらいたいかを考えたときに、まずは子どもたちです。お店での環境学習、日本モンキーセンターで霊長類について学びながら「命って何なんだろう」「人間って何なんだろう」と学んだり、岐阜県の白川村にあるトヨタ白川郷自然学校で、先人の知恵やエネルギーを学ぶ等、お店や自然や農業体験を通して、子どもたちに持続可能な社会をつくる力を育んできました。

その一番の特徴は、大きなお店でも小さなお店でも、ぴかぴかなお店でも 30 年経ったお店でも、どこのお店でも環境学習を実施しています。環境学習の隊長、リーダーは店長です。お店のバックヤードツアーでは、「ユニーはゴミをこう分別しているよ」とゴミの行方を説明します、「この牛乳パックがトイレットペーパーになって売っているね」と使い終わった容器の行方や商品を伝えます。「FSC 認証のノートが売っていたね。」と環境ラベルの意味を伝え、今度ノートを買うときはこれにしようかなと思ってもらいたい。もしかしたら捨ててしまう牛乳パック等を使っての工作体験をどこのお店でも展開しています。このどこのお店でもやるということが大事です。店長は普通、ゴミ庫なんか行きません。環境商品も知らないかもしれません。でも子どもたちが来るとなると、店長は一生懸命勉強し、ゴミ庫をキレイにしたり、商品を調べたりします。お店探検で店長が子どもたちを連れて回っていると、従業員が店長は今日何やっているのかと見て、質問します。店長は「環境学習だよ」と伝えます。お店にいらっしゃるお客様も、みんなが関心を持ってくれます。店長がやるくらいだからすごいことだろう、自分たちも知らないといけない、と従業員もとても関心を持ちます。店長がリーダーを担うことにより、お店の中での啓発活動に繋がります。

それからもう一つ。私達小売り事業はお客様に対して「ありがとうございました」と言って商売をしていますが、お客様から「ありがとうございました」と言われることは滅多にありません。環境学習に参加した子どもたちは「店長、ありがとう」とお礼を言って帰ります。もしお店を舞台にした環境学習を私達環境の専門職がやったとしたら、その子どもたちとは 2 度と会えませんが、店長は毎日います。次に子どもたちがお店に買い物に行き、店長がいると、「店長」と寄ってきます。店長はどんなに嬉しいでしょう。ユニーのお店で実施する環境学習は従業員のモチベーションをあげたり、啓発活動になります。それから地域との結びつきができ、何よりも店長というリーダーが、「ありがとう」というすごく嬉しいプレゼントをもらえます。13 年続けているので、当初参加した 10 歳の子は今、大人です。そういう子たちが大人になって、ESD、持続可能な社会をつくっていってくれるのではないかと思っています。

川嶋氏……

スーパーは ESD の学校、外に向けた教育がそのまま中に向けた教育にもなっている。そんな例でした。

……

鳥原　久資氏（株式会社マルワ 代表取締役）

……

印刷業界は大変な状況に陥っているというのはお察しかと思います。マルワは小さな会社です。日本が終戦を

迎えてからは、良いものをたくさん、安く作れば売れた時代でした。ところが今はインターネットを利用して安価で印刷できるようになりました。印刷会社を選ぶ選択基準が安さとすると、とても当社は選んでいただける状況ではありません。私が先ほどの質問で、「商品は社員」と言ったのには理由があります。どうせモノを買うのであれば気持ちのいいお店、会社でモノを買いたいというのが消費者の心理だと思います。先ほどメディア・ユニバーサルデザインの取組みをしているとお話しました。自社のオリジナル商品で、色弱者に使っていただける折り紙を一時東急ハンズでも 200 円程度の価格で販売していました。案の定ほとんど儲けにはなりませんでした。そうしたこともあり、この折り紙を使って、なごや環境大学を始め、様々なところで子どもを対象にワークショップを始めました。その当日、会場には風車を持って走り回っている沢山の子どもたちがいました。その中で何人かの方から、「そんな折り紙があるのですね」と言っていただけました。

昨年は工場見学に 155 名の方に来ていただきました。オフィスツアーは全て社員が、自分たちの仕事を知ってもらおうと一生懸命工夫して実施しています。それにより、自然と仕事への誇りを持つようになります。先ほどお話しした委員会の発表大会を 5 年ほど前より年に 1 回設けています。社員が一生懸命取り組んだ活動を外部の方に聞いていただくことで、自分たちの活動で足りないことは何かに気づく場になっています。

次に、全社会議についてお話します。通常の会議は社長が真ん中に座ってあれこれ指図しますが、この輪の中に私は入っていません。この輪の外に私はいます。この会議では一切発言せず、全社員であれこれ情報交換をします。僕がいない方が実は会話が進みます。ESD の活動で、大手と肩を並べられるのは、社員が主体的に動いて、社員が自分でいろいろ考えて行い、それをお客様からフィードバックとして得られる感覚やその感情によるものだと思っています。それが我々の中小企業には大切ではないかと思います。

また、社員はチャリティランのボランティアや清掃活動等を行っています。全て社員が担当して出て、代休はありません。僕は社員に「お客様に関連する行事が多いので、1 年に 1 度くらいお客さんがやっている行事に参加したらどう？」と言っています。営業なら参加するでしょうが、現場の人が参加し、自分たちが印刷した印刷物がどう使われているのかを間近に見て、お客様の声を聞き、またあのお客様のために良い印刷、良いデザインをしようと思ってくれていると信じています。代休は無くても社員が一生懸命行ってくれるのが嬉しいですし、それがマルワの差別化でありブランティングだと思っています。

そういう形でしか中小企業は選んでくれないと思っていますし、そういう社員がいなければこのような発表の場を貰えることはないのではないでしょうか。

川嶋氏……

今日こういう場にいらっしゃる理由が分かりました。買うなら気持ちのいい会社から買いたい。大手と肩を並べられるのは社員がコミュニケーションを取りながら進めていることと言う点が印象に残りました。

……

山田　厚志氏（株式会社山田組/株式会社ナックプランニング代表取締役）

……

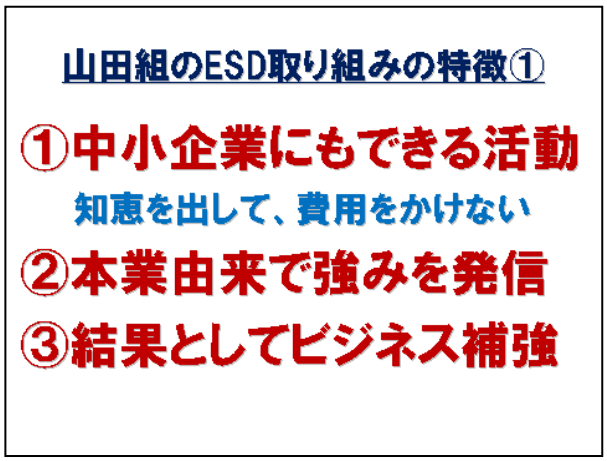
建設業界も大変ひどい状態が続いています。社会資本が成長してきて仕事が減ってくるというのは当たり前のことですが、その割に私たちの業界は受け身体質のままで、自ら変わろうとしないでここまできてしまった。ほぼ100%公共事業をやっている私の立場から言うと、基本的には価格での評価が強いため、買ってくれる側(発注者)には良い活動をやっているところからモノを買おうという買い支えの発想はあまりありません。それが、ESD や CSR に取り組む会社が少ないことに繋がっていると思います。山田組の ESD 取組の特徴をここでは 3 つ挙げました。お金がないので知恵を出さなくてはいけない。その時に 1 番知恵を出しやすいのは本業由来のことで、自社の強みを発揮している活動に取り組んでいる。例えば重機を持っていますので、機動力がある。仕事をやっていくうえで段取りが良い人が多いので、段取りが苦手な NPO の方とお付き合いする際には、その点においてウィン・ウィンの関係を作り上げることができます。山田組の社員が入っていくと非常にうまく回ることもあります。そして費用をかけないという点では、協働相手を探すことです。何かに取り組む際に、協働することで事業の持続可能性を高めていくことにつながるという実感も少しずつ持ち始めています。

実は昨年、59 年目にして赤字決算になり、非常に危機感を持ちました。うちの会社が赤字になるとは思ってもいませんでした。1 期で、「逆 J の字」まで回復しました。企業が持続しなければ貢献活動も続けられないと改めて実感して、昨年まで CSR レポートとして出していた報告書を、今年から SD(持続可能)レポートに名前を変更しました。様々な取り組み事例はここに載っていますから、ぜひご覧ください。

ここでは 10 年間取り組んでいる、会社がある地域の防災大会の例をお話します。先ほど言いましたように中小企業でもでき、費用をあまりかけない、協働で取り組んでいます。協働相手は行政、それから地元の区政協力委員会、2 つの自治会、それから災害ボランティア系の NPO とも組んで費用を分担しています。つい先週の土曜日に約 500 名地域の方と関係各所の方がお見えになって非常に盛大に行いました。区役所からは乾パン等を提供していただき、炊き出しの道具等も、1 年に 1 回メンテナンス代わりに山田組が使って管理をしています。そのほか消防署や警察等もこの機会に学校で各種訓練等を提供してくれます。参加した地域の皆さんには、楽しみながら防災・減災の知恵を学んでお土産を貰って帰っていただいています。

こうした協働の取り組みは本業由来の建設業の強みを活かすとともに、子会社でデザイン会社を持っているので、チラシづくりなども担うことができています。

現在、ようやく公共調達の評価の視点として価格以外にも地域貢献の取り組み度合という評価点が入ってきたため、今後は地域の防災・減災の貢献が本業のビジネスチャンスにつながるという予感を持っています。



川嶋氏……

業界のスタンダードになりたいという高い志が見られます。価格以外の評価点も入ってくれると、そういうことが良い企業を育てて行くことは言うまでもありません。

……

話題提供　テーマ③「取り組んだことにおける変化とは（社内・社員・地域他）」

……

百瀬　則子氏（ユニーグループ・ホールディングス株式会社　執行役員　グループ環境社会貢献部長）

……

ユニーは 10 年前まで環境や社会貢献に熱心ではなかったのですが、お客様とのコミュニケーションを通して、本業の中でいかに持続可能な社会を目指していくのかを考え始めました。これは私共の ISO14000 の目的・目標に全部入っています。例えばモノづくりについては、牛乳パックを回収してトイレットペーパーにして販売する、お店から出た食用廃油を石鹸にしてまたお客様に買っていただくというモノづくりを行っています。また、実は弊社の本社は尾張地域の稲沢というところにあります。尾張地域は繊維業が非常に盛んですが、繊維業界にはデッドストックや、色の少し違うもの等が不良在庫になって捨てられていました。それらを活用して、この地域の 6 つのデザイン学校の生徒さん達を対象にした環境に優しいデザインコンテストを実施して、入賞作品を製品にして販売しています。つくるのは地域の障がい者の方たちです。私たちはそれを販売することが出来ます。「リデザインプロジェクト」という名前で不要だったモノと、若者のアイデア・センスと、障がい者の方の就労と、私たちのお店という場所を活用した、そういったモノづくりにも取り組んでいます。また、「人づくり」については、東邦ガス、中部電力、ブラザー工業など、様々な企業とも活動しています。ペットボトルや、トレイを回収してリサイクルしてくれる業者や、農業者とも環境学習を展開しています。

お店は地域の「コミュニティセンター」でありたいと、コミュニティづくりにも取り組んでいます。このお店という場所を使った新しい創造の場や、包括協定を結んでいるので災害時には来てください。お店には空調も、お手洗いもあり、水を飲むこともでき、駐車場もあります。バリアフリーの設備も整っています。それに私達にはお客様にサービスをするという気持ちがあります。地域の方たちには、お店という場所を環境や社会貢献だけではなく、様々な使い方をしてもらえたら嬉しいです。地域の NPO や自治体、企業の方たちとエコ博という環境のイベントも開催しています。そうすると、偶然お買い物に来たスーパーでこんなことしている、と子どもたちが遊んでいる間に様々なジャン

ルの方のお話を聞くことが出来ます。そういった方が年間に今は約 2 万人ですが、5 万人の方に来ていただきたいと思っています。

また、障がいを持った方がつくった製品の販売もしています。チャリティではなくて、良いものだから、美味しいものだからお客様に買っていただきたいです。それから認知症の方のイベントもあります。私たちはお店を 30～40 年やっています。そうすると、お子さんが小さい頃に買い物にいらしていた方が、30 年～40 年経って高齢者になります。お金を払うのが少し遅くなってしまったり、商品を食べてしまったりということもありますが、その時に捕まえるのではなく、「どうしましたか」「大丈夫ですか」と声をかけられるような従業員でありたいとこういうイベントをやっています。それから子どもたちに生き物に触ってもらうことも行っています。ユニーもイベントを企画しますが、地域の方にそこを使ってもらうことを通して、私たちは新しい公共の場である、これも ESD であると思っています。

私たちのテーマは「未来に地球をまるごととっておく」。ESD はこれだと思っています。私たちが全部食べてしまったら、子ども達は何を食べるのでしょう。だから今の地球を丸ごととっておいてあげて、次の子どもたちが困らないようにしたい。これがユニーの ESD です。是非皆さんも、未来に地球を丸ごととっておいてください。

鳥原　久資氏（株式会社マルワ 代表取締役）

印刷業の使命は、いわゆる情報をお届けする印刷物ではなく、お客さんの想いを受け止めることだと思っています。ここにカレンダーを企画してくれた学生たちとの集合写真があります。あるマーケティング業界の主催で、コラボをしたこのカレンダーが最優秀賞をいただくことになって、学生たちと喜びました。これをすることで学生たちから様々なことを学びました。メディア・ユニバーサルデザインは大事だと言いながら、伝えきれていない我々がいました。それを学生から教えてもらいました。5 年目になりますが、県立高校の生徒 40 名が来月社会見学に来ます。私どもの会社には社員は、昼間 20 名もいません。20 名もいないのに 40 名の高校生が来ます。現場の人間は一生懸命説明します。いろんな方がいらっしゃると、マルワさんの現場の人は本当によくしゃべるねと言うくらい、嬉々として彼らはしゃべります。なごや環境大学の講座を今年初めて持ちました。初めて社員が環境、メディア・ユニバーサルデザインの話をしました。なんでこんなことをやるかと言うと、時代が変わって、我々のような中小企業は、報酬で社員を引き留めることは出来ないと思っています。やりたいことをやらせれば絶対に飽きます。社員がやりがいを持つ環境づくりというのは、実はお客様から感謝をされることを自分で実感することではないかなと思い、10 年程取り組んできました。

品質向上委員会が開いた緊急ミーティングについてお話します。緊急ミーティングと言うと非常にかっこいいのですが、大クレームをいただいたため、招集して開催しています。これを社長がやれと言うとやらされ感があります。社長はいつも正しいことを言っています。でも人はどんなに正しい事を言われても言われたことはやりたくありません。今、マルワの社員はこのように自分たちで企画して、自分たちの問題意識として実施するようになりました。

次に、新入社員が入社する際の寄せ書きを紹介します。社員からの一言メッセージが書かれています。新入社員のご家族が見られると、安心されるのではないでしょうか。

そして社員恒例の委員会が企画したバーベキューのような、イベントをたくさん行っています。それを社員と共に歩んで実施しています。1 年前に、ESD の実行委員会の方にインターンシップの学生がカレンダーのプレゼンをしました。その際に、「ESD って何だと思いますか？」という質問を受け、その学生は一言「私たちは思いやりだと捉えています」と答えました。

世知辛い世の中ではありますが、ESD に取り組むことによって、中小企業でも零細企業でも、社員を大事にすればどこよりも光る会社作りが出来ると私は思っています。ただこれはすごく時間がかかるので、経営者のトップの地道で強い思いが無いとできないのかなと思います。今日はこのような発表の機会をいただけて、非常にラッキーだと思っています。社員に感謝しています。

山田　厚志氏（株式会社山田組/株式会社ナックプランニング代表取締役）

山田組はいろいろな取組みをしていますが、地域防災大会の取組みに特化して、その効果をお話します。当然ながら 10 年継続して実施していると、地域や NPO、行政の皆さんとの交流がとても活発になってきて、実は土建屋は嫌われていないということに初めて気がつきました。デビューを待たれていたことが良くわかりました。この会場には同業の方もいらっしゃると思いますが、今日を機会に是非、地域でデビューしてください。やっていくと、自社や自分自身が変わっていくチャンスがあるのではないでしょうか。

次に社員についてですが、仕事上では、たとえば役所からお電話いただいて、災害の現場に社員が駆けつけ、ずぶ濡れになりながら土のうを積んで堤防が決壊しないように作業しています。誰も見ていない。ところが地域防災大会の時は、地域の皆様が周りを囲んで、「重機の運転上手いよね」とか、「山田組があって良かったよね」とか、本当に言われるんです。社員は聞き耳を立てて、ちゃんと聞いていて、本当にプライドアップに繋がり、地域の安全を担っているとの実感を抱きます。山田組があって良かったと皆様に言っていただけることがこの活動の意義であり、社員へのプレゼントだと感じています。社員に感謝もしていますし、少しでもお返しできたかなと思っています。

川嶋氏……

今日のこれまでのお話を聞いて、周辺の 3～4 名で感想、疑問、考えたこと、思ったことなどを自由にお話していただけたらと思います。

……

質　問

……

参加者：ESD は学問として周知されていますが、私は citizenship education と考えています。この citizenship の面が少し足りないことが、ESD が名古屋で開催されながらも盛り上がらない、一つの原因ではないかと私は思っています。特に、学校についても ESD 指定校が愛知県や岐阜県でありますが、そこでの citizenship の教育があまりなされていないと感じます。今日もご熱心な出演者の方からパワーポイントで説明していただきましたが、パワーポイントだけでは一過性の学習で終わってしまう。私はパワーポイントのイメージと、レジュメで反復学習をしたいと思っています。それが citizenship の一環だと思います。

川嶋氏……

今日は、citizenship 教育が少し足りないのではないかということですが、新海さんいかがでしょうか。

新海……

そうですね。ただ今日の発表のなかで、会社の中で社員の自主性を育むということも、一つの「市民教育」かと思います。地域に出て行くこと、社会参加という視点においては市民教育なので、これからもますます磨きをかけて色々なプログラムを実施していただきたいと思います。ぜひ、応援してください。

……

参加者：大変参考になりました。非常に働き甲斐のある、やりがいのある会社と感じまして、昨今新聞をにぎわしているハラスメント騒ぎ等といったものが皆さんの会社の中とはまったくつながらない。社員さんもイキイキとしているものですから、現代企業の一つの悩みとなっているメンタル面の問題についても皆さんの会社にはそういった問題が当てはまらないと思います。会社として ESD 活動が参考になっているのかなと思いました。参考になることがあればお聞かせください。

川嶋氏……

ここは山田さんにお答えいただきたいと思います。

山田氏……

直接的に効果があるかは言えませんが、教育とはそういうものだと思っています。内発的なもので気づきというものが外に出てくるのにも時間がかかります。ハラスメントの面で、例えば山田組の貢献活動という取組みがどのように活きているかは分かりませんが、私が見る限り社員の顔つきは本当に変わってきていることを実感しています。

川嶋氏……

笹谷さんにもお聞きします。

笹谷氏……

私共が ESD に取り組む理由は人づくりが重要な経営課題であるという点もあります。経営戦略に組み込んで、人づくりとして位置づけることです。ESD は、人と人のつながりですので、ハラスメントなどについては、「多様性を踏まえた思いやりが ESD」という観点も大事なので、ESD の実践にはそういった効果もきっとあるのではないかなとそういう思いで取り組んでいます。

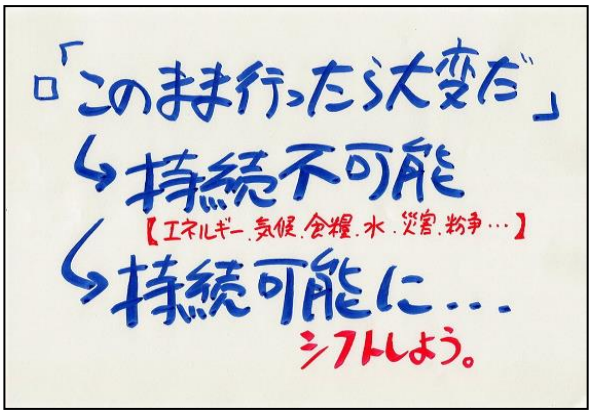
川嶋氏……

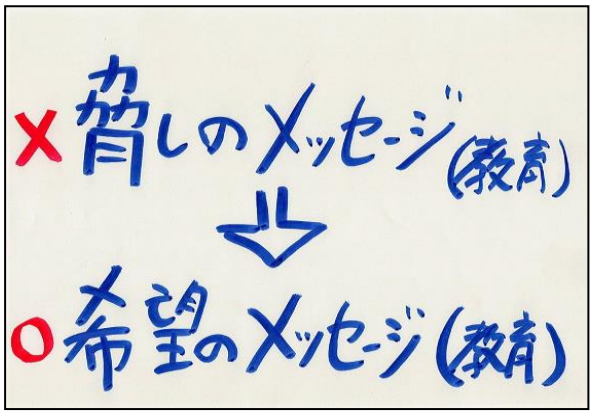
最後に、僕は ESD を「豊かな未来を描く練習」と思っています。エネルギーや気候、食料、水、それから災害とか紛争など、僕たちの持続可能性を止めてしまうような様々なことが今地球で起きている。これをなんとか持続可能な僕たちの暮らしにシフトしよう、このまま行ったら大変だぞという結局は脅しのメッセージが、持続可能なという言葉の出てきた元だと思います。

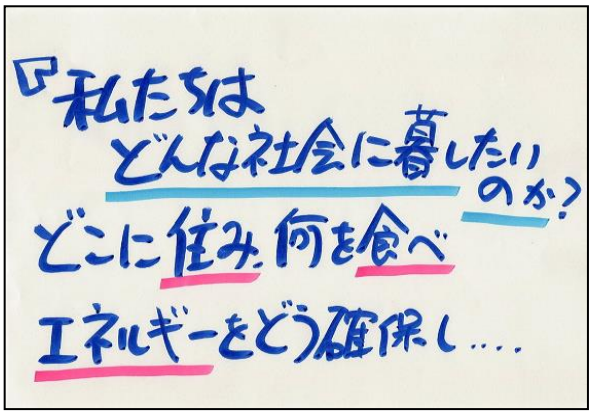
事実だからそれは仕方ないが、大人に対して言うのはいいが、子どもに対してそれを言うのはどうなのかと思っています。大変だ、ばかり言っていると、もう見たくない、もう聞きたくない、このままいったらどうせ地球は滅びるんでしょ、と娘は言いました。僕は環境教育に携わっているので、がっかりしました。まだ力及ばないなと思いました。

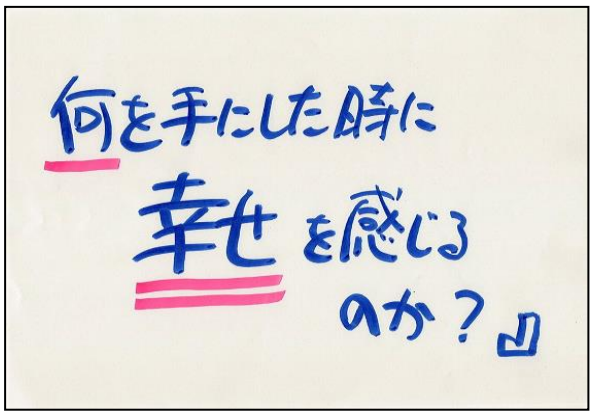
僕は、こんな社会にしていきたいと希望を見つめて行く、それから描いていくという教育、メッセージが必要ではないかと思います。私たちがどんな社会に暮らしたいのか、そしてどこに住み、何を食べ、エネルギーをどう確保していくのか等、もっと様々なことがあります。それをみんなで考えることは、夢のような話かもしれないけれども、そういうことを考えていかないといけません。やらされ感のようでは続かないのではないかというのが、皆さんへの提案です。つまり、何を手にした時に幸せを感じるのか、たくさんモノを作って、たくさんのモノを手にした時に幸せだったってところから、シフトしていかなくてはいけないのではないかということです。そんな「みんなの未来の絵」を描こうということです。

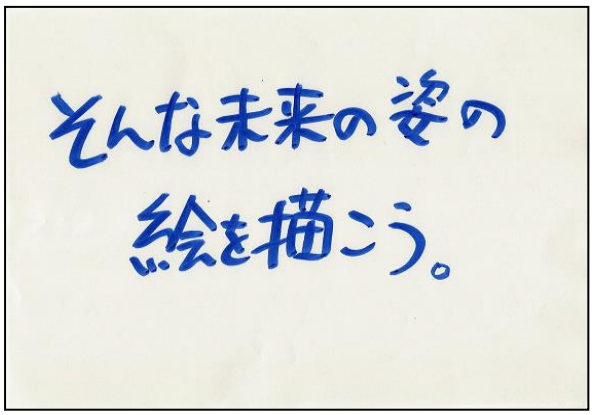
今日は社員に向けた ESD、それから地域、社会に向けた ESD の取組みが、大きい会社から小さい会社まで、本業に絡んだ良い事例を紹介していただきました。内に向けた教育が外に向けて良い影響を及ぼすし、外に向けた活動がまた内に向けて良い教育の効果を及ぼすという好例を今日はたくさん見ることが出来ました。











⑦会議の様子

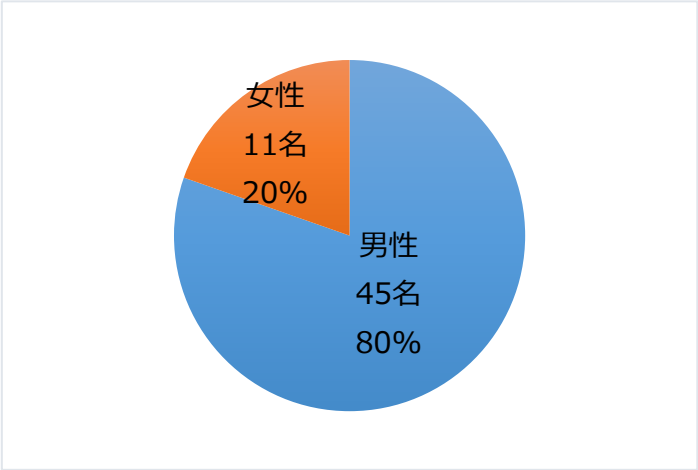
●左上：鳥原氏　右上：山田氏　左下：川嶋氏　右下：ぺちゃくちゃ TIME の模様

⑥参加者アンケート　（回答者：56 名/105 名）

[参加者について]

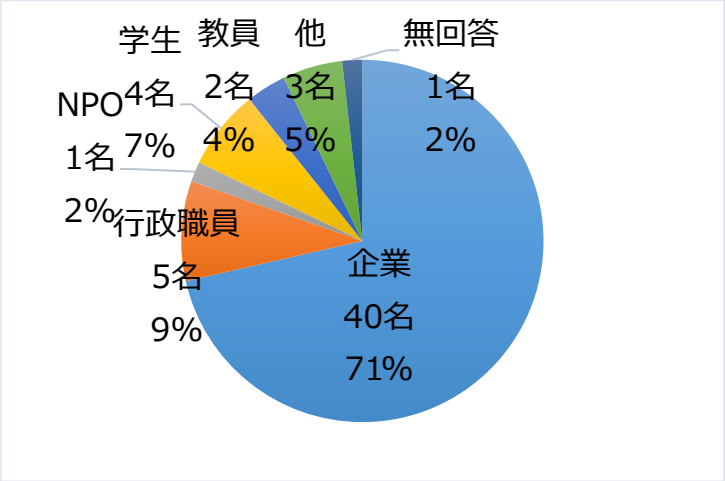
性別

男性	45 名
女性	11 名
合計	56 名



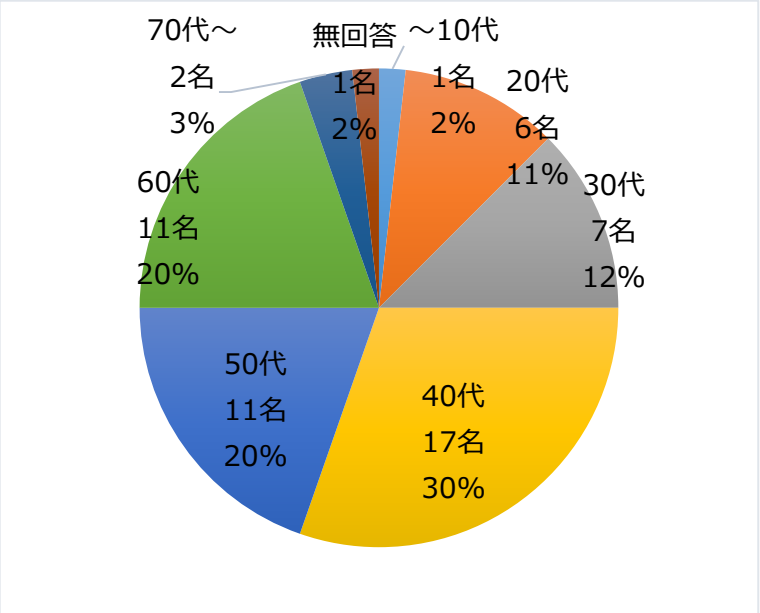
[所属]

企業	40 名
行政職員	5 名
NPO	1 名
学生	4 名
教員	2 名
他	3 名
無回答	1 名
合計	56 名



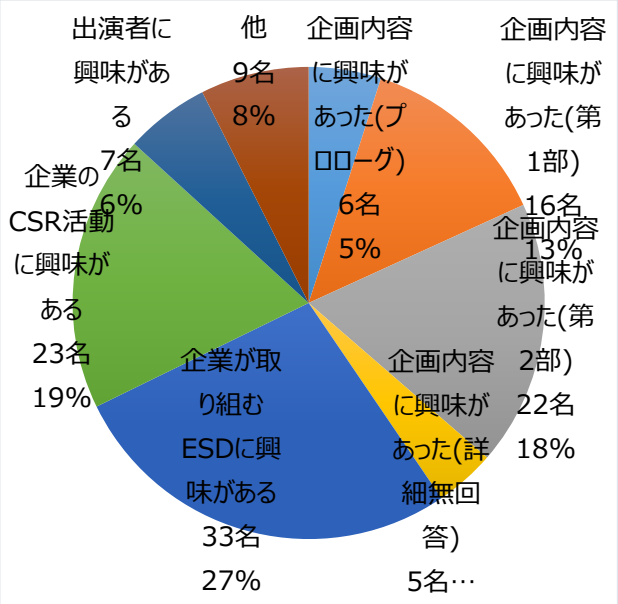
[年代]

～10 代	1 名
20 代	6 名
30 代	7 名
40 代	17 名
50 代	11 名
60 代	11 名
70 代～	2 名
無回答	1 名
合計	56 名



■本フォーラムへの参加動機をお聞かせください。(複数回答可)

企画内容に興味があった(プロローグ)	6 名
企画内容に興味があった(第 1 部)	16 名
企画内容に興味があった(第 2 部)	22 名
企画内容に興味があった(詳細無回答)	5 名
企業が取り組む ESD に興味がある	33 名
企業の CSR 活動に興味がある	23 名
出演者に興味がある	7 名
他	9 名
無回答	0 名
合計	56 名



「他」の回答

- ●名商の ESD 分科会の委員。
- ●関係者
- ●ビオトープと土木建設業　ビオトープを！有言実行です。
- ●上司からのすすめ。
- ●環境教育として企業と代表して参加。
- ●大学の講義の一環として。
- ●ゼミの参加であった。

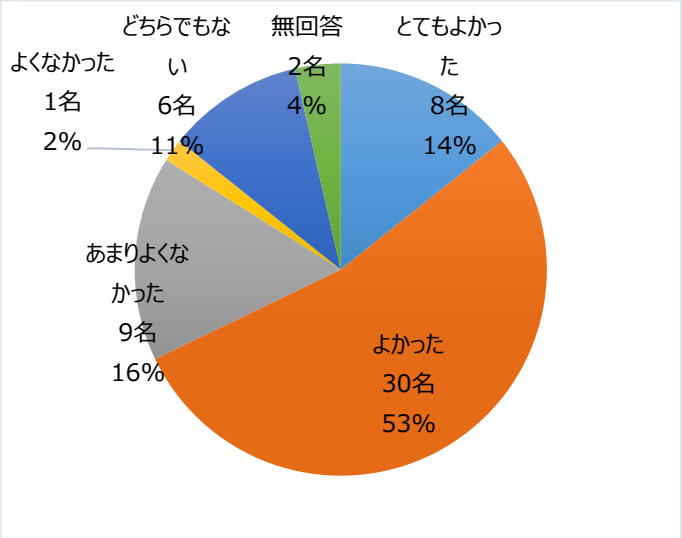
[具体的にお聞かせください]

- ●ISO14001 を進めていますが、ESD からの切り口が有ると説明した。
- ●弊社社員が発表を行った為。
- ●弊社が事例発表させていただいたから。
- ●自社の活動を向上させるため参加致しました。
- ●環境(生物多様性)から世界的に問題化している現状を知り、それに少しでも関わっていければと思い参加しました。
- ●中小企業が取り組む ESD 活動に興味。
- ●持続可能な社会づくりのため NPO が開発した、地方発国産材わりばしを取り扱っています。(物販・広告)企業の「持続可能」の考え方に興味がありました。
- ●取組はおくゆかしく行うのではなく、しっかり出力する必要があると感じましたが、どのようにアピールすべきかが課題でした。
- ●各企業の真剣な取り組みが理解できた。
- ●私の ESD への視点は朝日新聞朝刊 7 月 17 日付オピニオン・私の視点へ投稿してあります。
- ●他企業が ESD をどうとらえ、どう行っているかが知りたかった。
- ●自社での教育がマンネリ化しているため、詳しい手法、取組み方を学びたいため。

■本フォーラムについてお聞かせください

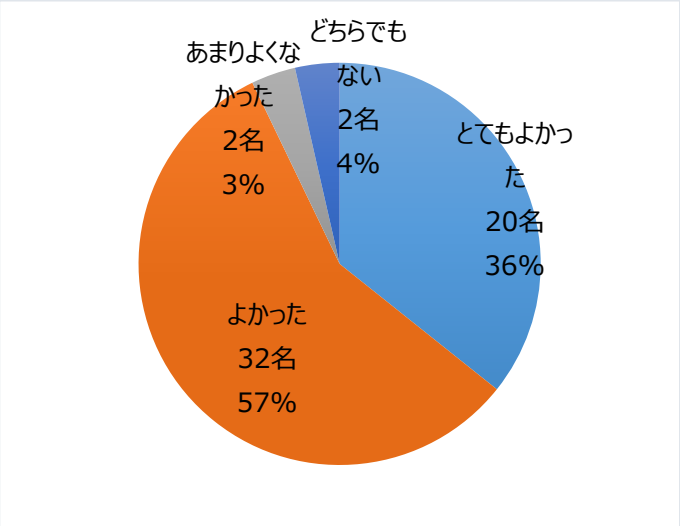
[プロローグ　ESD ユネスコ世界会議・関連イベントについて　]

とてもよかった	8 名
よかった	30 名
あまりよくなかった	9 名
よくなかった	1 名
どちらでもない	6 名
無回答	2 名
合計	56 名



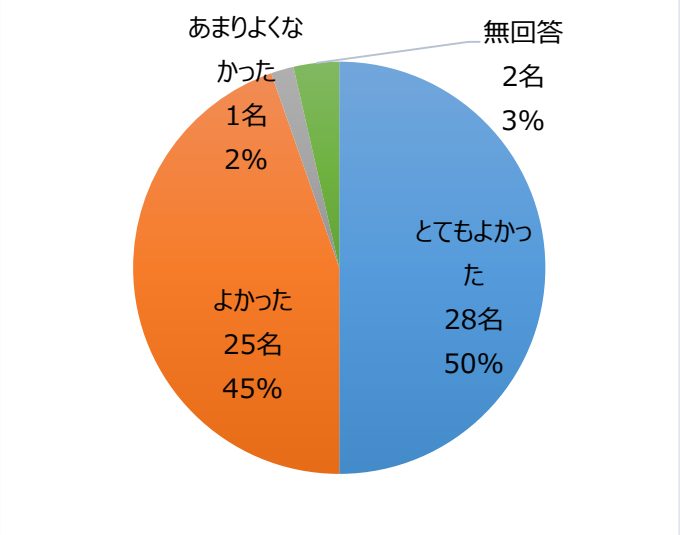
[第 1 部　企業の環境教育取り組み事例]

とてもよかった	20 名
よかった	32 名
あまりよくなかった	2 名
よくなかった	0 名
どちらでもない	2 名
無回答	0 名
合計	56 名



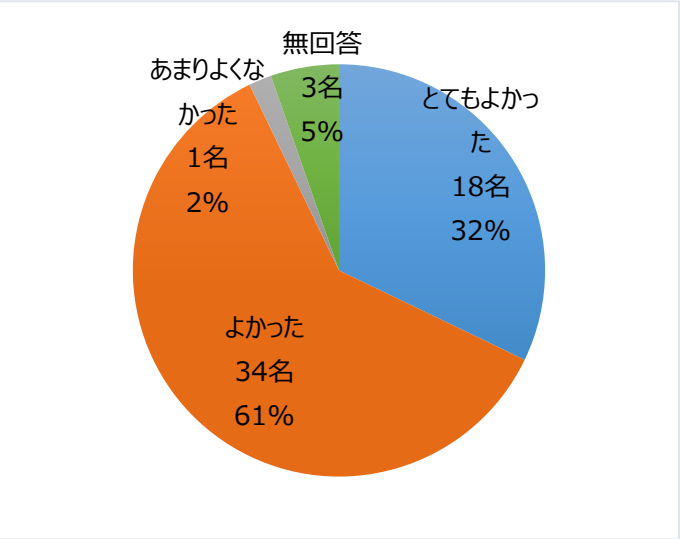
[第 2 部 ESD 円卓会議「企業の環境教育から ESD へ」]

とてもよかった	28 名
よかった	25 名
あまりよくなかった	1 名
よくなかった	0 名
どちらでもない	0 名
無回答	2 名
合計	56 名



[フォーラム全体]

とてもよかった	18 名
よかった	34 名
あまりよくなかった	1 名
よくなかった	0 名
どちらでもない	0 名
無回答	3 名
合計	56 名



[理由をお聞かせください]

●本業と密接にかかわった活動展開されている。
●トークが上手でした。
●ESD という単語は遠く感じていましたが、身近に感じることができました。
●各企業の取組の生の声、反応が聞けて大変参考になりました。
●活動事例、取組み方法を聞くことができました。
●限られた時間であったが、盛りだくさんの内容を聞くことが出来た。
●自社の取り組みについて見直すヒントとなりました。
●色々な事例の紹介とそのプレゼン方法が参考となった。
●「持続可能な」の重要性をよく理解した方々のお話を聞くことができて、本当に必要な取組みを考える良い機会となった。
●まだスタート時期とはいえ、個別の企業さんではすばらしい活動があると知った。
●第 2 部のパネリストの方々のお話しに勢いがあり、引き込まれました。
●取組と企業価値との連携が見えてきました。
●やや情報過多で質問の時間を増やして欲しかった。
●具体性があり、それぞれの会社の熱い想いが伝わってきました。
●第 2 部のパネリストの話が分かり易く、川嶋さんもとても良かった。
●中小企業から大企業、様々な業種の ESD についての考えや CSR 活動について知ることができたから。
●様々な業種の企業の取組状況がよくわかった。
●参加者に役人の方(私のように)も参加してみえたことはいちばんよかった。ESD 盛り上げは市民の関心を引き付けることだ。市民参加があっての ESD だと思う。
●1 について多くの知見を得た。
●自社で展開したい事例取り組みも多々ありました。
●ESD にはずっと興味がありましたが、今まで事例を知る機会がなかったので、多方面のお話が伺えたので大変良かった。今でもすでにやっている活動が ESD に該当することが理解できた。なので、もっと ESD とし

てアピールして発信力をつけていくことが大事だと考えた。

●各事業内容が違う会社の事例が分かり、参考になりました。

●環境を通して人・社会・自然に対して企業は何をやるべきか、よく分からなかった！！

●ESD 活動が企業のブランディングだと言われた事を素晴らしく思ったから。

●第 2 部が司会の方も含めて内容が面白かったです。

●各企業の取り組みが本格的でとても興味深く聞けたから。

●第 2 部でのお話がわかりやすく、あまり知らない ESD、CSR を知ることができたので。

●各社の具体的事例を知る事ができた。

■本フォーラムに参加されてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画へのご要望などお聞かせください。

●ユニーさんのキャッチコピーはとても分かり易くて良かったと思います。マルワさんの取組は中小でも取り組めそうに感じて、良かったです。

●もっとたくさんの企業の事例、生の声、苦労などを聞きたい。もっと長くてよい。行政や市民の声なども聞ければさらによかった。

●地域をいかに巻込んでいくかがポイントの一つと分かりました。

●企業発表の時に質問タイムがあった方がいいと思う。全体的にはよかったと思います。

●自ら行動する必要性を感じることが出来、大変参考になりました。

●企業の事例でレジメがない企業があったので、出して欲しかった。
資料からあまりにも多くて読み切れないと思います。(集約して重要点を絞る)

●参加者が多くて、おどろいた。

●プレゼン・アピールが皆さん上手であったため、参考になった。

●つながりの大切さ、気づきを起こせば強いムーブメントになることのすばらしさを知りました。ありがとうございます。

●どうしても本業以外と捉えがちの活動ということが問題でしたが、社員がその意義を感じられる活動に変える必要があるということに気づきました。その意義を感じる為には知識も必要だということも気づきの一つでした。

●企業はまだまだだと思いました。企業の中で行われていることはまだ自社のプロモーション活動の延長線上にあるものだし、取組も事業に影響のない家庭の主婦の取組レベル。これは根源的な「持続可能」へ対する危機感の違いと思います。地方や若い世代は「持続不可能のデータ」をつきつけられています。現状の課題に向き合うのも、その為に自分たちが改めなければならないことも、あきらめなければならないこともあります。ESD が社会全体に行きわたり、本当の意味で意識の高い消費者、購買者が生まれてきた時に選ばれる企業になれるか？今はまだ準備期間だと思いました。

●ユニー百瀬部長が冒頭で環境問題に触れ、(大量消費・大量破棄の片棒をかついでいる業を意識した上で)事業を通じて、少しでも貢献しようと前向きに取り組まれていることに感動しました。どこでも ESD の学校になりうる、そのことに納得しました。お客様からの感謝こそ従業員のモチベーションになる。これも感動。

●ESD は言い換え可能だったということ。
●発信力の大切さを改めて感じた。
●地域(名古屋)全体の盛りあがり(深化)が会期が終わってからも続くようにお願いします。
●ESD の 10 年間は成果が何か知りたいです。→と書いた後にテーマで出てきて、興味深く聞きました。
●ESD は人づくり。
●企業で様々なESDについての活動を行っているが、一般の方に知られていないと思われるので、PR方法を工夫しなければいけないと感じた。
●オーナーの考えが大切と深く感じました。企業が発展するように多方面に未来を見ていくことが大切と感じました。
●パワーポイント+レジメで massage が。全部であればもっとよかったと痛感した。エステム。資料の配布について分かり易くしてほしかった。なごやキャッスルについて。効果的な meeting とは-わかりやすく説明することだ。-配慮不足です。レジメとプロジェクターとの対比説明のようにしてほしかった。わかりやすくする。ことが一番大事だと思う。レジメとパネル(視力の弱い人には不自由です)受講しやすいようお願いします。資料をまとめてほしい。整理整頓が大事だ。わかりにくい。
●今年の ESD 世界会議が終わった後の ESD の活動はどうなるのでしょう?残念ですが、イベントの時だけ盛り上がるだけのような気がします。取り組みの課題等も聞きたかった。(苦労した点等も含めて)
●参加登録されている人がたくさんいるのに、資料の準備数が不足していて、資料なしでも参加しなければならない人が多数いた。事務局の準備をもっとしっかりして欲しい。(約 30 名は不足)
●説明されている内容で配布されていないものもあったので、配布してほしい。聴講者と発表者のセッション(フリートーク)があるといいと思いました。→詳しく話が聞けるので。
●後方に座っていたので、演者がよく見えなかった。やはりステージが良い。
●プロジェクターの画面が低く、後ろからでは見にくかった。せっかく内容の良いプレゼンでしたが、残念でした。身近な活動と感じ、非常に参考になりました。
●もっと分かり易い言葉で英語ではなく、道徳、仏教等昔からある言葉で子どもから教育してほしい。頭の良い人、金がある人が引っ張ってもうまくいかないのでは！！
●企業が CSR を ESD へと発展させておられることがわかり、良かったです。
●大学で ESD に関するトピックを扱うことがあり、普段の教育(座学)ではないところでの教育・学びが重要と聞いておりましたが、実際に企業でそういった取り組みをされているのを聞いて、こういう学びが必要なのだと実感しました。
●学生向けのもやってほしいです。
●世界規模で考えた場合、本当に苦しんでいる人々を ESD によって教育・環境を変える事で救うことができるとすると、日本企業は何ができるか、何をすべきかという視点でフォーラムを開催して下さい。

⑧広報チラシ

ESDフォーラム2014
～企業の環境教育からESDへ～

日時：2014年10月30日(木) 開場13:30～ 14:00～17:00

場所：名古屋商工会議所 ABC会議室

〒460-8422　中区栄2-10-19(名古屋商工会議所ビル5階)

主　　催：名古屋商工会議所、環境省中部環境パートナーシップオフィス、環境省中部地方環境事務所
連携協力：ESDユネスコ世界会議あいち･なごや支援実行委員会

パートナーシップ事業 ESD AICHI-NAGOYA

[プログラム]

主催者挨拶 14:00～14:05

プロローグ 「ESDユネスコ国際会議･関連イベントについて」
14:05～14:20　橋本 博巳 氏　(ESDユネスコ世界会議あいち･なごや支援実行委員会事務局次長)

第1部 企業の環境教育取り組み事例
14:20～15:10

名古屋商工会議所では、ESDユネスコ世界会議の名古屋開催にあわせ、中部の企業による環境教育の事例集を作成し、中小企業への環境教育のさらなる普及を支援します。このフォーラムでは、事例集で取り上げた主な企業の担当者から特徴的な取り組みなどを紹介いただきます。

[紹介企業]	株式会社加藤建設	「エコミーティングという取り組み」
	株式会社ナゴヤキャッスル	「ECOソムリエ活動で環境人材を育てる」
	株式会社エステム	「排水処理技術･法規制の教育でビジネスを広げる」
	東邦ガス株式会社	「自治体とのオリジナル環境コラボ企画を展開」

休　憩 15:10～15:20

第2部 ESD円卓会議「企業の環境教育からESDへ」
15:20～16:45

2005年にスタートした国連持続可能な開発の教育のための10年が今年度で終了します。企業が「ESD」をどのように捉え、どう実践してきたか、また今後どのように実践しようとしているのか等、持続可能な経済、社会を担うべき企業との対話を行います。

[コーディネーター]	川嶋　直 氏	((公社)日本環境教育フォーラム理事長)
[話題提供者]	笹谷 秀光 氏	(株式会社伊藤園 常務執行役員 CSR推進部長)
	鳥原 久資 氏	(株式会社マルワ 代表取締役)
	百瀬 則子 氏	(ユニーグループ･ホールディングス株式会社 執行役員 グループ環境社会貢献部長)
	山田 厚志 氏	(株式会社山田組 代表取締役)

●フロアセッション･総括

閉会挨拶 16:45～17:00

[話題提供者プロフィール]

川嶋　直　（公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長）

1953年東京都調布市生まれ。1980年山梨県清里のキープ協会に就職。84年から環境教育事業を担当。インタープリターとして、自然の中での参加体験型の環境教育プログラムの開発・人材育成を行なってきた。2010年にキープ協会役員を退任後は、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）を駆使した研修ファシリテーター、企業・行政・NPOの環境教育アドバイザー。キープ協会環境教育事業部シニアアドバイザー。自然体験活動推進協議会理事。日本環境教育学会理事。

著書：「就職先は森の中～インタープリターという仕事」（1998年小学館）
「KP法～シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション」（2013年みくに出版）

笹谷秀光　（株式会社伊藤園 常務執行役員 CSR推進部長）

東京大学法学部卒業。1977年農林省（現農林水産）入省。人事院研修で1981-1983年フランス留学、外務省出向（1987-1990年在米国日本大使館一等書記官）農林水産省にて、中山間地域活性化対策、食品流通対策、国際経済交渉等を担当。2005年環境省大臣官房審議官、2006年農林水産省大臣官房審議官、2007年関東森林管理局長を経て、2008年退官。同年伊藤園入社、知的財産部長、経営企画部長等を経て2010年より取締役。2014年7月より現職。CSR環境を担当。

著書：「CSR新時代の競争戦略-ISO26000活用術」（2013年日本評論社）

島原久資　（株式会社マルワ 代表取締役）

1958年愛知県名古屋市生まれ。愛知教育大学を卒業後、小学校中学校の教師を8年間務め、1989年株式会社丸和印刷（現株式会社マルワ）に入社。1995年に代表取締役社長に就任、現在に至る。2003年にISO14001を取得後、環境活動に力を入れている。社員を巻き込んだCSR活動には多くの方から評価をいただき、多数の見学者が会社を訪問、また講演依頼も多い。

百瀬則子　（ユニーグループ・ホールディングス株式会社 執行役員 グループ環境社会貢献部長）

1980年北海道酪農学園大学卒業後、ユニー株式会社入社。学生時代から社会人になってからも、8年間カブスカウトのリーダーとして奉仕活動を実践。その経験から、環境部に配属後「子ども環境学習」「自然探検」「モンキーサマースクール」とユニーのESD活動として、未来を担う子ども達に、体験型学習を実施してきた。今後は、さらに「環境にやさしいお買い物」をとおして、消費者や高齢者に対してもESDを実施し、「誰もが幸せに生きる未来」を目指す。

山田厚志　（株式会社山田組/株式会社ナックプランニング 代表取締役）

1954年愛知県名古屋市生まれ・名古屋育ち。愛知教育大学大学院芸術教育学専修。デザインや美術教育を学んだキャリアとは一見無縁の土木建設業界に飛び込み、両者の違いではなく「問題を乗り越えて創り出す」という共通する営みに着目して企業経営に取り組んでいる。業界の慣習を破って社会に向かって積極的に発信する活動に取り組み、特に地域の防災大会や、なごや環境大学共育講座をそれぞれ10年連続で開催中。企業が担うESDの取り組みは、なによりその企業の持続可能性を確かなものにする活動でなければならないというのが持論。

申込方法　下記の「参加申込書」をFaxもしくはE-mailにて送付ください。
※定員を超えた場合、参加をお断りする場合がございますので、あらかじめご了承ください。
締切　10月23日（木）

申し込み先　**環境省中部環境パートナーシップオフィス**
〒460-0003　名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル4F
TEL：052-218-8605　FAX：052-218-8606
E-mail：office@epo-chubu.jp

会　　場　**名古屋商工会議所 ABC会議室**
〒460-8422　名古屋市中区栄2-10-19
名古屋商工会議所ビル5階

交通　地下鉄伏見駅（東山線・鶴舞線）下車
（名古屋駅より東山線で1区間）5番出口より南へ徒歩5分

参加申込書

FAX：052-218-8606 ／ E-mail：office@epo-chubu.jp

ふりがな 氏　名	----------	ふりがな 所属組織名	----------	役　職	
ご住所	〒				
ご連絡先	TEL:	FAX:	E-mail:		
主催者への質問等					

（注）ご記入いただきました個人情報は、本事業のみに使用させていただきます。

（2）学校教育におけるＥＳＤの実践事例についての情報交換等の場

①目的

2005 年にスタートした国連 ESD の 10 年キャンペーン期間中に、地域では多様な ESD 実践が行われている。本企画では、主に学校と地域の連携による ESD 取組を事例として取り上げ、ESD 取組が地域にしっかり根づくためにすべきこと、また ESD 取組に必須な課題、ESD 授業づくりのノウハウなどを、2015 年以降の ESD 展開を踏まえ、教員を始め多様な主体が学び合う場をつくる。

②概要

名　称：ESD ユネスコ世界会議　併催イベント
　　ESD 交流セミナーみんなの ESD 会議～この 10 年の活かしかた～
日　時：2014 年 11 月 12 日(水) 11:30～13:00
場　所：名古屋国際会議場　レセプション B
参加者：109 名（一般参加　86 名　出演者　15 名　スタッフ　8 名）
　※一般参加
　（86名内　NGO/NPO 21名　行政　17名　教員　14名　企業　12名　学生　3名　他19名）
プログラム：ESD 交流セミナーみんなの ESD 会議～この 10 年の活かしかた～

●Table１　校長先生サミット～地域と学校が ESD の現場をつくる
学校の経営方針に ESD を掲げ、ESD カレンダー等を作成し、学校全体で ESD に取り組んでいる、取り組もうとしている学校の校長をゲストに迎え、各学校の ESD 取組の特徴やスキームについて伺う。また地域との連携、地域の理解など、ESD 取組を継続して実施するためのスキーム形成についての意見交換を行う。
[出演者]
高木要志男氏(富山県富山市立堀川小学校校長)
谷戸　実氏(三重県名張市立薦原小学校校長)
伴　浩人氏(愛知県東浦町立緒川小学校校長)
前　義隆氏(福井県坂井市立鳴鹿小学校校長)
阿部　義澄氏(愛媛県新居浜市教育委員会教育長)
池端　弘久氏
(金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長/前校長)
鈴木　克徳氏(金沢大学教授/EPO 中部運営委員)

●Table2　自己肯定感を育む ESD～これからの教育への提案
持続可能な社会をつくるためには、「私には未来をつくる力がある」と、自己の存在、自分を大切にできる自己肯定感の育みが必須である。愛知県内の教育 NPO/NGO 等が２年間議論を重ね、あらゆる教育の機会に自己肯定感の育みが取り入れられるための提案を作成した。その提案を紹介しつつ、学校教育、地域、家庭にて具体的にどのように取り入れることが出来るか等意見交換をする。

[出演者]

青野桐子氏(NPO 法人こども NPO 事務局長)

伊沢令子氏(NPO 法人 NIED・国際理解教育センター代表理事)

川合眞二氏(NPO 法人 NIED・国際理解教育センター事務局長)

白上昌子氏(NPO 法人アスクネット代表理事)

滝　栄一氏(NPO 法人名古屋 NGO センター)

土井ゆきこ氏(名古屋をフェアトレード・タウンにしよう会)

[コメンテーター]

大塚　明氏(伊豆市教育委員会心の教室相談員)

前野伸夫氏(あま市甚目寺小学校前校長)

③全体スケジュール

TIME	内容	目標
10:30～11:00（30）	出演者打合せ　会場設営	
11:00～11:30（30）	受付	EPO 中部
11:30～11:40（10）	趣旨説明　セッション説明	全体進行：EPO 中部 全体の主旨　セッションのねらいと内容を紹介
11:40～12:40（60）	**Table 1 ：校長先生サミット** **～地域と学校が ESD の現場をつくる**	進行：鈴木克徳氏 ■ESD 取組の特徴や、取り組んでの変化（児童・教員・学校・地域） ■ESD　実践をして重要だと感じたこと、多くの学校で実施するために必要なこと ●高木要志男氏 ●谷戸　実氏 ●伴　浩人氏 ●前　義隆氏 【コメンテーター】 ●池端弘久氏 ●阿部義澄氏 ■フロアとの意見交換
	Table2：自己肯定感を育む　ESD～これからの教育への提案	進行：伊沢令子氏 ■提案書の紹介 なぜ自己肯定感なのか どのようにすすめてきたか 提案内容の紹介 ■ゲストのコメント 大塚　明氏

		前野伸夫氏 ■グループワーク F 青野桐子氏 F 川合眞二氏 F 白上昌子氏 F 滝　栄一氏 F 土井ゆきこ氏 ■ゲストのコメント 大塚　明氏 前野伸夫氏
12:40～13:00（20）	全体会 総括	T1　池端弘久氏　T2　伊沢令子氏 コメント　大塚明氏　阿部義澄氏 総括　鈴木克徳氏　EPO 中部

④議事録

趣旨説明　新海洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィス）

今日この会場では、2005 年から始まった国連 ESD の 10 年の総括会合が、各国から閣僚級など多様な主体が集まって行われています。これまでの 10 年の成果そして 2015 年以降の ESD の取組のありかたについて議論が交わされています。今日のこのセミナーも、地域の学校や NPO/NGO が実施してきた ESD の取組や課題の共有、そして 2015 年以降より ESD が地域で実践されるための、経験値からの議論の場です。2 つのテーマで行います。一つは「校長先生」をゲストにお迎えした「校長先生サミット」です。昨年今年度と環境省事業である ESD 人材育成事業で ESD 授業を実施していただいた学校の校長先生をお招きし、ESD の取組がどの学校でも実践されるようになるための課題やその改善についてお話しいただきます。もう一つは、「自己肯定感」です。日本の子どもたちの自己肯定感が低いと言われる中、持続可能な社会の担い手として社会参画、他者理解、他者との対話をすすめるためには必須な力であると、この地域の教育や子どもをテーマに活動しているNPO/NGOメンバーで 2 年余り議論を重ねてきました。その成果である提案書をご提示して、「自己肯定感を育む環境づくり」について議論します。

とても短い時間で深いテーマを扱います。参加と対話を大切にする ESD ですから、ぜひみなさんからのご意見、アイデア、ご提案あふれる時間と空間にしたいです。

Table１　校長先生サミット～地域と学校が ESD の現場をつくる

趣旨説明　鈴木克徳氏（金沢大学教授/EPO 中部運営委員）

このセッションでは、学校で ESD を実施するにためには、校長先生が果たす役割が非常に大きいだろうということで、「校長先生が何を問題として抱えているのか、それに対しどんな対応方法があるのか」について議論したいと思います。第２ラウンドでは「学校が抱えている課題に対してどう取り組んだらいいのか。特に、教育委員会や地域、学校内、学校間の連携はどう進めていったらいいのか」について議論を行います。

今回の参加者は、学校に非常に詳しい方ばかりではないようです。４校の校長先生に来ていただいていますが、まず各学校での取り組みをお話しいただけばと思います。

第１ラウンド

テーマ１．学校での ESD 取組の紹介

テーマ２．何を問題として抱えているのか、それに対しどんな方法があるのか

富山県富山市立堀川小学校校長　高木要志男氏

堀川小学校の取り組みについてですが、ESD を私なりに一言でいうと、「人としての生きる構えを学ぶ教育」と置いています。校長ですので、学校をどのように運営していくかということは当然求められるわけですので、私は教育経営として考えています。

一言で言うと、本校の教育経営の柱は、「子どもの暮らしづくり」です。いろいろな子どもたちが毎日毎日の生活を自分の手でどうやって作り上げていくのかを大事にしていて、その暮らしづくりの主体は子どもなので、そこに個性が発揮されると考えています。

では ESD の推進ということで、教育経営の中にどう ESD を位置付けて考えるか。「個の自立と協働」を一つのキーワードとして考えています。人、社会、自然など全てのものとの関わりやつながりの中で考え、行動していくことを大事にしていく。暮らしづくりの中でそういう行動を子どもたちがいかに大事にしていくかを考えています。

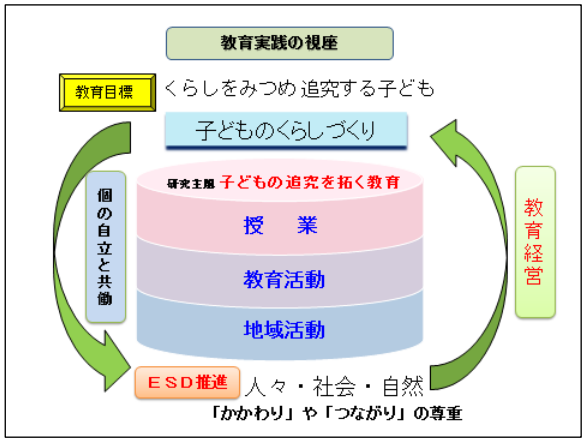
今年の夏に富山城址公園で、「2014 平和の鐘を鳴らそう運動」が行われました。これは、富山県のユネスコ連絡協議会、富山ユネスコ協会の主催した、全ての人が平和に暮らせる地球社会をつくろうという運動です。平和宣言を読み、最後に平和の鐘を鳴らして終わるというシンプルな運動です。ここで黄色いジャケットを着ているのが堀川小の子どもたちです。参加者の受付や、設営などの作業にも関わっています。この中で、子どもはこんなふうに考えています。「私はユネスコの平和の鐘を鳴らそう運動に参加して、富山市の人たちの心が一つになり、協力していくことが大切なんだと感じました。今までそういう活動に参加したこと、しようと思ったことはありませんでした。なぜなら、誰かがしてくれると思ったからです。けれども、ユネスコに学ぶ私の暮らしづくりの学習をしていく中で、一人一人が平和のために働きかけることが大切だと気づきました。」子どもの感想ですが、こういう運動に関わって、どういう意識を持つのか、という一つの例です。この運動の一つのきっかけになっているのはユネスコ協会で、ユネスコ協会の皆さんは富山市のユネスコスクールにいろいろ支援してくださっています。そういった中で ESD パスポート※に子どもたちはいろいろ記録をしていきますが、記録をしながら自分たちの歩みを確かなものにしています。先ほどの、笑顔を忘れずに活動したら、みんな笑顔で答えてくれたので嬉しかった、ということをここに書いていますし、地

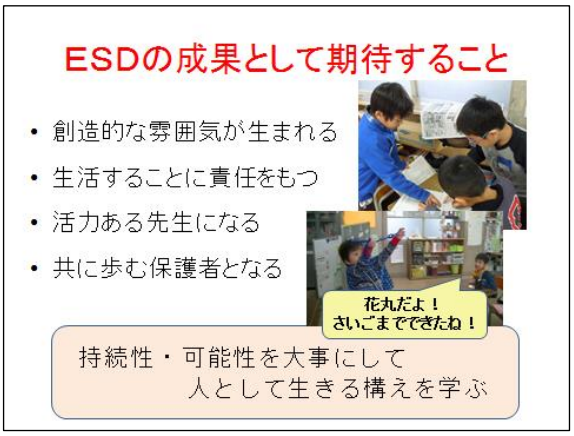
域での活動も記録しています。

もう一つ、教員の意識はどう変わるのかということですが、6 年の担任の先生。この先生は ESD をずっとここ 2 年間担当していますが、たまたま去年も今年も 6 年生の担任だったので、「子どもたちの活動の仕方が非常に変わってきた。取り組み方や、幅の広がりを感じている」と話される。ESD で実践研究をしてきた 4 年生の先生は、「教師自身が取材したことを押し付けては総合にも ESD にもならない」と強く実感しています。仲間の個性的な思考や取組から、新たな気づきを生む授業を目指していきたい」とこの先生は感じ取っています。

※ESD パスポートとは

日本ユネスコ協会連盟がボランティアへの参加を促進するツールとして実施。子どもたちに「パスポート」を発行し、ユネスコ協会や地域の団体が行うボランティア活動に参加すると、パスポートに参加の証として、シールを貼るという活動。





三重県名張市立薦原小学校校長　谷戸実氏

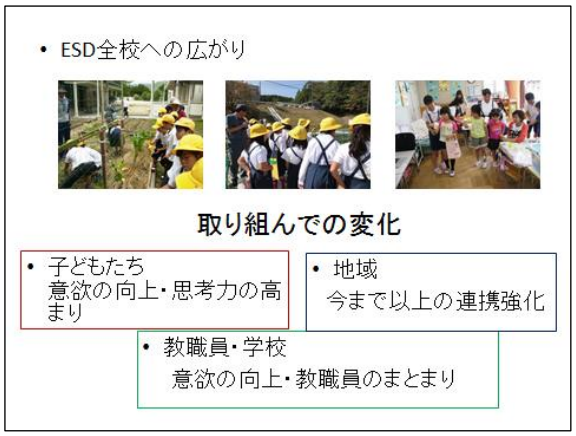
本校は三重県ですが奈良県境にあり、伊賀の山の中の学校です。本校設立 139 年目で、児童数 106 名の学校ですが周囲を農村部と、市内最大規模の工場団地があります。大阪府に近いということで新しい団地もたくさん立っています。子どもの 7、8 割はその新しい団地から登校しています。

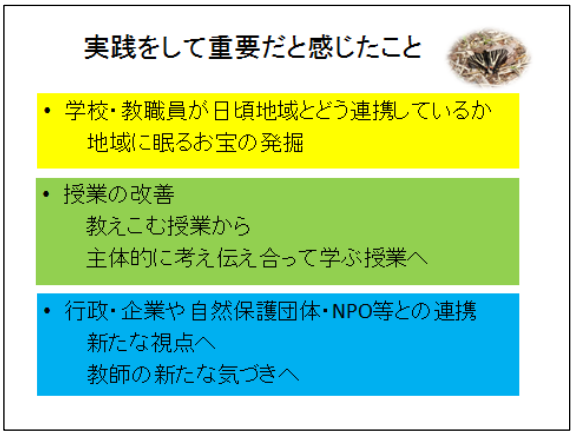
特徴として、学校の周りは自然がいっぱいであり、近くの里山にはギフチョウが生息しています。本校もギフチョウの保護団体の方と一緒に観察会を行うなど、毎年 4 年生が活動しています。これが今年の観察会の様子です。ギフチョウは春の女神と言いまして、4 月中ごろから 5 月の連休までしか飛ばないという希少なチョウチョです。名張が全国の南限だと言われています。子どもたちは授業の活動の中でいろいろなことを調べて、食草であるカンアオイを探したり、新聞や紙芝居、劇で地域の人や全校児童に紹介したりしてきました。そうした中で、学校の近くでギフチョウの卵を昨年初めて発見しました。子どもたちは大喜びでした。今年はその卵からふ化したと思いますが、学校までギフチョウが飛んできたので子どもたちはさらに大喜びでした。

本校はユネスコスクールに 2012 年 11 月に加盟しました。それまでは ESD を全く知らなかったのですが、ESD を知る中で自分たちの取組とぴったりではないかと ESD を意識しながら学習を推進していくことになりました。ギフチョウの学習は４年生の５月で終わりだったのですが、ギフチョウから学習を広げて、地域の自然観察をテーマに、

夏と秋に自然観察を地域の環境団体の方に指導していただきながら行いました。そうしたら運動場に子どもたちがこのごろけったいな虫がいると保護団体の方に話したところ、絶滅危惧種の「ニッポンハナダカバチ」という名前のハチであることがわかり、子どもたちは大発見だと喜んでいました。そのハチの巣が砂場にあり、体育の授業で砂場を使わないといけないし、どうしたらいいんだろうと、子どもたちが話し合いました。ギフチョウも工業団地の隣が生息地なので、開発されたらどうしよう、といった投げかけもしながら学習を展開しています。人との共存をどう考えさせたらいいのかと問題提起しながら子どもたちも考えてきました。

そのような取組が昨年度環境省の人材育成事業の ESD 授業になり、素晴らしいとたくさんの声をいただきました。そして、4 年生だけで留めておくのはもったいないと、全校に ESD を広げていこうと職員の気運が高まり、ESD カレンダーを作りながら、低学年では地域の保護者に来ていただいて野菜づくりや伝統遊びをしたり、3 年生は公民館活動を見に行ったり、地域のお年寄りとの関わりを深めています。5 年生は昨年 4 年生でギフチョウの学習活動の中で気づいた自然と工場との共存の発展として、工場ではどんな環境のことをしているのかをテーマに、工場見学に行き水の処理の仕方を勉強したり、それを今度は自分の家庭や全校に広めていこうという取組を行っています。6 年生は今までの活動から、これからの薦原はどうしていったらいいのかという課題をもって、自分たちができることとして保育所を訪問したり、自治会の人とこれからの薦原について話し合う会をもつなどの計画を立てています。この学習活動のなかで、子どもたちの学習意欲が高まってきたなと教師は話しています。それと共に思考力も高まってきたな、今年の学力テストも良かったのかなと思います。地域も非常に協力的ですので、今まで以上に協力をしていただきながら、すすめたい。何より、教師が子どもたちの意欲に触発されながら、「もっとこんなことを考えさせたいな」と意欲的な姿に引っ張られて、教師も地域に目を向けながらいろいろな授業開発ができました。ESD という一つの目標、方針ができて、それに向かってみんなが一緒にやっていこうという思いと動きができてきたように思っています。





愛知県東浦町立緒川小学校校長　伴　浩人氏

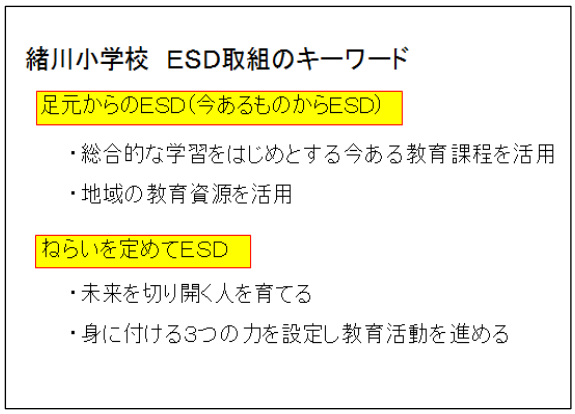
本校はオープンスクールであり、37 年目を迎えました。それまでの間、指導の個別化、学習の個性化を教育活動の大きな柱、よりどころとして進めてきました。ESD との出会いは 2010 年の末です。県の教育委員会から、

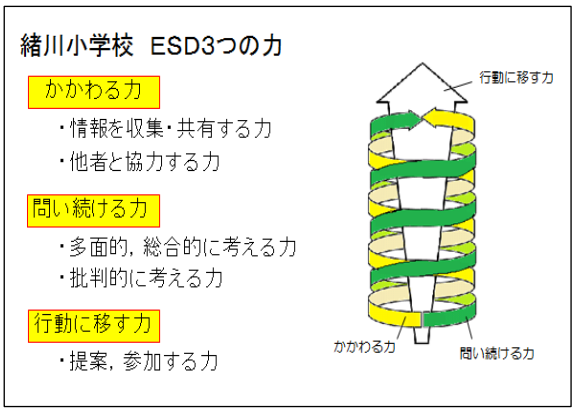
ESD をやってほしいと言われました。当時は教頭の立場でしたが、当時の校長は、「これはとても価値のあるものだ。今まで本校のやってきた教育を少し見直すことでやれることだね。そしてその価値をより高めることにつながっていくことだよね」と話されました。そして、学校全体で ESD を進めてきました。ユネスコスクールに登録されたのが 2011 年の 11 月ですから歴史があるわけではありませんし、実践の厚みがあるわけでもありません。しかし、本校が進めてきた ESD には 2 つのキーワードがあると思っています。

その 1 つは「足元からの ESD」。その中で 2 つあるのですが、1 つは、総合的な学習を始めとする今ある教育課程を活用していくことです。新しいことをやるのではない。今あるものを活用していくということです。もう 1 つは地域の教育資源を活用する。それまでも体験活動を本校は大変盛んにやっておりました。地域の方々、地域にあるものを活用した学習をしていましたが、それをもう一度整理し直し、見直してその価値を再認識して使っていこうという形で進めてきました。

もう 1 つのキーワードは「ねらいを定めて ESD」。要は「ねらう力」と言いますか、子どもにこんな子どもになってほしいという力を 3 つ設定しました。それが「関わる力、問い続ける力、行動に移す力」です。国立教育政策研究所、いわゆる国研にも ESD で身に付けてほしい力、育みたい力、あるいは態度があり、大変多岐にわたります。もう少しねらいを絞り込んで 3 つにしようと本校は決めました。ねらいを定めて子どもを育む、身に付ける力を絞り込むことでこんな子どもになってほしいということが職員間で共有できていると思っています。

図としては、関わる力、問い続ける力がスパイラル的にずっと伸びていく。すると、行動に移す力というものもどんどん太くなっていく。こうした子どもを育むことで未来を切り拓く。未来に左右されるのではなく、未来を切り拓く子どもたちに育っていく。そんな考えのもと ESD を進めているのが本校です。





福井県坂井市立鳴鹿小学校校長　前　義隆氏

鳴鹿小学校は九頭竜川が作る扇状地の要に位置し、単学級 137 名の学校です。6 学級に学級支援員が 4 名ついています。4 名ついているということは発達障害などいろいろ問題を抱えている子どもたちが多いということです。校区は昔からの農村部と福井大学の医学部関係者の官舎を中心とした住宅街からなっています。周囲は田んぼです。近くに県営のグリーンセンターという自然公園があります。鳴鹿小学校では、総合的な学習の時間を活用しまして、2002 年からビオトープ作りを始めました。その縁があってか、2007 年から 3 年間、環境省の

学校エコ改修と環境教育のモデル授業の指定を受けました。さらに、2010 年には福井県でユネスコスクールの活動を進めることになり、当時環境教育を熱心にやっていた本校に白羽の矢が当たり、12 月に加盟、翌 11 年度から環境教育を中心とした ESD 実践を進めています。主な活動は、1、2 年生は野菜を栽培したりビオトープや自然公園を利用した動植物の観察、3 年生は地区探検を通じて地域の自然や暮らし、地域にある私鉄などを調査、4 年生は社会と絡みますがゴミ問題から地域の環境調査や 3R 運動を調べて地域に PR しています。また、昨年度は、ビオトープ再生に取り組みました。私が来る前からアシやガマが生えていて、これはほっといていいものかと議論になり、福井大学の前園先生に来ていただいて、ある程度の手入れをしなければいけない、再生していこうと、取り組むことになりました。今の４年生の ESD 取組です。5 年生は学校田を利用して、米作りを通じて水、土、生物の関係を学んでいく。6 年生は鳴鹿地区の未来を考えていこうと、将来若者が減って高齢者ばかりの地区になるのではないかと人口問題を調べたりして、地域で発表する活動をしています。また、鳴鹿地区には北陸最大規模と言われている六呂瀬山古墳群があり、地域の中に六呂瀬山古墳群を愛する会という大変熱心な会があり、昨年 25 周年を迎え、古墳を再現したところで巫女の舞や土器を焼いたり並べたりといった活動している方とのつながりを含めて活動をしています。

ESD に取り組んでどんな変化があったかというテーマをいただき考えましたが、1 つは「教師の指導の幅が広がったのではないか」と思います。学校周辺の環境を教材化しようと、教師が外へ出ていろいろな目で教材を探すようになりました。虫が嫌いな先生も虫に触れられるようになるなど変化が見られ、特に、昨年中学校から異動してきた数学の教員が、虫の調査活動を通じて、自身の子どもの頃を思い出したようで子ども以上に目を輝かせて、授業教材にしていました。

2 つめは「子どもの自然に対する視野が広がった」ことです。”モズのはやにえ”は聞いたことがありましたが実物は見たことがありませんでした。「先生、モズのはやにえがありました」と子どもが言うので見に行くと、とても見にくいところにあるのですが、子どもたちがしっかり見つけていました。ビオトープでチョウが羽化したものを見つけてきました。大人にはなかなか探せないところでも見つけてきました。

３つめの地域のつながりという点では、公民館に出かけたり、幼稚園・保育園へ行ったりとか、地域のまちづくり協議会の方に協力いただいています。巣箱を作りたいと言うと協議会の人が教えてくださったり、地域の野菜作り名人に出会ったり、お年寄りの集まりのところに出かけていろいろ教えてもらったり、子どもは自分たちの学んだことを披露したりと活動が広がっています。

４つめは、学びのフィールドとして、座学ではなく外へ出ることを大事にしています。ビオトープはもちろんですが田んぼ、幼稚園・保育園へ出かけ、いろいろなことに気づき、学んでいます。この４つが広がったなと思います。

鈴木氏

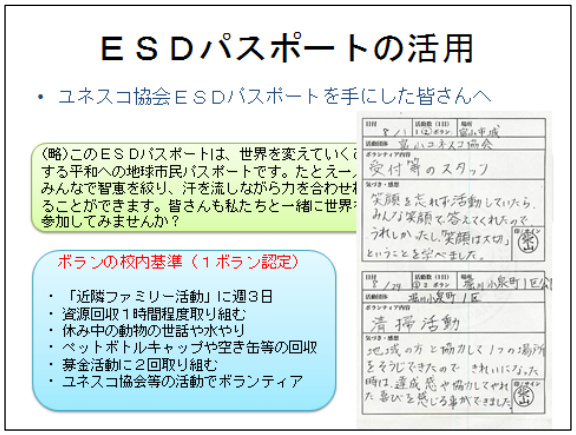
高木先生は、ESD を人として生きる構えを学ぶものだと捉えられているという話をされ、平和活動に触れた児童の変化や、ESD に取り組んだ児童の変化から教員自身が変化したという話でした。谷戸先生からはギフチョウを核にして、児童も教員もいかに変わっていったかというお話がありました。伴先生からは自分たちの地域で、国立教育政策研究所は ESD で身に付けたい 6 つの構成概念 7 つの能力態度といったことを言っていますが、小学校で 3 つの力というのに特に力を入れて取り組もうと決めて学習活動を展開しているという話がありました。国連が ESD の 10 年を始める時に世界全体としては身に付けたい力は 3 つあると言っていた話とほとんど共通するような力を選ばれたと思います。前先生からはビオトープを中心として授業を展開する中で教師も子どもも視野が広がり、自然に対する態度も変わってきたというお話をいただけたかと思います。

第 2 ラウンドは本日の中心的な課題です。学校で ESD を進めるにあたりいろいろと難しい部分があり、ESD を浸透させていこうとするときの、校長先生のイニシアティブが非常に重要であるとよく言われます。実際、校長先生が自ら感じている難しさ、それに対してどう取り組んでいくかというお話をいただきたいと思います。特に、今日は新居浜市の教育長にも参加いただいているので、教育委員会との関係や、学校が抱えている問題にどう取り組んでいるかということをお話しいただけたらと思います。

第 2 ラウンド　テーマ 3．ESD を浸透させるために感じている難しさと、それに対してどう取り組んでいくか

高木先生

教育委員会との関係というのもありますが、ユネスコスクールに限らず、富山の場合は、先ほどお話ししましたようにユネスコ協会との関わりが ESD をすすめていく上で非常に有効でした。ユネスコ協会そのものもいろいろなユネスコの活動に取り組んでいるのですが、どうやって広げていくかという時に、共にできることはなにかと学校と情報交換をしながら進んできました。そういう意味では、教育委員会というのは教育関係者との橋渡しであったり、市や県の環境政策に携わっている部局との橋渡しであったり、NGO との関係づくりを担っていただいています。私はユネスコ協会との関わりが非常によかったなと思っています。



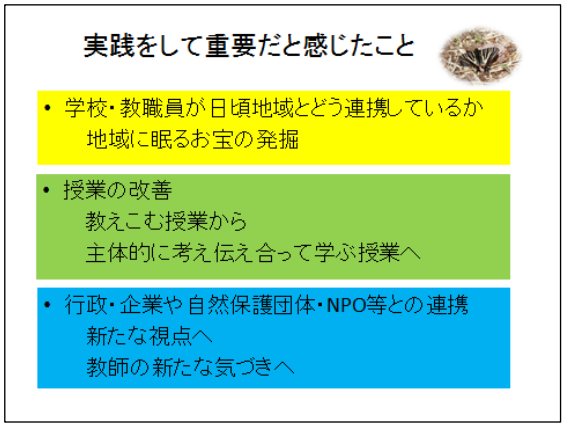
鈴木先生……

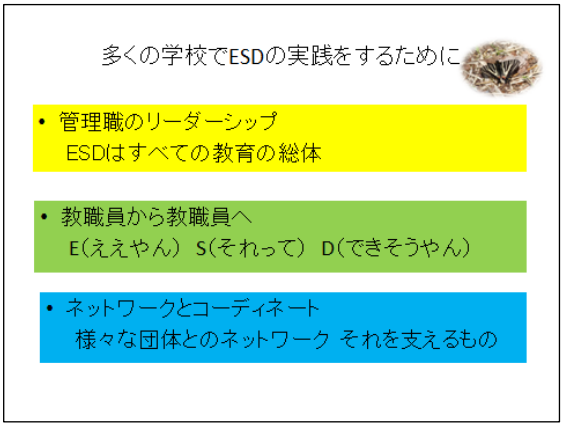
高木先生は以前教育委員会におられ、校長先生も経験されたということで、富山市で ESD を中心的に推進してこられた方のお話だと受け止めています。今、キーワードとしてユネスコ協会という団体名が出てきましたが、北陸の特徴として、北陸三県どこもユネスコ協会と非常にうまく連携協力しながら実践をしています。特に最近日本ユネスコ協会連盟が出している ESD パスポートをうまく活用することで子どもたちの関心をかきたてている面があるかと思います。

谷戸先生……

ESD を実践するにあたって、地域とどうつながっていくかという部分がキーワードになると思います。特に、本校は公民館が敷地内にあり、行き来がしやすい。顔も見やすい。地域でこういうことをやりたいと公民館を通しながら地域づくりの人たちと連携してやっていくという非常に良い立地にあると思います。学校がいろいろやりたいときに、コーディネートをしてくださる方が非常に重要になると思いますが、その方をどう探すかが大切です。公民館の主事や館長がいつもいてくださるので、その人たちがコーディネートを担ってくださっているという感じがあって、非常にいい。それとどう広めていくかに関しては、校内では教育の世界はこの頃食育、キャリア教育、防災教育など毎年テーマが増えていて、学校の中ではまた新しい教育をしないといけないのかという発想があります。ESD についても、これは一体なんだろう、と拒否感と言いますか、疲労感だけがあるという印象があります。ESD はそうではなく、それらを総体した教育で、一つの明確な方向性をもった教育であり、それが未来につながっていくという点を PR していかないといけません。

本校の教師が非常に燃えていまして、ESD を含めながらいろいろな取り組みをしております。しかし、その教師も転勤していきます。薦原小でいろいろ考えた教師が転勤先で広めてくれるということを期待しています。そういう広がりも必要だと思います。そういったことを教育委員会に応援していただく。一番良いのが、財政的な応援であり、資金面などいろいろな面で応援していただきたいです。





伴先生……

私は管理職として ESD の実践、学校での推進ということに教頭、校長という立場で関わってきました。その中で、経験的に感じたこと、実施したことについてお話しします。ESD を進めていくと、困難な ESD があります。それ

を「克服したい ESD」と書きましたが、まず１つめは学校の教職員です。「えー（E)、またなにかやるんですか」と言うんですね。いま学校は足し算の教育で、職員は満腹感、あるいは拒否感であふれているのが現実です。例えばキャリア教育をやれ、防災教育をやれ、最近ではがん教育をやれとまで言われています。そんな中で「ESD、またふってきたぞ」という感じです。それを克服したいということです。

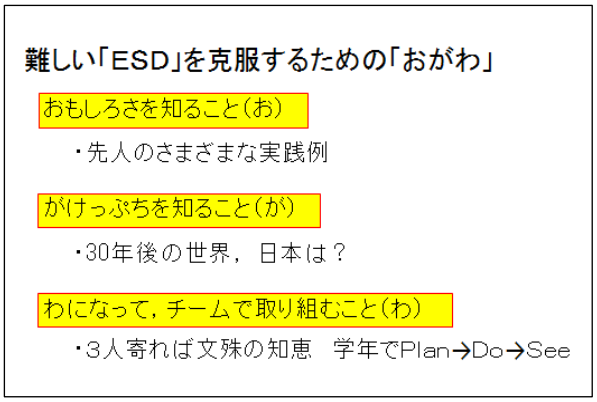
２つ目は「そ（S)れってなんですか」。これは教師にもあります、保護者にもあります、地域にもあります。分からないもの新しいものに対する危機感というものは保護者にもやはりありました。

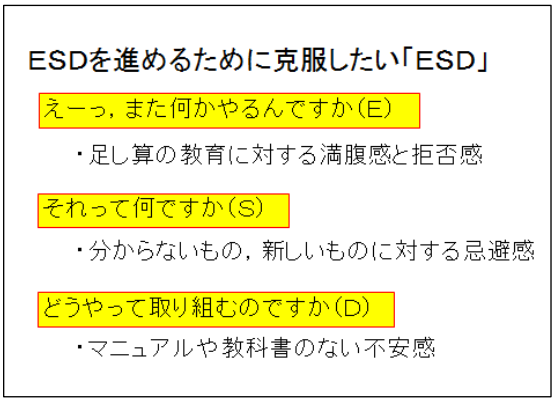
３つ目は「ど（D)うやって取り組むのですか」。教科書のない学習ですから、そういうものに対しての不安感が、主に教職員にあります。この「克服したい ESD」をどのように克服するのか。愛知県にある愛知淑徳大学に前田勝弘先生という先生がいらっしゃいます。前田先生が「授業というバスに、どうやって子どもたちを乗せていくか」という例えを話されます。私は「ESD というバスにどうやって教職員、保護者、地域の人に乗っていただくか、そして進んでいくか」と考えて次の３つを、緒川小なので「O・GA・WA」としていますが、あげています。

まず１つめは、先人の様々な実践例を知って、実践の「面白さ（O）」を知る。これは教職員です。本校でもかつてかなり実践しましたが、例えば天ぷらそばから世界が見える。これも ESD の実践例として再びスポットを当てていいのではないかという話もしました。あるいは豊かなコンビニエンスストアから食糧配給の問題や電気代、エネルギーについて考えるという実践がある。あるいは、牛肉。身近なところに牛がいるけれど、その牛って私たちの生活と関係しているのだろうか。そんなことを考える。これは、開発教育協会という団体がありますが、テキストがたくさん出ています。そういう本を職員と回し読みしたり紹介したり、面白さを知ってもらいました。

２つ目は、「がけっぷち（GA）」を知ることです。取り返しのつかないような世界になっていくことを知識として、情報としてたくさん共有すること。教職員にも、保護者にも言っています。特に保護者です。保護者の方には PTA の会議を利用して、直接私が話をしています。

３つめの「WA」は、輪になってと書きましたが、チームで実践の取組を進めること。一人で考えていてはなかなか進みません。３人寄れば文殊の知恵ではないですが、学年で PLAN-DO-SEE を進めていく。こんな形で難しい ESD を克服してきている途中です。





前先生……

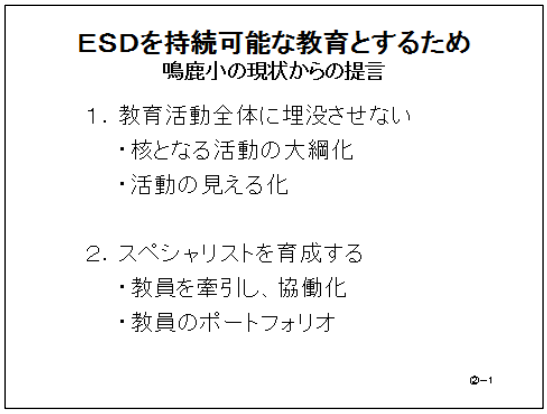
鳴鹿小学校には、財政的な支援はありません。坂井市に 24 小中学校がありますが、鳴鹿小だけがユネスコスクールに登録されています。学校内では広がりを見せつつありますが、なかなか「鳴鹿小が ESD をやっているよ」

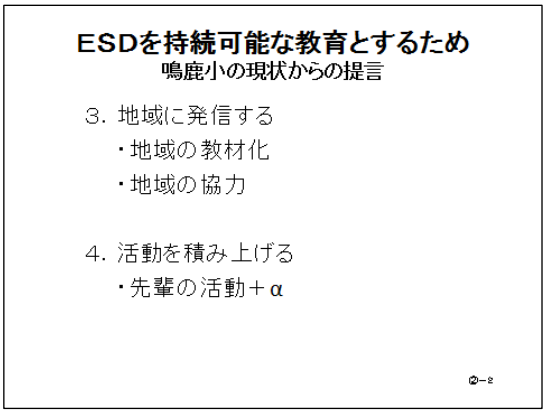
と言っても、それ何？という状況で、先ほども冗談で言ったのですが、AED と間違えている先生もいます。鳴鹿小の場合は、時々鈴木先生のお叱りを受けます。というのは、指定されて活動をしているのですが、見えなくなってしまっています。なぜ見えなくなってしまったのかを改めて考えると、ユネスコスクールの認定を受ける時に、それまで環境教育をやっていたので、「それをそのままやればいい。新しいことを特別にしなくてもいいから継続すれば総合的な学習でねらう力と、ESD で付けたい力というものはかなり重なっているのでそのままでいい」ということになっていました。ところが、昨年本校の職員が総ざらい異動しました。それまで強力に ESD を引っ張ってきた教員が全部異動し、いつしか見えなくなったという状況があります。ESD を持続可能な教育にするためには、1 つは、ESD を教育活動全体に埋没させないこと。ESD を意識化させる必要があるのではないかと議論を重ね、核となる活動を決めて、担任が授業改善、工夫をしています。また、ESD コーナーをつくり、見える化をしています。先日の子ども新聞にある学校の ESD コーナーの写真が載っていました。このように ESD を見える化させる必要があります。

２つ目として、経営者がいなくなってしまったということがありますが、強力なスペシャリストの育成、リーダーが必要ではないかということです。リーダーが担任におろし、全員で共有して、一人抜けても新たな後継者ができるという経営が必要だと思います。もう１つは教員がやってきた実践をポートフォリオにしてすべて残す。それを次の担任が見ることによってどのような活動をしていて、どのような工夫をして、どのように手続きをすればいいのかもわかるのではないかと思います。

３つ目は、地域に発信する。地域に発信をすれば地域の協力も得やすくなる。先ほどの巣箱づくりに協力していただいたり、地域の人がなにかできることがないかと頻繁に聞きに来られます。地域の協力がなければ ESD は実践できません。また、地域を教材化して地域に発表することで、地域の方自身の勉強になるということもあります。

４つ目の、活動を積み上げるというのは、今までは総合的な学習だと前の学年がしたことを次の学年もまた同じようなことをやるという形になっていました。どうしても子どもたちの興味が薄れるので、前の学年が実施したことそのままではなく、前の学年の実践に新しいものを積み上げていくということが必要であると思います。





鈴木先生……

教育委員会との関係がしっかりしている地域では、ESD やユネスコスクールも非常に幅広く普及しています。しかし、そうでないところもあります。最後にお話し下さった福井県の坂井市立鳴鹿小学校は校長先生が一生懸命頑張っています。そういった中でどうやったら校長先生が中心となって ESD を進めていけるのかを考える必要が

あります。
そのような視点を踏まえ、新居浜市の教育長である阿部先生と、現在金沢市のキゴ山少年自然の家の館長をしておられ、以前教育委員会にもおられ、校長先生もされた池端先生からコメントをいただきたいと思います。

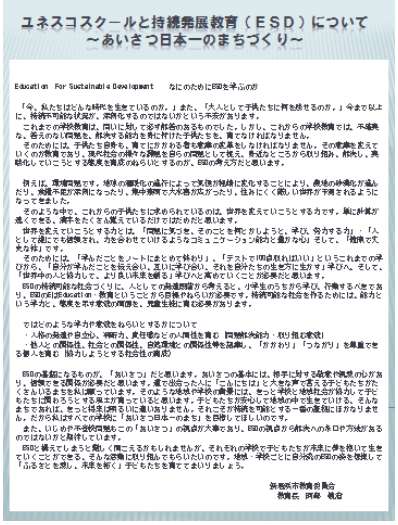
愛媛県新居浜市教育委員会教育長　阿部義澄氏

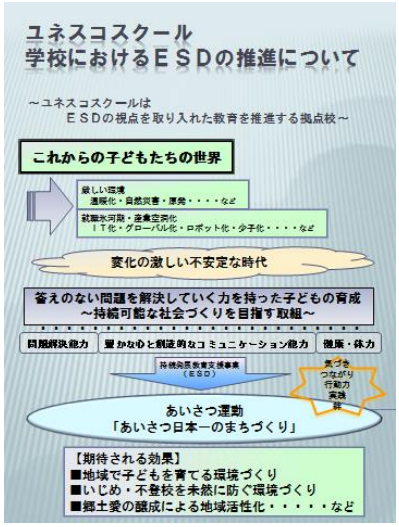
なぜ新居浜市で ESD かについて中心に話をしたいと思います。教育委員会の中で考え始めたのは 2011 から 2012 年頃で、ESD という捉え方について考え始めました。教育長に就任したのは 2002 年です。それまでは学校現場におりました。2004 年に一年に 5 つの台風が新居浜市の上を通り、そして 11 名が亡くなりました。土石流の怖さをその時に初めて体験しました。その事実に小中学生をどう関わらせていけばいいのかと悩みました。中学生を被災した場所にボランティアとして参加させるように指示すると学校や保護者から「病気になったらどうしてくれるのか」等々の問い合わせが来ました。「そんなことを言っている時ではないだろう」との思いから参加させました。その後、その時の体験から防災教育だけでいいのかと考えるようになりました。しかし学校現場にはいろいろな教育がついてきます。先ほどの校長先生の話にもありましたが、どうしてこんなに多種多様化した課題が教育に求められて、やらなくてはいけないことが増えて、学校現場を圧迫しています。

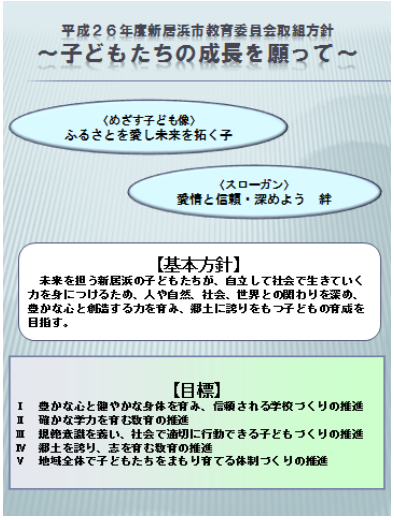
社会の進展とともにいろいろな要求要望が学校現場に寄せられます。たくさんある要望をどう整理すればいいのか。先生方が直接子どもに目を合わせて対応できる場を設定しなくてはいけない。そのような取捨選択をしなくては学校がパンクしてしまうだろうという思いでいた時、ユネスコスクールや ESD という捉え方を知りました。新居浜市にも 10 年前に新居浜ユネスコ協会が設置されていました。その時の関わりから、2011 年に教育委員会の中で考え始め、2012 から 2013 年に教育委員さんにも研修してもらおうと、奈良教育大学であったユネスコスクール全国大会に出張していただきました。また、校長会や教頭会での研修会等で、ユネスコスクールとは、ユネスコとは、ESD とは、という研修会を実施して、2013 年にユネスコスクールへの申請を始めました。今年 10 月末現在で市内の 26 校中 14 校が認定されています。

よく言われる言葉に、「校長が変われば、学校が変わる」と良い方向に変わったら良いように使われます。けれど、それだけではないのです。教育委員会としてトップダウンですべきこともあれば、ボトムアップですべきこともあると考えています。2014 年にはそのような形での取組ができるようにしたいと思いました。えひめグローバルネットワークや四国 EPO、鳴門教育大学などの支援を受けるようにもなりました。学校の力だけで、教育委員会の力だけではどうしたってできないと思います。いろいろな団体の支援があり、今の新居浜の教育があると思っています。

そういった中で 2013 年度からの実践にあたり、教務主任格を ESD 主任にすることを決めました。この ESD 主任は将来の新居浜市の教育を支える管理職になるような人材を選ぶよう校長に指示しました。しかし現在 ESD の取組に学校差が生じていることから今後教育委員会として取り組まなければならないこととして、再度 ESD の研修が必要だと思っています。ユネスコスクールとして認定されたことにより生じてきている学校差をなくしたい。そのため今後は今まで各校で取り組まれていた ESD 実践を 2015 年度は、統一した組織で何を学ばなくてはいけないのかなどを協議できる組織づくりをしたいと思っています。会場には NPO の方々もおられますので、新居浜市教育委員会の ESD 主任をどう鍛えていけばいいかという支援をお願いしたいと思います。







金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長/前校長　池端弘久氏

私は学校におりましたので、４人の校長先生のお話しを聞いていて、10 年、15 年前と比べると力強くESD が進んできたなと本当に思います。金沢市も、私が教育委員会にいた頃に ESD を立ち上げていく時期だったのですが、その時の問題意識は、総合的な学習の時間で本当に子どもたちの学力を向上するのか、本当に伸び代を伸ばすだけの力を持っているか、という危機感でした。学校を回っていると、体験をしっぱなしで終わる総合的な学習がほとんどでした。ところが今では、総合的な学習がすっかりこなれて、ESD をしっかり柱にして進んでいる教育課程がずいぶん定着しています。もう次のステージに進める段階に全国的に来ているのではないかなと思います。

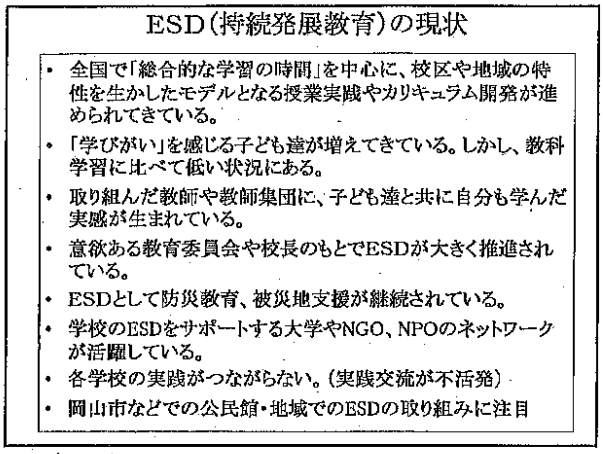
ただ懸念するのは、全国の学力調査の結果では、総合的な学習に対するやりがいを感じる子どもの割合と教科へのやりがいを感じる割合がやっぱり違います。総合的な学習に対するやりがいを感じる子どもの割合は、教科で感じる割合よりまだ低いのです。まだまだ総合的な学習について改善の余地があります。

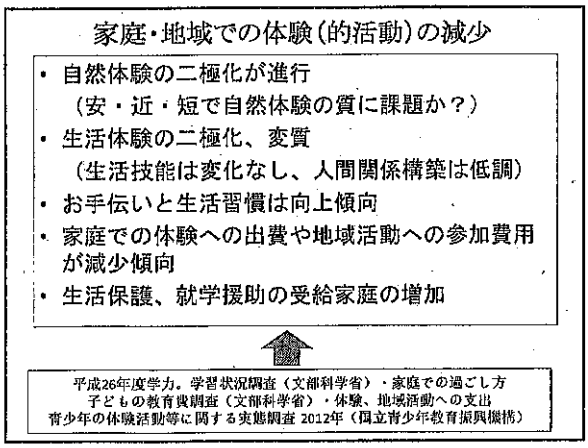
その１つはやはり、校長先生の話しからも出てきていましたが、子どもの姿を読み解いて、しっかり子どもたちに力が付いていると ESD あるいは総合的な学習の中で言っていかなくてはいけません。「やってよかったな」とか「力が付いたな」とか子どもが実感しなくてはいけません。子どもが思わなかったらやっている意味がありません。次のステージは校長先生が言われるように、子どもの姿とか先生が「これやって面白かったな」ということをみんなで寄せて、やりがいのある ESD だなと実感するところに持っていかなくてはいけないと思います。

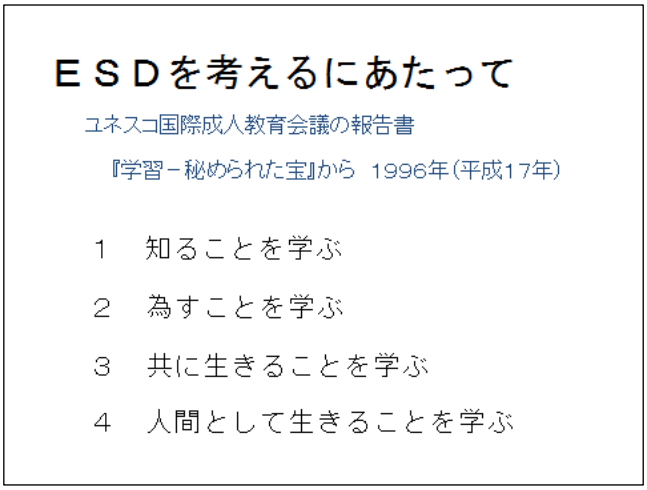
ただもう１点。今学校は内憂外患ですごい状況です。そしてもう一つ起こっていることがあります。子どもたちの家庭が疲弊しています。体験の状況をみると、家庭で、あるいは地域で、体験をしている率が昔に比べて少なくなってきています。子どもたちの体験が学校頼みになっているという傾向があって、これからもうしばらく学校も頑張らなくてはいけない時期が続くだろうと思います。そういった意味では子どもが置かれている状況からも、ESD の趣旨にのっとってはいますが、今一度体験的な活動を中核にしながらも子どもたちに力を付ける授業の在り方とは

何かということを根本的に見直し、頑張っていく必要があります。そこには２つのキーワードがあります。評価のことと、もう１つは教科で下支えをしていかないと子どもたちは探究的な学習が絶対出来ないということです。総合的な学習だけではなく、次のステージは評価とともに、教科とうまく相互に支え合うような授業スタイルを作っていかないと子どもたちは苦しいと思います。ですから学力の低い子どもたちの下支えをしっかり教科ですることと、教科の学習と総合的な学習の授業スタイルが少し一貫した形で実践されないと子どもたちはなかなか力が発揮できないだろうと思います。そういうところを校長先生のリーダーシップで、それぞれの学校の教育課題の解決のためにESDが使えると思って、これまでESDをやってこられてここにおられると思います。そのことは具体的に言うと、授業改善とは何なのか、とかあるいは、総合的な学習の改善とは何なのか、ESDに取り組むことでだんだん明らかになってきているということです。そのことを結集し合って、もう一つステージを上げて、何年か先の学力調査では総合的な学習のやりがいもぐっとあがっているように頑張りたいと思いました。

今日お話を聞いていて、校長先生方の理念について、よく似たたどり方をされていると思いました。堀川小の高木先生がユネスコの「秘められた宝」を読まれているとお聞きして、私もそうだったなと思いました。私もそれを読みながら勇気づけられながら、ユネスコに携わってきました。同じような学びをしながら皆さん頑張っていらっしゃるのだなと思いました。非常に共感しながら聞いておりました。頑張っていきましょう。







鈴木先生……

議論が２つになっていました。一つは、学校で教える内容、学校でいったい何をどう教えるべきかという話です。もう一つは、校長先生が頑張って ESD を進めていこうという時に、誰が助けてくれるかという話です。後者の話ですが、阿部教育長がお話になったように教育委員会がしっかりサポートをしてくれる場合があります。全国には教育委員会主導で一生懸命頑張ってユネスコスクールや ESD を進めている学校がいくつかあって、それはそれで非常にいいことだろうと思います。他方、教育委員会がサポートしてくれない学校もあって、その場合はどうするのか、例えば地域のユネスコ協会や、NPO、EPO 中部や四国 EPO のような組織が支援をしてくれるケースがあります。大学が支援する場合もあります。様々なケースがあったかと思います。

学校で ESD を進めていく際に一番中核となるのは、校長先生がいかにイニシアティブを発揮するかということです。今日お話しいただいた４人の校長先生は、積極的に先生たち、子どもたちを導いてくださった先生ですが、そういった先生方が頑張っていこうとする時に、どんな形の協力が必要なのか、できるのかということを次の機会に話したいと思います。

一方で内容的な話については、子どもたちに身に付けてほしい力について、それぞれの先生方から様々なお話がいただけました。たくさんの力を身に付けるというよりも、例えば伴先生がおっしゃっていたような、関わる力、問い続ける力、行動に移す力とある程度整理をして、集中的な形でそういった力を身に付けていくような方法が考えられると思います。また、池端先生がおっしゃったように、それをどう評価していくかという評価の仕方も今後の課題です。ESD は段々に進展していくプロセスですから、大体の学校はまず総合的な学習の時間から ESD が始まりますが、それに教科をいかにリンクさせていくか、教科による下支えが必要だという指摘もありました。

少しの時間ですが、フロアからご意見などあればお聞かせください。

手島利夫先生（東京都江東区立八名川小学校校長）……

良い実例をたくさん教えていただきました。それを支えてくださっている教育委員会の立場からのお話も伺いました。ESD を進める場合にはやはりボトムアップとして各学校で頑張るのと、それをトップダウンでこれやった方がいいと言った力と、やはり両方ないとうまくいかないと思っています。そういった話をしていただき、大変力強く感じました。それから、各学校で総合的な学習を進めるという時に、総合的な学習、あるいは生活科の主任が誰なのかというと、結構若い方がなることが多いです。その方に任せとけばいいんだという状況があり、生活・総合部会に行くとそういう方たちばかり集まって、という現状がよくあります。

そこに教務主任クラスの人を当てれば、生活総合を核にして、どのように学校教育をつくるのかということが見えてくるわけで、そういう視点を持って人を配置していくことはすごく大事なことだと思います。そういうことが学校の ESD を進めたり、ESD の取組が価値あるものになっていく、つながっていくのだなと、お話を伺いながら感じました。

竹内よし子さん（NPO 法人えひめグローバルネットワーク代表理事/四国 EPO）……

先ほどお話のあったボトムダウンとトップダウンの大切さを感じ、また間に入る NPO、EPO や大学といった中間組織の関わり方は地域ごとの特徴があっていいのかなと思いました。ぜひ、パートナーシップとネットワークを地域の状況に合わせてつくっていって、先生方が異動しても、つながり続けられる仕組みをも考えていきたいと思いました。

鈴木先生……

竹内さんは四国での ESD の推進のつなぎ役としてご尽力されてきた方です。校長先生が頑張って ESD を学校の中で進めていくという話をされる時に、やはりいろいろ大変なことがあります。その時に、いろいろな形で支援をして「入れる人たちがいてくれる」と非常に助かるだろうなと思います。それは教育委員会である場合もあるだろうし、なかなか教育委員会が動いてくれないけれど大学が助けてくれるということもあるでしょう。熱心な NGO の方が助けてくれることもあると思います。

竹内さんから、「先生方が転勤したら途切れてしまう。そうではなく、ネットワークやつながりをつくれば途切れない」という話がありました。日本の環境教育は過去 20 年ほど、「途切れてしまう環境教育」をずっと繰り返してきました。ESD ではそういった形にならないように、ずっと続けていけるような仕組みをいかに作っていけるかが重要です。地域の人たちとしっかりつながっていく中で、先生が変わっても地域の人たちから「あれどうなったの？やらないの？」という話が出てきて、ずっと続けているというケースが多々あります。そういった形での地域とのつながり、教育委員会や大学、NGO とユネスコスクールとのつながり、あるいは今日あまり出なかったのですが、校長会、教頭会、先生同士のつながりなど活用できるものがあると思っています。

今、教育委員会同士のつながりということで、多摩市や稲城市、大牟田市、勝山市、金沢市などの市町村の教育委員会のネットワークができています。校長先生も同様なネットワーキングができるとよいのではないかと思っています。

Table２　自己肯定感を育む ESD～これからの教育への提案

趣旨説明　新海洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィス）

20 年ほど前から一緒に環境教育や国際理解教育などを実践しているメンバーと一緒に、「自己肯定感大事だよね。でも育まれる環境はあるのかな」とこの 2 年余り協議をしてきました。その成果として、配布しました「これからの ESD 実践の提案。自己肯定感を育む環境をつくる」という提案書を作りました。

「私には未来をつくる力があるんだ」という自己肯定、自分自身の力を認めないと持続可能な社会はつくれないと私は考えています。「自己肯定感って一体なんなんだろう」「今の子どもたちの自己肯定感はどうなんだろう」「私たち大人たちができる事はなんだろう」と何度も行ったり来たりしながら、この提案書をまとめました。みなさんと、この提案書に書かれている内容を基に意見交換をしたい。出演者の青野桐子さんは NPO 法人こども NPO の事務局長であり、今の子どもたちには自由がないのではないかと話されています。子どもの主体性の育みをすすめていらっしゃいます。白上昌子さんは NPO 法人アスクネットの代表理事で、市民教育という領域で、学校と地域が連携して、子どもたちのシティズンシップを育む活動、民主主義教育というのでしょうか、に取り組んでおられます。滝栄一さんは NPO 法人名古屋 NGO センターに所属されていて、開発教育や、海外との関係の中で人は何を学ぶのかということに取り組んでおられます。NGO スタッフを育成する事業も行っています。川合眞二さんは、NPO 法人 NIED・国際理解教育センターの事務局長で、国際理解教育、人権教育、平和教育の普及、JICA と連携した教員研修などを行っています。土井ゆきこさんは、名古屋をフェアトレード・タウンにしよう会を作られた方で、この地域でのフェアトレードの普及、フェアトレードショップの経営もされています。学校でのフェアトレードの授業実践も多くされています。コメンテーターには、大塚明先生。伊豆市にある天城中学校の元校長先生で、ESD と自己肯定感を結び付け実践をされた方です。前野伸夫先生はあま市の甚目寺小学校の元校長先生です。人権教育をされていて、この間も自己肯定感の議論を何度もさせていただいています。そして、最後に伊沢令子さん、NPO 法人 NIED・国際理解教育センターの代表理事で、参加と対話をとことん実施するこの地域の名ファシリテーターです。

Table2 の流れについて　伊沢令子氏（NPO 法人 NIED・国際理解教育センター代表理事）

Table2 は、「私たちには未来をつくる力がある」自己肯定感を育む ESD～これからの教育への提案～というタイトルで、60 分行います。まず、提言書の説明をしたいのですが、提言書の構成は、3 つのビジョンと 8 つのミッションと 15 のアクションになっています。どんな提言書をどうやって作ったのか、誰とつくってきたのかを 15 分くらいでお話しします。その後、自己肯定感について専門的な知識を持っていらっしゃるアドバイザーの方から少しコメントをいただきます。そしてその後、提言書をまとめただけでは絵に描いた餅になってしまう、「こんなことやるといいよ」「こんな社会にしたいよね」と言っているだけでは実現しないので、私たちは何をどのようにしたらいいのか、どのようにこの提言内容を具現化することができるのか、という意見交換したいと思っています。グループでの対話を通して、「どうやったら自己肯定感を育む社会をつくることができるか」という事をグループで話し合っていただきたいです。各グループには、一人ずつこの提言書を作成したメンバーがいますので、メンバーに質問をしてください。でも主役は皆さんなので忌憚なく自分の経験を出していただいたり、アイデアを出したりしていただけると嬉しいです。

提言書の紹介　伊沢令子氏（NPO 法人 NIED・国際理解教育センター代表理事）

●提言書作成グループの紹介

特徴は、ESD というと多くの場合、環境に取り組んでいらっしゃる方が多いのですが、ESD の側面は環境だけではないです。人間、環境、平和といった様々なジャンルがありますけど、その中で特に人権教育や平和教育にフォーカスしているメンバーで作っていったことが一つの特徴かなと思います。

●自己肯定感をキーワードとした理由

なぜ今回自己肯定感というキーワードを選んだのか。ESD が目指す未来が一つ大きなビジョンにありますよね。人権、環境、平和などが守られる持続可能なより良い未来をつくることが目標になっています。でも、その目標、そんな未来を実現したいと思ったときに、現状を見ると、ローカルにおいてもグローバルにおいてもたくさんの課題を抱える社会です。地域の中を見ても、世界を見ても問題は山積みです。そんな課題のある現状を、ESD の目標である「人権と環境が守られる持続可能なより良い未来に向けて計画していこう」と思うのであれば何が必要か。一人一人が現状を知ったり、考えたり、何かに気付いたり、そして社会に関わる、課題解決に関わるために動いていくということが不可欠です。一人一人の行動変容が、不可欠だと考えています。

ではどうしたら一人一人の行動変容を支えることが出来るのか、と考えた時に、一人一人に「関わる力」を育てることが重要だと。関わる力、「わたし、あなた、みんなに関わる力」と私が取り組んでいる国際理解教育ではまとめていますけれど、私に関わる力、自分自身に関わる力がなければ、対人関係コミュニケーションを自信を持ってすることができないだろう。自分に関わる力だけではなく、あなたに関わる力は他者に関わる力で、コミュニケーションに関わる力です。私に関わる力とあなたに関わる力があれば、大事な私とあなたが生きているこの社会を何とかしていこう、社会に関わっていく力にもつながるだろう、みんなに関わる力は社会に関わる力、参加する協力する力だとしています。わたし、あなた、みんなに関わる力を付けていけば、自立と共生が実現した未来が拓かれるの

ではないだろうか、と自分たちの経験値の中から導き出しました。そして、わたし、あなた、みんなの力の一番コアになるものが「自己肯定感」です。自己肯定感を育てることこそが持続可能な社会を共に築くためには不可欠な力であることと同時に、ESD という教育を通して自己肯定感を育てることができる、という考えのもと、ESD の最終年度にあたり、「自己肯定感」をキーワードに提言をまとめ、発表することにしました。

●自己肯定感とは

自己肯定感というのは自分を尊重する気持ち、好きであるということですけど、その気持ちがなければ、他者に自信を持って向かい合うことも、ましてや社会に関心を持つこともなかなか難しいです。自分を大事に思えない、自分を好きだと思わないままでは、他者に共感したり、関心を持ったりすることは難しい。まず、最もコアになる自己肯定感をそれぞれの場所で、様々な場所で、様々な年代の人たちに育めるような社会をつくっていくことが持続可能な未来をつくっていくことの根本なのではないかと「自己肯定感」をテーマに選びました。

ただ、「自己肯定感」は、いろいろな研究が今なされていて、自己を肯定する気持ちには様々な種類があります。例えば、「自己効力感」は、私は何とかできるんだという気持ち、「自己有能感」は、このことをするだけの力を私は持っているという気持ち、「自己有用感」は、人のために役立つことが出来るんだという気持ち、そして最終的に「自己肯定感」という自分を肯定する気持ちです。自己効力感や有用感とかは、社会の要因によって挫折することもあります。社会の中で認めてくれる人が認めてくれるから自分は良いものだという気持ちがもとになっているのが自己効力感とか自己有能感です。社会の様々な要因に左右されない、打たれ強い、基本的な自尊感情、ありのままで自分のことを素のままで受容しているという基本的な自尊感情を「自己肯定感」とし焦点を当てました。なぜかというと自分はこの世界の中でたった一つの存在だからと、ゆるぎない、どんなものに評価をされようが、自分自身でありのままの自分を受け入れて、価値のあるものだと自信を持って進んでいくことが出来る「自己肯定感」を今回のポイントにしました。社会的な自己肯定感ではなく、基本的な「自己肯定感」、しなやかな他から打たれても倒れてもまたしなやかに起き上がることが出来るような基準となる「自己肯定感」を、今回は「自己肯定感」という言葉の中の意味合いとしています。

●提言書作成のプロセス

「自己肯定感はとても大事なものだよね」とか、「私たちが目指す社会とは自立と共生、自分が自分らしく生きるだけではなく、自分らしく生きたいと思っている他者と共に生きていくことが出来る社会を目指したい」と思っていたのですが、「現状はどうなんだろうか」というまずは現状の把握から始まりました。今、子どもたちの「自己肯定感」はとても低いと言われています。それは本当なのかと様々な調査を比較検討し、低くなる場面を結果として導きました。現状や背景については提案書に掲載しています。

現状としては、子どもたちの自己肯定感がなかなか育ちにくい社会となっている。どういうものが子どもたちの自己肯定や力の発展を阻害するのだろうかとメンバー全員で喧々諤々いろいろな状況や現状というものを調査しながら、こんなものが人々の自己肯定感を阻害するんだとまとめ、では逆に、どんなものが人の自己肯定感を育てるのだろうか、どんな場面だったり、出会いだったり、どんな体験だったりが人の自己肯定感を育てるのかということもメンバー全員で研究したり分析しました。そして、最終的に、こんなものや様々な場面があったら、私たちは一人一人の自己肯定感を育てていくことが出来るかもしれない、それを私たちだけではなく様々な教育的な現場にいらっしゃる方々に協力していただき、教育の共通基盤となっていけば、きっと社会は変わっていくのではないか、と

作ってきました。

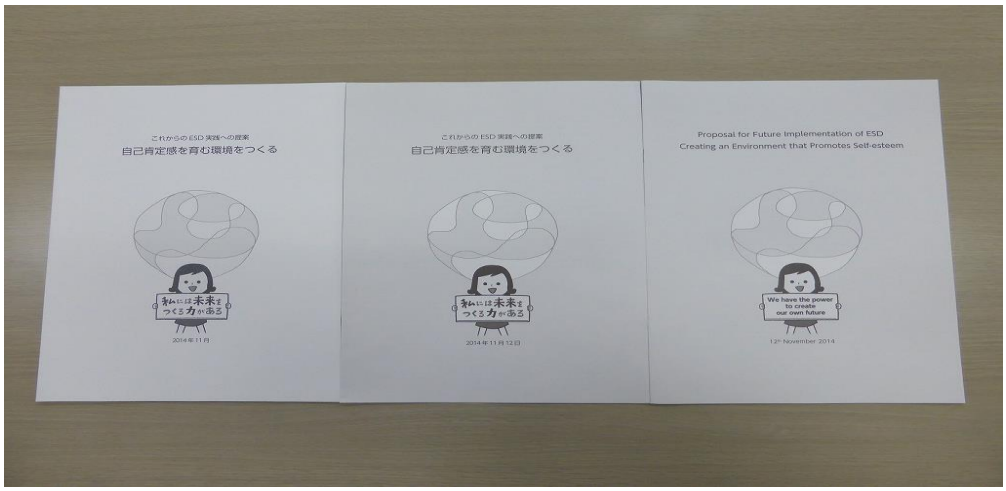
何が人の力を阻害するのだろうかとか、それはどんな人のどんな意識によって支えられてしまっているのだろうか、といったことを少しずつ分析しながら作成しました。私たち提言をまとめたメンバーは、具体的に自分たちの活動の中でどんなふうに自己肯定感と向き合っているのだろうか、どんなことを大事にしているのだろうかとか、自分たちがやってきた活動というのは、人の自己効力感、自己肯定感というものを育てるためにどんな風に具体的に役立ってきたのだろうかとふりかえり、自分たちの経験をもとに作成しました。また、それぞれの経験だけではなく、そこから一般化されて見つけ出されたものをまとめました。

●提言書の内容について（ビジョン、ミッション、アクション）

資料の中に 2 冊入っていますが、分厚いものに私たちのこれまでの研究チームの歩み、プロセスだったりとか、それぞれの団体がどのような活動をして、それがどう自己肯定感と結びついているのかという報告が書かれています。薄いものに、今日の議論のテーマになる提案が書かれています。

簡単に説明しますが、3 つのビジョン、方向性と 8 つのミッション、使命を説明します。15 のアクションについては各自で読んでいただきたいと思います。読んでいただいた後で、グループセッションに移ります。

ビジョンは 3 つありますが、1 つ目はまずは「自己肯定感に対する理解を深めよう」ということです。それぞれが自己肯定感ってなんなのかとか、なぜ自己肯定感が大切かということを知らないことにはこれに取り組むことができません。一人一人が自己肯定感の大切さや意味、理解を深めることを進めようというのが 1 つ目のビジョン、方向です。2 つ目は、「子どもの自己肯定感の傾向を伝える」です。日本の子どもたちの現状において、自己肯定感についてを楽観しているわけにはいかない状況なっていることを伝えていく。いろいろな調査研究の結果から、今の日本の子どもたちの自己肯定感は低まっている、子どもたちの自己肯定感は年齢を重ねるごとに低まってしまっている、自己肯定感が低いと自分の存在や生き方の意味づけや他者との関係づくりに弊害をもたらすことがある、ということを伝えていくことです。3 つ目は、「多様な人々と自己肯定感が育まれる環境をつくり、広げます」です。多様な人、いろいろなところに関わっている人々と一緒に自己肯定感が育まれる環境づくりをする。社会全体がそういう社会になっていくように、いろんな方々と協力して社会をつくり、広げていく。



左：提言書　中央：提言書（詳細版）　右：提言書（英訳版）

そのためのミッションが８つあります。１つ目は「子どもの持つ自ら育つ力を引き出します」。２つ目は、「子どもの力を信じて見守ります」。３つ目は、「子どもたちの居場所をつくります」。４つ目は、「自己形成の根っこを育む遊びの価値を社会化します」。５つ目は、「１人１人の違いや成長に応じた学びを展開します」。６つ目は、「プラスの連鎖を引き起こし続ける関係性、機会をつくります」。７つ目は、「世界の構造的な問題に目を向け、自分の存在価値、役割を認識する機会をつくります」。８つ目は、「ありのままの自分を認め、受け入れられる経験の機会をつくります」。このようなミッションを掲げました。

さらに、それを具体的にどう進めるかという 15 のアクションをつくりました。各自で、どんなアクションをすることが提案されているのかを読んで、各グループで足元からどんなことができるのだろう、とより具体化してお話をしていただきたい。その前に、アドバイザーの方からお話を伺います。

アドバイザー　大塚　明氏（伊豆市教育委員会心の教室相談員）

天城中学校の子どもたちの自尊感情が非常に低いことから何とかしたいと思い ESD に取り組んできました。いろいろな中学校を回りましたが、今の子どもたちはいろいろな意味で社会とのつながりが切れています。切れているつながりをつなぎなおすことが、ESD ではないかと考えました。ESD に取り組むことで自尊感情がどのように変化したかを大学で調査・分析してもらったところ、ESD の取組は自尊感情を高める有効な学びだという結果が得られました。今の子どもたちは夢を持っていなかったり、学習の意欲がなかったりしますが、それは自分に自信がもてなくて自尊感情が低いことからきています。そのような子どもたちが、体験を通して地域とつながり、様々な大人とつながることで地域に誇りをもち、地域の課題解決のプロセスに関わることで自尊感情（自己肯定感）を高めていくことのできる ESD は素晴らしい取組だと思います。

アドバイザー　前野　伸夫氏(あま市甚目寺小学校前校長)

３月まで甚目寺小学校におりまして、今は「子ども・若者育成支援推進法」に関係する仕事をしています。この仕事は、行政の立場における ESD 活動だなと私は思っています。今回のテーマには、自己肯定感を持てない若者の現象(ニート、引きこもりなど)が持続可能な社会につながっていかないという思いがあります。校長をしていた小学校では人権教育を柱にした ESD に取り組んでいました。学校は、学習指導要領に沿って、生きる力を育む実践を積み重ねていくことが大切です。その教育活動の連続が、自己肯定感を育むことになるからです。学校生活の中で自分のよさを見つけること、そして共感して生きるということが子どもにとっては非常に大事なことです。提案書でも紹介している具体的な手だては、甚目寺小学校の取組です。学校においては「まかせる」授業が重要です。子どもたちが話し合いを進める中でいろいろな解決方法や方向性を見出していく。そこに「まかせる」指導が存在します。また、学年をまたいで自己肯定感の育むエクササイズを積み重ねていくことも、学校の取組として大切かなと思います。甚目寺小では、４ 年生はソーシャルスキルトレーニング、５ 年生はハッピートークトレーニング、６ 年生は、アサーショントレーニングを実践しています。

グループワークの報告～6 グループ 1 分間プレゼンテーション

グループ A

このチームでは、「言葉」がキーワードとして出ました。日本語という言葉の特性上、どうしても上と下という者をつくる言葉の特性があるという話が出て、それを言葉として変えていくことがやり方としてあるのではないかという話でした。そのやり方にもいろいろとあると思いますが、それも落とし穴があったりして、全てがその方法論にのっとってやっていくというものではないかと思います。でも、そういった取組が必要ではないかと、**子どもたちの「いい言葉」をどんどん出していく**ことが「自己肯定感」を育てるうえで必要であると話されました。**いい言葉を子どもたちが重ねていくことでお互いを認め合う取り組みになる**のではないかという話でした。

宮城教育大学 4 年の学生です。私自身は ESD についてまだまだ勉強未熟な身ですが、今回 ESD というキーワードと、今まで教育そのものを勉強してきて学んできた自己肯定感というものがつながるんだというところに純粋に驚きました。いい勉強になりました。

グループ B

グループで話したのは、これを実現するにはということです。**ネットワークが必要**。学校だけ家庭だけというのは難しいということです。それと、学校の先生からプログラム開発を一緒にやってくれたらいいのではないか、という発言がありました。自己肯定感の自己があまり強いのは大変ではないか、という意見もありました。我が強いといじめにあうといった話も出ました。そういうこともケアしなくてはいけない。自己を考えて育んでいくという「育つ」ということを考えて視野に入れたほうがいい。あと、お母さんから、家庭、学校、地域の実践と言わないでという話もありました。**協働こそが授業**だという事です。

グループ C

福井大学という教職大学にいる立場から、いろいろな学校と先生方を見てきて、子どもの自己肯定感云々の前に、大人の自己肯定感、教員の自己肯定感が重要だと考えます。大人や教員の自己肯定感が低ければ、子どもの自己肯定感が高まるわけがないということで、どう高めていくかがこのグループの中心の議論となりました。特に地方では、大人の自己肯定感が低い。そこの地域に住んでいることを誇れないという事が子どもにも影響しているだろう。だからこの地域はダメだ、都会に出ようという意識がある。**子どもが地域の素晴らしさを客観的に見て、学習を通して、大人に発信していく**。特に、メディアを通して発信することで、他者から評価されることでその地域での居場所をどんどん作っていくことになる。地域での居場所は子どもたちの自信にもなるし、存在感、効用感にもなるだろう。そこで最終的にローカリスト、地域にないものを教育するのではなく、地域にあるものをしっかり勉強させる「あるもの教育」をする。それを使って日本式のアントレプレナーシップ（起業精神）を育むということです。

グループ D

このグループのキーワードだけピックアップすると、まずは提言書が学校現場でなされることが多くて、グループには行政関係と NPO 関係者がほぼ全員というところで、私たちは何をするんだろうということから始まりました。でも何かできることがあるだろうと絞り出したところ、**子どもと大人の接点を作ること**だった。それから、**いろんな人をつなぐ場が大切**で、それをどう作っていくかということを考えました。例えば、公民館など今ある施設を使っていくという意見がでました。あと、**失敗に学ぶ**こと。先ほども大人の自己肯定感と話されましたが、仕事の中でも、大人が失敗してもそこから学べるんだという意識になると、大人の周りにいる子どもたちにもそういった感情が養われるのではなかろうかということが話し合われました。

グループ E

自己肯定感はそもそも高いのか低いのかということで、園長さんが言っていたのは、幼児期の自己肯定感は高いと言っていました。小学校での取組は多いけれども、今のデータを見ていると、**小中高生こそ自己肯定感を高める取組が必要**ではないかということです。方法として出てきたのは、**子どもを信じる**とか、**考えさせる時間**が必要だとか、**高齢者による全面授業といった関係性の場所**が必要ではないかとかという方法が出てきました。全体の仕組みとしては、子どもに関わる指導者の提案を受け入れるトップの役割が重要ではないかということも出ていました。全体として、自己肯定感が低いのは子どものせいではない。**社会や国民性を変える**ことが必要です。**個人を大切にする風土や文化づくりを目指していくべき**ではないかという意見でまとまりました。

グループ F

グループでは、まず日本人の特徴ではないかという話から始まりました。学校の中でも正解しか言ってはいけないとか、間違ったことを言うとだめではないか、という気持ちになるということでした。その課題を解消していくためには、自分がここにいてもいいんだという自己肯定感とか、失敗をすることが大切だと話されました。ポイントは、**自分がたてた課題を自分で乗り越えていく**。それを続けていくことで、**自分の可能性を伸ばすということがこの自己肯定感につながる**という意見もありました。もう一つは海外の人は自己を持っていて、間違っているということや、正解ということに関わらず、どんどん発言をするというスタイルがあるという意見がありました。**海外の方との交流でこういう生き方があるんだということを知ること**が重要ではないかということです。もう一つが、**地元の人とつながる**。いろいろなことをやっている大人がいることで、**自分の人生は一つではない**という意識やいろいろな人と関わって、こういう場を持つことによって自分を認めることができる、だから大事なのではないかという話になりました。

みんなが言葉を選んで話す。そうすると、いい環境が保てるし、自己肯定感にもつながるのではないかなと思います。**自分をたくさん表現していくこと**も大切です。

全体共有

Table 1

池端　弘久氏(金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長/前校長)

校長先生サミットでは、学校の中で校長先生方が中核になっていかにESDを苦労しながら進めてきたかなど、いろいろなことについて話し合いました。やはり学校は、一般解で行われているところが少なくて、それぞれの事情があって、それぞれの問題解決をするためにそれぞれが頑張っている側面があります。よって、ESDを導入するにあたっても、それぞれの学校の理念や課題を ESD でどう解決できていくのかを校長先生が苦心して、問題意識を持って学校の中に導入されていると思いました。中には、「伝え合う授業に転換したい」という点で ESD が意識の改革に役立つのではないかと実践している学校や、ESD を取り組むにあたって、これまでのユネスコ協会との連携のもとでしっかりやれていく、そういった道筋が見えているといったことや、敷地の中に公民館があるので公民館と組みながらやっている学校があったりなど、やはり一般解はなくて、それぞれの学校がそれぞれの特殊解を求めるために、学校長として ESD を組み入れた経営方針をどのように立てているのかということなどを話しました。

教育委員会から降ってきて困ったが、それを克服して、今では先生が少しずつ変わりつつある学校や、ボトムアップで自分たちから始めた学校もあり、それぞれの学校の特徴についての話がでました。教育長からは、「いや、両方必要なんだ」という意見がありました。教育を経営的に見た時に、教育委員会として判断するときもある。そのために教育委員会が支援しているというような話もありました。今日は ESD が 10 年経ち、今後についての話もできると思ったのですが、時間切れでした。でも、校長先生の話の中にアイデアがいくつかあったように思います。校長先生は常に自分たちの学校経営を見定める時に、子どもの姿や教師の姿の変化を見ていらっしゃる。それによって成否が決まる。ですから今後も ESD がブラッシュアップされていくためには、これをやって本当に子どもの姿が変わっている、あるいは教師が変わっている、そしてその結果として学校が変わっているのかということを検証、モニタリングしながらやっていくという次のステージに入っていくのかなと考えます。

もう一つは、他の学校との交流がまだなく、自分の学校で精一杯な状態にあるのかと感じました。ですから次のステージは閉じこもらないで、他の学校と子どもたち自身が、あるいは先生方が交流して新たな気づきが始まって次へのステージに上がれたらいいなと思いました。

校長先生方の言葉の端々に、今学校はいろんなことに対応しなければいけなくて大変だという本音が出ていました。○○教育をしなさい、とか××教育をしなさいと言われている。子どもたちの変化や家庭の変化もあります。ESD を進める時はやはり学校を支援していただけるもう一つのエンジンが必要なのではないかなと思います。実は自尊感情や自己肯定感とかに非常に興味がありまして、作成されたレポートにも書いてあるのですが、子どもたちの現状を見るともう学校のエンジンだけで地域の文化拠点といって頑張っている状況ではないと思います。NPO や NGO の皆さんの支えや、PTA や公民館といった地域の支えがないと、多分やっていけないのが今の状況です。にもかかわらず、ESD の理念が学校を通してでしか発信をされていかない。ちょっと閉じているのではないかと思います。先日、岡山へ行った時に、岡山では公民館を通した ESD をやっている。やはり文科省も教育委員会も学校教育ともう一つ、社会教育の場で、ESD に取り組まないと学校は ESD を頑張っているよと言っても「それなあに」と地域の中で埋もれてしまう気がします。ですから、ぜひ教育委員会も文部科学省も、生涯学習や社会教

育を通して、「学校が ESD 教育をやっていることは価値がある」ということを啓発していただくことが重要だと思いながら聞いていました。

校長先生方は学校経営の課題に応じて、ESD を利用してやっていくというところもありますが、私はもう一つ、ESD は目的でもあると思います。手段であると同時に目的でもあると思っています。ESD が示す概念や中身は大きな価値を持っています。ですから、これが全部学習方法や手法を支える概念にとどまらず、ぜひ、子どもの「学びがい」を支えているのは、体験をして楽しかったということだけではなく、自分に力が付いた、知識がついたという実感です。そのためにもぜひ、文科省や教育委員会としてもESDが求めている知識とは何かを明らかにしていくことが大切です。子どもは「学びがい」を教科に比べてまだ、十分に感じていないと思います。こういった取組が必要かなと個人的に思っています。

阿部　義澄氏（愛媛県新居浜市教育委員会教育長）

今日ここに来て、仲間が増えたなという思いです。新居浜市では、ESD をつなぐモノとして、各学校の繋ぐモノとして、あいさつ運動を取り上げています。新居浜市の小中学校のHPを見ていただきたい。あいさつは心をつなぐし、人をつなぎます。新居浜市全体の盛り上がりになったらいいなと実践しています。まちづくりに協力していきたい。それを ESD という捉え方で進めています。

手島　利夫氏（東京都江東区立八名川小学校校長）

ESD の 10 年が今終わろうとしていますが、何ができたのか、そしてどう変わってきたのか。まず、環境等問題に対して、日本の方々が大変意識が高くなった。それから最後のところに来て、「持続可能な」という言葉がとても広がってきた。意識が変わってきたということが大きな成果だと思います。学校はどうなったか。日本の教育の質的な転換がこの ESD を入れることで進んでいると思います。どういうことかと言うと、今までの「教え込み」の教育から「学び方」の教育へ変わってきた。探求的な学び方になってきた。それから教科中心の点数をとればいいという教育から、総合的な、横断的なつながりを重視する教育になってきた。ESD カレンダーもこのことに貢献できたのではないかと思います。それから、そういうことができるようになって、ある先生だけの問題ではなく、ホールスクールアプローチができた。つまり学校全体で方向性を持って取り組むことができる。これが大事なことだということがはっきりしてきた。そして、教師の役割が変わったのです。教える人、知識を伝達する人ではなくなってきた。つまり学習を、いろいろな人とのつながりを作ってコーディネートする役割が教師の役割だとはっきりしてきました。変わってきました。そして、最後に、教育は学校だけでやるのではないことがはっきりしてきました。いろんな教育関係機関と、支えていただけるいろんなところとつながりを持って、それをうまく子どもたちのために役立てていくのが学校であり、教育機関の役割だと変わってきました。もっともっと文科省がトップダウンでやってほしい。私たちは学校の現場から、あるいは地域の現場から、ボトムアップでやっていきます。そして力を合わせて日本の教育を未来あるものにしていきたい。

鈴木　克徳氏（金沢大学教授/EPO 中部運営委員）

はっきりと分かったことは、学校で ESD を進めていこうとした時に、校長先生のイニシアティブが非常に重要だということが今日の校長先生方の発表から明らかになりました。手島先生からホールスクールアプローチという難しい言葉が出ましたが、学校全体として一つのアプローチ、一学年の総合的な学習の時間だけではなく、学校全体で ESD を進めていくことが非常に大切とご指摘をいただきました。まさにその通りです。決して 10 年が終わったと思っているわけではなく、ESD の 10 年は助走期間、これからが本格的な時期です。そのために学校で、学校だけではないですが、学校で一生懸命 ESD を進めていくという意味では、校長先生がこれからもイニシアティブをとり続けることが非常に重要だということが改めて再認識されたのではないかと思います。ただ、その時に先生一人に、校長先生一人に頑張ってくださいというのはなかなか大変です。だからこそ、いろいろな形で支えてくれる人たちがいることも明らかになってきました。それは、阿部先生のように教育委員会が支えてくれるような場面、あるいは地域の NGO や公民館、大学が支えるなどいろいろな形のつながりがあります。特に、地域とのつながりを作っていく中で、継続的に ESD を進めていくことができるようになることが明らかになっただろうと思います。これからも校長先生が一生懸命、頑張っていけるように、ネットワーク化も進めていければいいのでは、が結論だったと思います。

「自己肯定感」という言葉は実はなかなか難しいと思います。「自己肯定感」という言葉の中にいろいろなものが実は含まれている。ただ褒めればいいということではなく、いいところをしっかり見つけ出して褒めていく、あるいはいいところをもっと伸ばしていくというものだろうと思います。

今、隣で世界会議をしていますが、ESD を進めるにあたり２つ重要なことがあると言われています。一つは、内容です。未来に向かっていったい何を学んでいくか。もう一つは学び方です。これは両輪と言われています。どういう学び方をするかが ESD を学んでいく際に非常に重要だという指摘を世界会議で、10 年の成果報告書にはっきり書かれています。そういった意味で、中身と同時に、どういった形であれば自己肯定感を高めていけるのかということをさらに私たちみんなで磨き上げていければ非常にいいのではないかなと思います。

Table 2

伊沢　令子氏(NPO 法人 NIED・国際理解教育センター代表理事)

ESD を通して自己肯定感を育てあう環境を作ろうと、作成した提言書を参加者の皆さんに読んでいただいて、それをもとにしてどうやってさらにそれを具現化することが出来るのだろうか、誰と共にすることが出来るのだろうか、何が重要だろうかをグループごとに話していただきました。

私たちの提言グループは「自己肯定感なくして未来はない」とくらい思っていたのですが、そこまで強い言葉だと躊躇される方もいらっしゃるかもしれないと、「自己肯定感が未来をひらく」とソフトな表現になっていますが、想いは、「自己肯定感なくしては未来はない」「持続可能な未来は自己肯定感を育てることでしか拓いていくことができない」と思っています。ここに集まっている皆さんも、自己肯定感が大事であると思っているのですが、私たちが一緒になって「自己肯定感が育まれる環境をどうやって作っていくことができるか」をテーマに話された内容をお話します。まずは、「言葉」がとても大事である。言葉がキーワードになる。ヒエラルキーを作ってしまうような言葉、例えば謙遜の文化とか、褒められたらついつい「いや、そんなことはありません」というような、上下関係を表してしまうような言葉ではなく、そこから脱する言葉を私たちが使っていくという事がとても大事だ。「いい言葉」を集めて、そこに囲まれて子どもが育っていくことが出来るのであれば「自己肯定感」を育てていくことができるだろうという意見です。

次に、みんなで自己肯定感を育てあっていく環境をつくるためには、まずはネットワークが大切だという意見です。学校だけ、地域だけ、家庭だけではなくネットワークがとても大事であると同時に、育てるためのプログラム開発が具体的なノウハウとして大事であろうということでした。ともすると、自己肯定感の高さが我の強さという風に思われてしまいがちだったり、我の強い子は扱いづらいと思われたりしがちですが、我が強いことと自己肯定感が高いこととの区別、そこを明確にしっかりと認識して新たに取り組んでいく必要がある。家庭での実践も大事である。

家庭での実践や、場を越えた協働は大事だけれど、そもそも子どもたちの「自己肯定感」が低いということは大人自身の「自己肯定感」の低さにもある。大人の自己肯定感を育てていかないといけない。例えば、地域、地方など自分が住んでいるところに誇りを持てない、地域を愛せないことは、自己肯定感につながらないので、子どもたちには自分たちの地域が誇れるように地域の価値あるものを見つけ出していくような、そんな学習機会が必要なのかもしれない。そして、そのことを他者に評価してもらう。そんな機会で自分たちの誇りや自身が育っていくといい。後は、提言書の内容は、学校教育にフォーカスしていることが多かったのですが、でも、学校現場だけでなく、行政だったり NPO だったり、子どもと大人をつないでいく、接点を作るようなそんな機会が大切である。岡山で公民館を使ってという事例がありましたが、そんな様々な場所で大人と子どもをつないでいく、そんなような場所を作っていくことも役立つかもしれない。そして、失敗してもいいよ、失敗から学ぶことができるよ、と社会の中では大人がなかなか失敗を認められない、失敗を避けている傾向があるかもしれませんが、まずは大人自身が失敗からも学ぶことができると思えることが重要である。

幼稚園児は自己肯定感が高いけれども、小中高になるにつれて自己肯定感が低まるというのであれば、小中高でこそ自己肯定感を高めるために子どもたちを信じるとか、答えを聞く教育ではなく、考える時間や場をもつ。「あなたの考えは何ですか？」と問いかける教育が必要かもしれません。自己肯定感はこんなふうに育つと提案に耳を傾けるトップの存在はとても重要です。トップの方が共感してくださり、そんな教育を学校全体で実践していこうということがとても重要です。子どもたちにはここにいていいよ、失敗してもいいんだよ、自分で立てた目標はあな

た自身が越えていく力があるんだよと、メッセージをしっかり伝えていけるような大人でありたい。日本と比べて海外の方はセルフエスティーム（自尊感情）が高いと言わるけれど、であるならば海外の人たちと沢山交流する機会を経て、自己の在り方はどうしたらいいのかを考え、自分が強く立つ、しなやかさを持つということがどういうことかをその交流の中から学ぶことも重要です。

そして最後は、人生は一つではない。それぞれが選んで考えて自分の人生を生きていいということを知るために、多様な人たちと交流する。多様な人たちの生き方を認めていけるような大人、環境にしていくことが大切です。

そんなことを、各グループで話され、まとめられました。これで ESD の 10 年が終わりますが、終わりは始まりで、ここからが本当に新たな始まりだと思います。自己肯定感を育てていくことを社会全員で、全体で取り組めたらたぶん、未来は明るいと思っています。

大塚　明氏（伊豆市教育委員会心の教室相談員）

いろいろな話を伺いながら感じたのは、まず、子どもたちが学校で荒れるとか、不登校、ひきこもりになってしまうというのはすべて大人の責任だと私はいつも思っていました。結局子どもがそうなってしまうのは、大人がそうしてしまうから。ではどうすればいいのかと考えたとき、最も大切なことはつながりです。地域とのつながり、大人とのつながりが自己肯定感を育てます。少し前の日本では当たり前だった地域や大人とのつながりを取り戻すことだと考えています。地域の大人がきちんと子どもと向き合い温かく見守る社会を作り直すことです。それは学校だけでは不可能です。学校と社会が、地域の大人が真剣に子どもと向き合うことで実現するものです。また、学校現場では ESD を通して、いくつもの答えが考えられる問いに自分なりの答えを導く力を養う必要があります。今までのような知識注入型の授業から問題解決型の授業へと教育改革を進めなくてはなりません。この 10 年間で ESD がこうやって広がっていくことは非常に嬉しいのですが、いろいろな調査を見ると、ESD を知っている教員が非常に少ないということが現状です。ぜひ、次の 10 年に向けてここにいらっしゃる方々がさらに ESD を広めていってほしいと思います。そして、各学校では ESD を持続可能にする工夫を是非してほしいと思います。

閉会挨拶　新海洋子（環境省中部環境パートナーシップオフィス）

今同じ時間、この場所で世界会議が行われています。世界会議と連携した会議のいくつかのレポートに、セルフエスティームという言葉が書かれています。海外の人たちは自己肯定感が高いと言われていますが、世界会議においても、子どもたちの自己肯定感の育みが重要だと言われているのです。世界での、共通の重要なキーワードになっていると思います。今日は同じ時間に同じ場所で、2 つのセミナーを同時並行で行いました。こうやって皆さんと話す場を 2015 年以降どんどん作っていかなくてはいけない。校長先生のお話も、自己肯定感についての話も一緒に議論し、さらに ESD の質も実践数も拡大してくように、パワーアップしていくための場を作っていきたい。2014 年で終わりではありません。2015 年以降さらに発展していくために、皆さんと一緒に議論を重ね、現場の変容を生み出していきたいと考えています。

⑤会議の様子

●Table１

●左上　阿部教育長　新居浜市教育委員会

右上　手島校長　八名川小学校と出演者

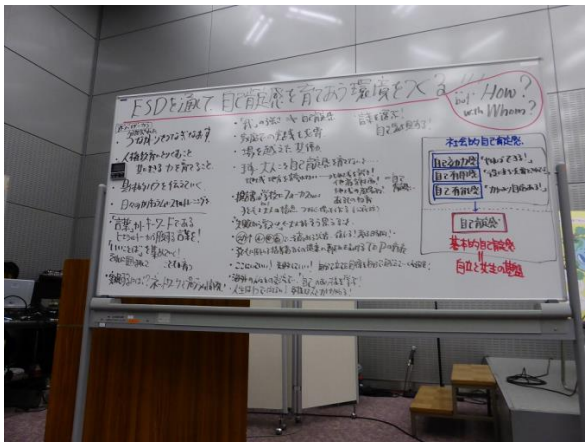
左中　高木校長　堀川小学校

　　谷戸校長　薦原小学校

右中　フロアの様子

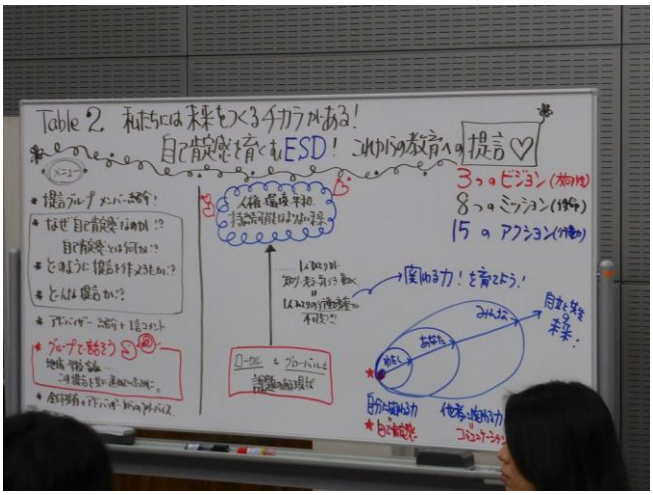
左下　全体会で報告の様子

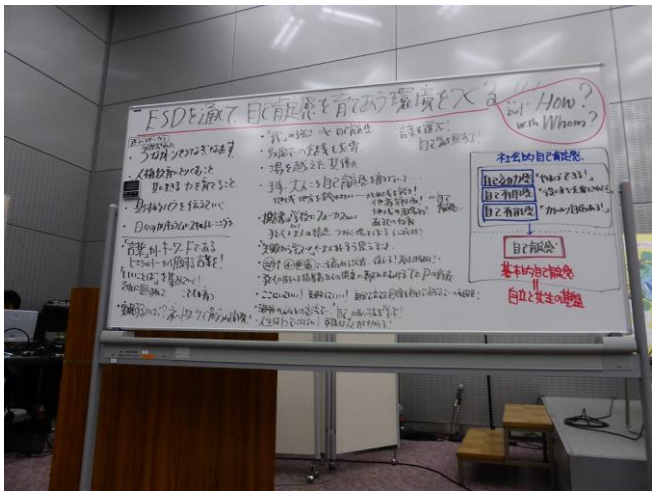
●Table 2

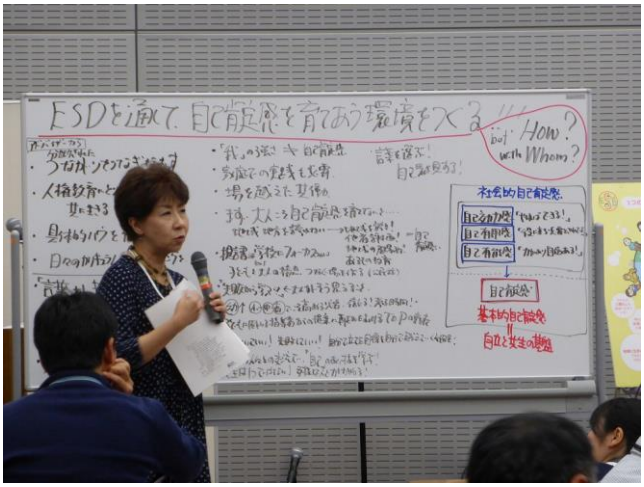


●提案書のファシリテートグラフィックと全体の様子

●グループワークの様子







- **上：提案書のポイント図とグループワークのまとめ**
- **中：グループワークの発表の様子　中右：大塚氏からのアドバイス**
- **下左：前野氏からのアドバイス　　下右：全体総括する伊澤氏**

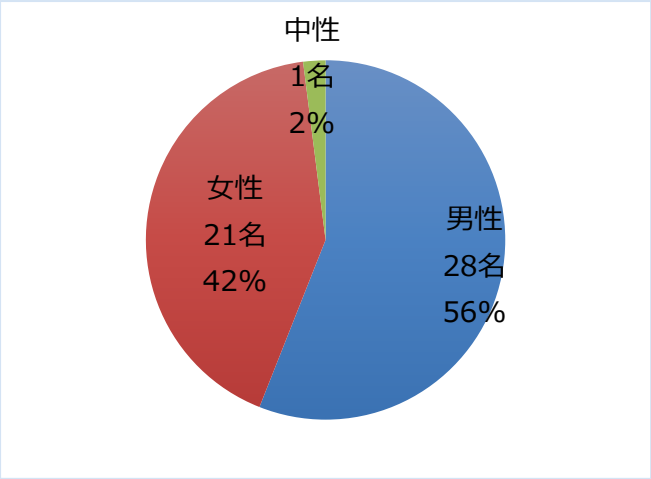
⑥ESD ユネスコ世界会議併催イベント「みんなの ESD 会議」アンケート

回答者：50 名/86 名

●参加者

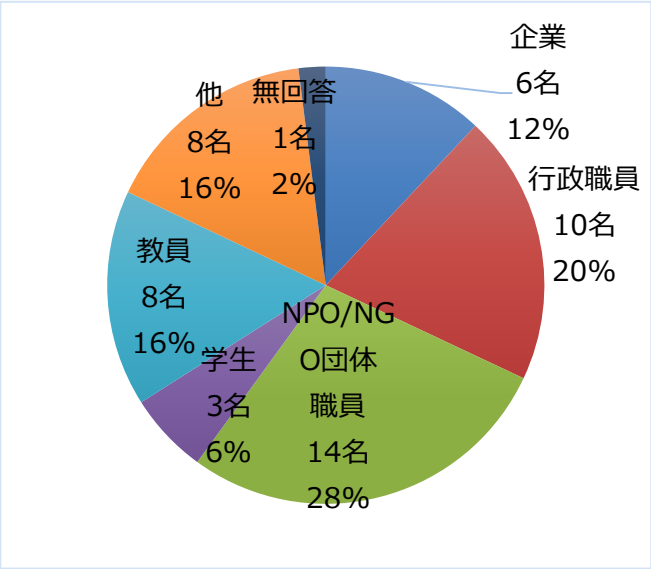
［性別］

男性	28 名
女性	21 名
中性	1 名
合計	50 名



［所属］

企業	6 名
行政職員	10 名
NPO	14 名
学生	3 名
教員	8 名
他	8 名
無回答	1 名
合計	50 名

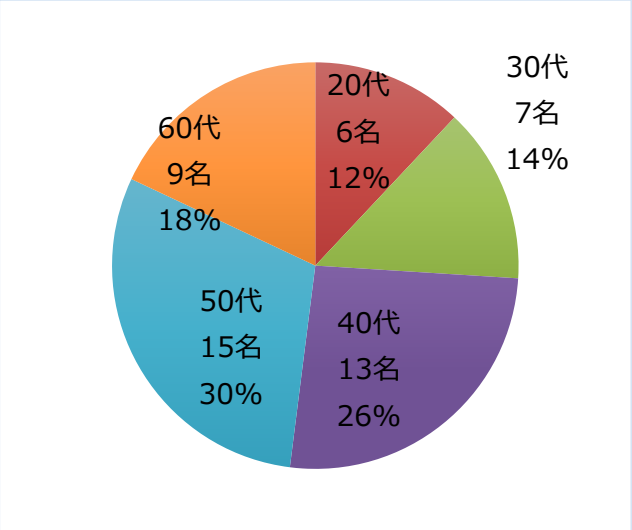


「他」の内容

- ●一般社団法人
- ●保育園園長
- ●フリー

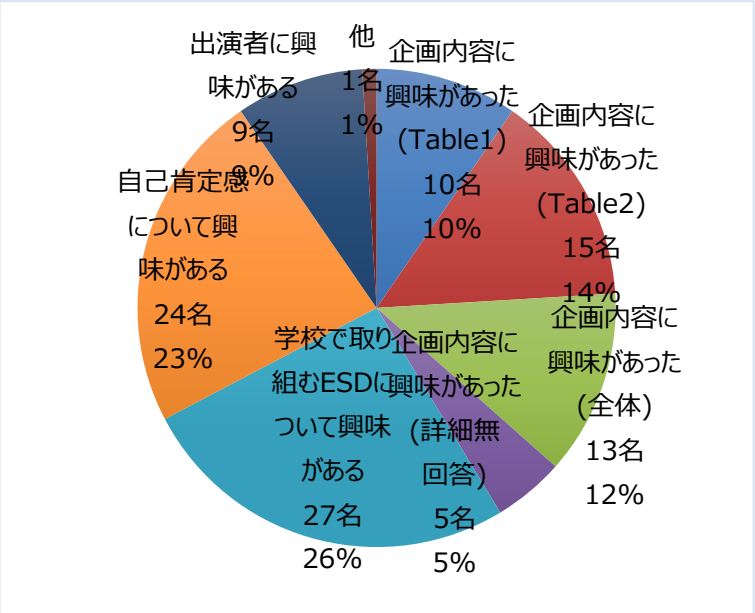
［年代］

～10 代	0 名
20 代	6 名
30 代	7 名
40 代	13 名
50 代	15 名
60 代	9 名
70 代～	0 名
無回答	0 名
合計	50 名



■本会議への参加動機をお聞かせください。(複数回答可)

企画内容に興味があった(Table1)	10 名
企画内容に興味があった(Table2)	15 名
企画内容に興味があった(全体)	13 名
企画内容に興味があった(詳細無回答)	5 名
学校で取り組む ESD について興味がある	27 名
自己肯定感について興味がある	24 名
出演者に興味がある	9 名
他	1 名
無回答	0 名



[具体的にお聞かせください]

●学校が ESD を進める上で抱えている課題等を知りたかった。
●豊田市で環境活動を広げるヒントを得たかった。
●皆様が未来をどのように考え学んでいるのか知りたかったです。
●もう少し時間がほしかった。
●定時制高校で自己肯定感を育む取り組みをしたい。
●ESD の取組が一過性のもので終わることがないようにどのような組織づくりをしていくか。
●EPO 中部との関りがあった。
●「みんなの」というフレーズがいいなと思ったので参加しました。
●ESD に対する校長先生の意識、ねらいなどが聞ければと思い参加した。
●ESD の 10 年を終えて今後を学校と NPO、NGO で共につくるのかと考えていたが。
●ワークショップ型で自分の発言ができる。
●出演者からの誘いで。
●「関係性」に着目される議論がよくされてよかった。
●子どもたちにとって学校と地域の居場所をつなげることが大切と考えたから。
●地域が支える(セクシャル)マイノリティーが生き易い社会。
●子どもたちに言葉の選び方を教えているので、自己肯定感にとても興味がありました。
●自己肯定感を高めることで子供たちの未来があかるい！このような場に来られたことを嬉しく思います。
●子どもと大人が集い、元気になれる居場所が必要。
●日々忙しい中でどの様な形で ESD を取り入れていくのか興味がありました。

●出演者にすすめられて参加しました。

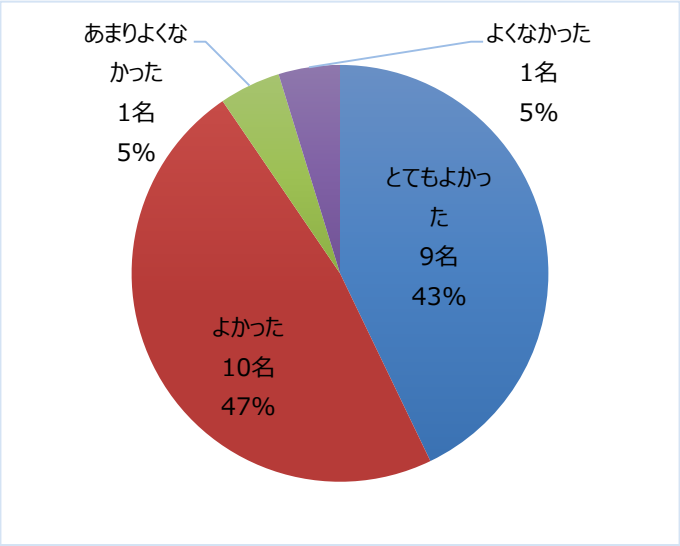
●教育に取り組む NPO 職員として自己肯定感の必要性は分かるものの深めたかったため。

●ESD の 10 年のまとめとして、どのような話し合いや発表、提言がなされるのかがとても興味があったため。

■本会議についてお聞かせください

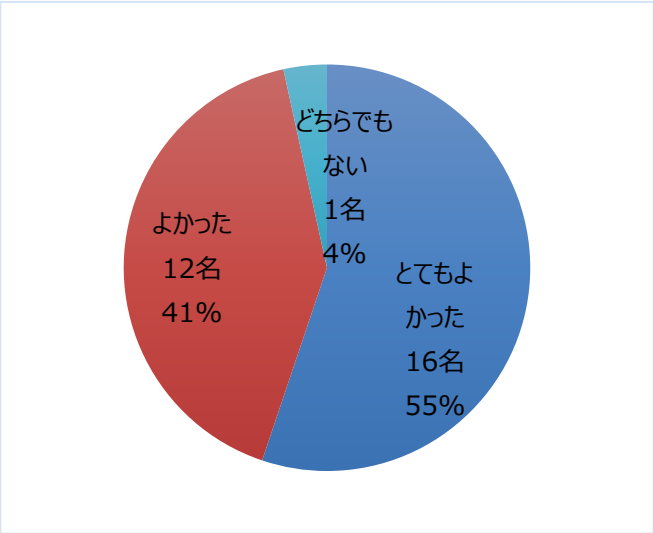
①Table1「校長先生サミット」に参加された方に

とてもよかった	9 名
よかった	10 名
あまりよくなかった	1 名
よくなかった	1 名
どちらでもない	0 名
合計	21 名



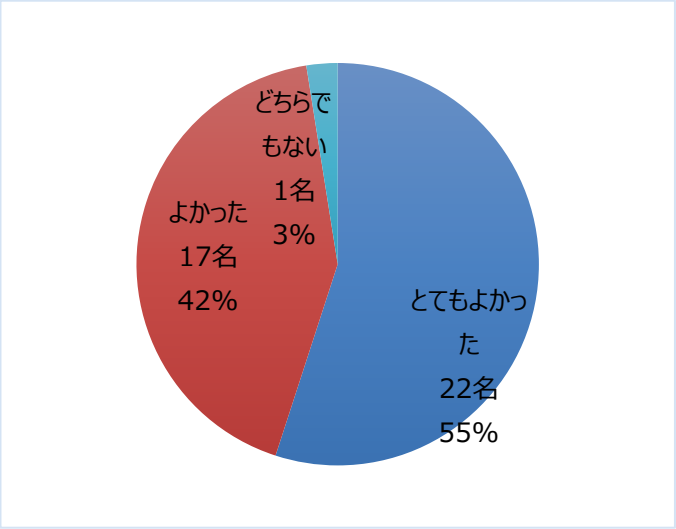
②Table2「自己肯定感を育む ESD」に参加された方に

とてもよかった	16 名
よかった	12 名
あまりよくなかった	0 名
よくなかった	0 名
どちらでもない	1 名
合計	29 名



③会議全体

とてもよかった	22 名
よかった	17 名
あまりよくなかった	0 名
よくなかった	0 名
どちらでもない	1 名
無回答	10 名
合計	50 名



［理由をお聞かせください。］

TABLE1 参加者

●たくさんのヒントが得られた。
●両方に参加したかった。
●ネットワークづくりの大切さなど参考にできるところがたくさんあった。
●つながりを感じることができた。要素がよく掴めた。
●他の学校の校長の意見が聞けたのが良かった。共通店が多く参考になった。
●ESD を進める上で、各学校が工夫していること、考えられていることが深いレベルで紹介され、大変勉強になりました。今後 ESD を進める上での力点が見えてきたような気がします。
●学校が ESD に取り組み直面した課題を解決するプロセス等を聞けて、有意義であった。
●教育関係者の考え方がよくわかった。
●事例を知れたことはプラスになった。
●映像・記事から ESD について勉強する事はあっても「生の声」も聞く機会はなかったので、よかったと思います。
●マイクがない状況が多く聞きたいところが聞こえなかった。
●鈴木先生の声が小さすぎてわからん。結局聞くだけに終わった。

TABLE2 参加者

●前野先生の発表をたのしみにきました。
●ワークショップには時間が短い。
●もっとたくさんお話をきいていたかったです
●時間がもう少し欲しい。
●とても前向きなディスカッション・とりまとめで刺激になりました。
●もう少し時間があればよかったように思います。
●自らの活動の見直しとなった。もう少し、共有の時間がほしかった。
●時間が足りないと感じでした。内容がすごく充実していたので。

●「言葉」や「地域」など多様な視点から考えることができた。
●自己肯定感と ESD のつながりが分かったから。
●サミットの議論が聞けなくて残念。
●地域と学校との連携が効果的だと学校関係者が述べていることが分かりとてもよかった。
●「自己肯定感」を育むには地域が不可欠。ネットワークづくりが大切。
●自己肯定感についてさまざまな方面からおはなしが聞けてとても勉強になりました。
●自己肯定感を高めることの話が聞けたので。
●あらためて子どものコミュニティを豊かにすることの重要性を確認した。
●とてもよかったですが、早足感がありました。
●NPO,NGO の方々と話す機会がもててよかった。
●ファシリテーターの方が大変わかりやすくまとめていただいた。校長先生の生の声が聞け、希望が持てた。
●提案をもとにしているのがよかった。

■本会議及び 2015 年以降の ESD 取組についてのご提案、気づかれたこと、改善点、今後の ESD 企画へのご要望などお聞かせください。

●半分程ほとんど先生方の声が聞こえなかったのが非常に残念でした。内容が良かったので、もったいなかった。
●地域に戻ったときにこの熱が広げられるとよいのだが、一部の人しかわかってくれないかな。
●自己肯定感は一番大切。自分を自分のありのままにみとめられれば、他人のことをもっと認められるようになる。未来の子どもたちのために何か・貢献できれば幸せだと思っています。
●学校教育において ESD のとりくみの必要性や課題があることが分かった。地域との協働、コーディネーターをつくっていくことを今後やっていきたい。
●まとめとしてはとても良い内容が聞けて勉強になりました。ありがとうございます。今後企業の中でどのように生かすか考えていきます。
●多様なステークホルダーでワークショップができてよかった！
●現場も変えていくためにはキーパーソンが必要。もっともっと広めていくために地域のコーディネーターや取り組みを支援するキーパーソンとなる人材の育成がこれからの課題になるのです。
●今後もっと校長先生や教育委員会の方々と NPO が話せる場を！つくっていきましょう！
●各地域の取組をどうネットワーク化していくかが大切だともいます。
●街中エコビレッジ・いるかビレッジを取材して下さい。
●ESD が SD となれる要素の確認。
●テーマどおり、みんなで次の 10 年をすすめていけると確信しました。学校も社会教育も NPO も市民みんなで社会がかえられるかも！
●いまやっていることを地域の中でつなげること。
●自己肯定感を考える時、自己とは何かをもっと考える必要がある。
●学校の内と外をつなぐ企画が必要か、時間がもう少しあると良かったですね。でも御苦労様でした。

●未来志向、手法、目標などのキーワードはでてるが歴史、大人の否定感などの話が出なくて"接続"という歴史ができるか、伝統を守れるか不安。
●参加メンバーが多岐に分かれており、いろんな意見を聴くことが出来たことは成果。
●私たちのテーブルは立場が全く異なる人で話し合いができ、非常に有意義だった。最初からふり分けてしまっても良いと思う。
●学校・地域・NPO がつながって ESD を進める場づくりに期待。
●学校の現役の校長先生とも交流できてよかったです。
●対話できたことがよかった。マイノリティーの視点でも話したいと思います。
●子ども園も子どもと大人の接点を増やす。
●子供たちはなんせとても忙しい毎日のように思いますので、「あらたな教科がふえた」といった感覚にとられない様に自然な形でとりくみ出来るように先生方はがんばってほしいと思います。大切な地球を守るために ESD の活動が広がっていけたらいいなと考えます。
●今後、独自で ESD を進めるとともに、どことどう連携していけるのか分かると良かったです。
●これまでの取組をベースに 2015 年以降も ESD の取組が広がったり深まったりしていくことを願っています。「ESD は未来に掛ける虹」だと思っています。様々な色の様子な色が一つとなって、明確な方向性となっています。社会教育や保護者、社会にも浸透していくことができるよう力を入れていけるといいと思います。すばらしい交流セミナーに参加させて頂き、ありがとうございました。中部 EPO の皆さま、お疲れさまでした。
●ESD は社会を変える。

⑦広報チラシ

ESDユネスコ世界会議 併催イベント ESD交流セミナー

みんなのESD会議
～この10年の活かしかた～

パートナーシップ事業 ESD AICHI-NAGOYA

日時 2014年11月12日(水) 11:30～13:00(開場11:00)

会場 名古屋国際会議場 レセプションB 〒456-0036 名古屋市熱田区熱田西町1番1号
※会場へは環境配慮の公共交通機関をご利用ください

定員 120名 ※事前登録制(当日参加はできません。必ず事前にご登録ください。)

地域や学校で次世代の可能性をひきだすために…。
自己肯定感を育むために…。
物事を判断する力をつけるために…。
ESDを実践し続けるために…。
校長先生、先生、こどもたち、NPO/NGO…。
みんなの経験や知恵を重ね、
「これからのESD」を語りあいます。

会場案内

地下鉄名城線 西高蔵駅から徒歩約5分
地下鉄名港線 日比野駅から徒歩約5分

プログラム

11:30～11:40
主旨説明

11:40～12:40
同時進行セッション
Table1
Table2

12:40～13:00
全体共有TIME

Table1 60名
校長先生サミット
～地域と学校がESDの現場をつくる

Table2 60名
自己肯定感を育むESD
～これからの教育への提案

2005年にスタートした国連ESD10年キャンペーン期間中に、地域では多様なESDの取組みが行われています。本企画では、主に学校と地域の連携によるESD取組を事例として取り上げ、ESD取組が地域にしっかり根づくためにすべきこと、またESD取組に必須な課題、ESD授業づくりのノウハウなどを、教員を始め、こどもも大人も学び合う場をつくります。題して、「みんなのESD会議」です。

●主催：環境省中部地方環境事務所、環境省中部環境パートナーシップオフィス、金沢大学環境保全センター●

Table 1 校長先生サミット ～地域と学校がESDの現場をつくる

学校の経営方針にESDを掲げて、ESDカレンダー等を作成し、学校全体でESDに取り組んでいる、取り組もうとしている学校の校長先生をゲストに迎え、各学校のESD取組の特徴やスキームについて伺います。

地域とどのように連携をして授業づくりをしているのかなどのお話をお聞きし、今後学校と地域が連携・融合して、ESD取組を継続するためのスキームについて意見を交わします。

【出演者】

高木要志男 氏（富山県富山市立堀川小学校長）

谷戸　実 氏（三重県名張市立鷹原小学校校長）

伴　浩人 氏（愛知県東浦町立緒川小学校校長）

前　義隆 氏（福井県坂井市立鳴鹿小学校校長）

【コメンテーター】

阿部義澄 氏（愛媛県新居浜市教育委員会教育長）

池端弘久 氏

（金沢市教育委員会生涯学習部生涯学習課キゴ山少年自然の家館長/前校長）

鈴木克徳 氏（金沢大学教授/EPO中部運営委員）

Table 2 自己肯定感を育むESD ～これからの教育への提案

持続可能な社会をつくるためには、「私には未来をつくる力がある」と自己の存在、自分を大切にできる自己肯定感の育みが大切です。

愛知県内の教育NPO/NGOが2年間議論を重ね、家庭、学校、地域などあらゆる教育の場に、自己肯定感の育みが取り入れられるための提案書を作成しました。提案を紹介しつつ、今後私たちが起こすべきアクションについて意見を交わします。

【出演者】

青野桐子 氏（NPO法人こどもNPO事務局長）

伊沢令子 氏（NPO法人NIED・国際理解教育センター代表理事）

川合眞二 氏（NPO法人NIED・国際理解教育センター事務局長）

白上昌子 氏（NPO法人アスクネット代表理事）

滝　栄一 氏（NPO法人名古屋NGOセンター）

土井ゆきこ 氏（名古屋をフェアトレード・タウンにしよう会）

【コメンテーター】

大塚　明 氏（伊豆市教育委員会心の教室相談員）

前野伸夫 氏（前校長）

●TABLE1は、環境省「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業」と連携して実施します。

●全体進行・ファシリテーター　新海洋子　高橋美穂（環境省中部環境パートナーシップオフィス）

申込方法

❶下記のURLで申込者情報を入力し、申込者のマイページを作成する。

https://convention-net.jp/cg/esd_reg/index.html

▼

❷ 併催イベントへの参加
ESD交流セミナー
みんなのESD会議
～この10年の活かしかた～
環境省中部環境
パートナーシップオフィス

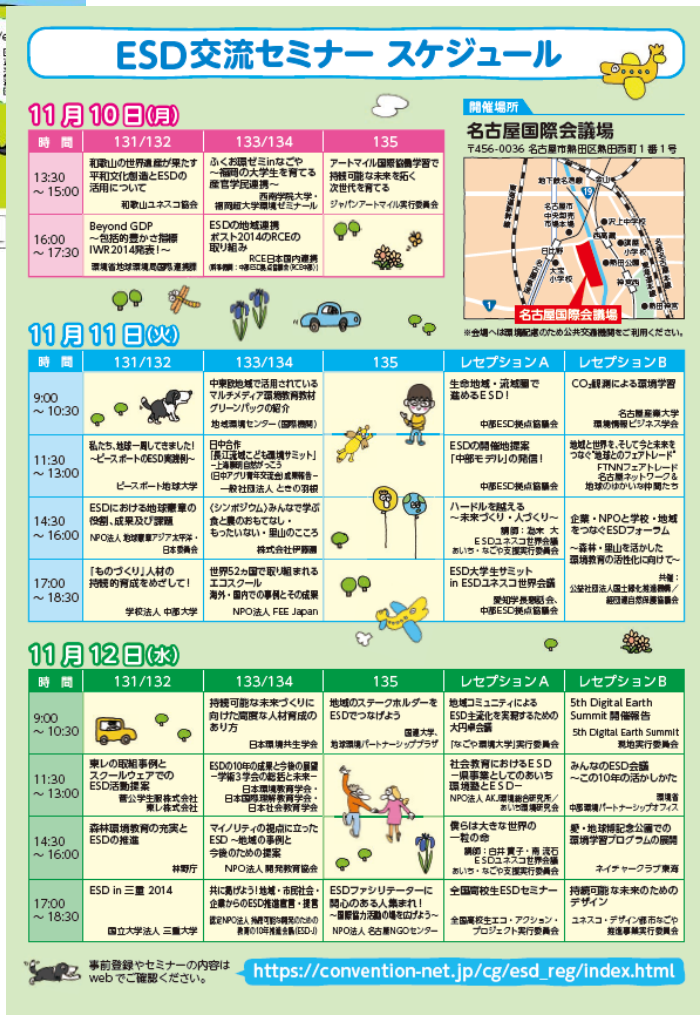
をクリックして
申込みを完了してください。

※入場にはIDカードが必要なため、必ずご登録ください。
また当日は免許証など証明書をご持参ください。
入場手続きにお時間がかかる場合があります。
早めにお越しください。

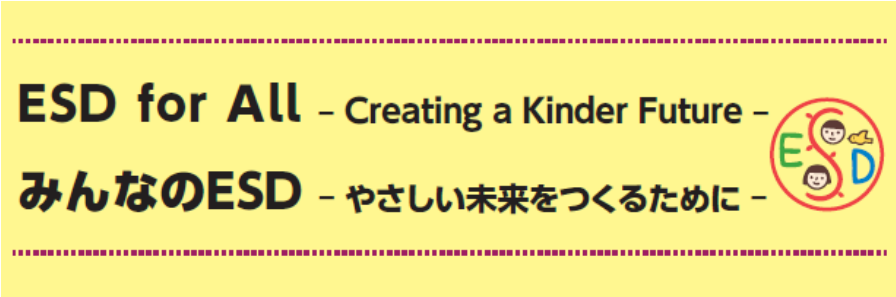
お問合先

環境省中部環境パートナーシップオフィス
〒460-0003 名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル4F
TEL 052-218-8605　FAX 052-218-8606
E-mail office@epo-chubu.jp
Webサイト http://www.epo-chubu.jp

⑧ESD 交流セミナー主催者作成広報チラシに掲載



⑨製作した展示パネル（英訳含む）



⑩パネル展示：日本政府歓迎レセプション会場（ウエスティンなごやキャッスル）

パネル展示：名古屋国際会議場

（３）総括

企業を対象に実施した ESD セミナーの成果の一つは、名古屋商工会議所との協働企画、運営したことで、非常に多くの参加者を得られたことである。企業への ESD 普及啓発が十分に進まず、ESD と名をつけた取組を進めている企業がまだまだ少ない中、名古屋商工会議所が作成した「企業が取り組む環境教育～ESD の普及に向けて～」掲載企業等の参加を得ることができ、ESD ユネスコ世界会議をきっかけに、新しい動きを創ることができるのではないかという実感を持てるフォーラムであった。

二つ目の成果は、大企業、地元の大企業、中小企業各２社に ESD の取組紹介を依頼したことで、①共通して実施できること、②中小企業だからこそできること、③大企業だからできること、などそれぞれのプレゼンテーションから、思いや志、社員や組織の変化を垣間見た。それぞれの企業の得意な領域での ESD 取組展開がされており、画一的な ESD 展開ではなく、例えば、本業での展開、CSR での展開、社員教育での実施など ESD を進めるためのやり方はいろいろあることを学びあった。また経営方針にきちんと取り入れることによって、社風に変化みられると言った話もあった。

三つ目の成果は、事例紹介のあとに、「ぺちゃくちゃ TIME」を設けたことで、参加者同士が事例紹介で受けた刺激を共有することができ、それぞれの問題意識や、実施してみたい、してみようという取組についての意見交換ができた。

さらに、川嶋氏の最後のメッセージ 「ESDとは、心豊かな未来を描く練習であり、希望のメッセージを伝えていく。何を手にしたときに幸せを感じるのか。そんな未来の姿の絵を描こう。」から、所属する組織が違っていても、人として、今を生きるものとして誰もが重要だと認識すべき価値に触れることができた。

参加者のアンケートから、第 2 部に関しては 95%の方がよかった（とてもよかった含む）、フォーラム全体として 93%の方がよかった（とてもよかった含む）の結果がでており、参加者にとって学び多い空間となったと評価している。

課題は、今後である。ESD の大切さに気づいた企業が、取組ためのサポート、セミナーやコンサルティング機能をどこにどう設けるか、また実施した取組をどう評価していくか、本地域で多様なステークホルダーによる ESD 実践が拡大するために、EPO 中部始め、ESD のリーディング組織がどのように企業に関わっていくかが重要だと考える。

種は蒔かれ、いかに土壌を豊かにしていくか、栄養を注いでいくか、この課題解決の為の方策を検討する段階である。「ESD がわからない、難しい、何をすればよいのか」「これまでの環境教育とは何が違うのか」とまだよく問われる。しかし、気づいた主体も多くいる。ESD ユネスコ世界会議を機会に、気づいた主体との連帯を戦略的に作りあげ、より影響力のあるアプローチを取ることができるよう、EPO 中部としては「協働」をキーワードに考えていくことが必要である。

学校教育における ESD の実践事例についての情報交換等の場については、今回 2 つのコンセプトでセミナーを実施し、参加者との対話を重ねた。

1 つは「校長先生サミット」である。学校における校長、つまり管理職の役割は重要である。校長が ESD に関心があり、学校の経営方針に組み込み、学校全体で ESD 実践を行っている事例がいくつかある。しかし、まだまだ少数であるのが実態である。この ESD 実践を、校長先生が異動したとしても継続して実施できるしくみづくり、ESD にあまり関心のない校長先生始め管理職の学校でも ESD 取組が行われるためのしくみづくり、そんなことをテーマに、ゲストに来ていただいた校長先生の問題意識を紐解きながら議論をした。
ゲストとしては、北陸東海地域の校長先生をお招きしたが、愛媛県新居浜市の教育長や、ESD カレンダーの作成で有名な東京の江東区立八名川小学校校長にも参加いただくことができた。

各学校の取組紹介から、 学校と地域の連携によって、学校教育における ESD 授業実践が展開され、関わった地域の ESD の理解が促進されていることを共有した。そして、成果を他地域に展開するために、継続するための何がしらの体制や予算確保の重要性が話された。また、この 10 年で実施できなかった「評価」についての課題提起もあった。

各地域では、大学、教育委員会、地域のユネスコ協会、NPO や中間支援組織、行政機関など、それぞれのイニシアティブで ESD 実践が進められている。地域の状況や資源によって実践の支えができつつある。この地域性に基づいた支援基盤をどのように形成していくか、他地域で展開する際には必須となるであろう。

参加者のアンケートから、「校長先生サミット」への評価は、90%（とても良かった含む）がよかったと評価した。校長先生の意見を聞く場がなかなかない、教育関係者の声を聞く場がない中で有意義だった、参考にできることが多かったというコメントを得た。

今回は十分な時間がなく、具体的な方策の検討ができなかったが、少なくとも、東海北陸、新居浜、江東区のもつ共通課題と改善のためのヒントを得ることができた。2015 年以降のキーワードは「評価」と「支援基盤形成」である。

「自己肯定感を育む ESD」をテーマにしたセッションにおいては、約 2 年余り、環境に特化せず、こども、国際理解、NGO、フェアトレードをテーマにした NPO との勉強会を重ね作成した「提案書」に基づき、グループワークを進めた。

作成した提案書に意見、アドバイスするとともに提案を具体的活動にするための方策について意見を交わした。参加者のほとんどが「自己肯定感の育み」に対する重要性に気づいており、家庭、学校、地域あらゆる場で、小さい時からまるごと子どもを包み込むような環境づくりの大切さが話された。また、子どもだけでなく、大人に対してもそういった場の必要性や環境づくりが必要であることを認識した。

「言葉」「ネットワーク」「協働」「子どもの主体性」「「子どもと大人の接点」「自分の可能性」「「表現する」といったキーワードがたくさん出されました。「自己肯定感の育みなくして未来はない」。参加者全員がうなづく場となった。持続可能な社会をつくるためには、参加と対話、協働が必須である。「自分」そして「自分と他者」の関係をうまくつくれなければ、担うことができにくい。ESD に自己肯定感の育みは必須であるし、ESD を実践するからこそ、自己肯定感が育まれる、と言う点も学び合うことができた。

2 つのセッションを通して扱うテーマは違ったが、今教育に必要な要素を共有し、認識し合うことができた。

持続可能な開発、持続可能な社会をつくる「教育」「学習」は、そのゴールが明確に提示されていないから実

践しにくい。しかし、今ある教育にかけている部分を補完し、弱い部分を強化し、そのための人材、人づくりが重要課題である。

ESD の 10 年キャンペーンの成果は、散在しているが、その重要さに気づいた主体が生じたことである。いかにつなぎ、連帯として、より多様な実践を展開していくかである。そして、その教育が実際に持続可能な社会づくりに貢献しているかどうか、の検証も必要になってくる。支える基盤の強化も必須である。

すべきことはたくさんあり、この 10 年の成果をきちんと重ね、次の課題を設定し、改善するまで戦略的にアプローチすること、そのための予算を確保すること、実施基盤及び支援基盤を形成・強化することなどが挙げられる。地域とともにこれらに応えてゆくことが望まれる。

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます
　この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料［Ａランク］のみを用いて作製しています。